

—— 千葉県市原市 ——

池ノ谷遺跡・福増遺跡

1 9 8 5

市 原 市 清 掃 施 設 課
財団法人 市原市文化財センター

序

文

市原市は、房総半島東京湾岸の中央部に位置し、恵まれた自然環境と地理的な環境のもとに古くより人々の生活の場・歴史の舞台として受け継がれ、発展をとげてきました。

市役所周辺の国分寺台には、上総国分寺・国分尼寺をはじめとし、県下でも有数の遺跡が数多く知られ、各時代にわたる文化財の分布は市域全体におよんでおります。

これらの文化財を保存・活用し後世に継承してゆくことは、我々市民に課せられた課題であり、切望するところですが、その一方で昭和30年代後半以降の京葉工業地帯の造成、道路網の充実、宅地開発、ゴルフ場建設などが増加の一途をたどっており、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回の調査地区である「池ノ谷遺跡」「福増遺跡」は、市原市福増に建設された福増清掃工場と農免道路とを結ぶ福増清掃工場搬入道路の路線上に位置し、記録保存を目的として関係諸機関相互の調整と協力をいただき、調査を実施しました。

本報告書は、この調査の成果をまとめたものであり、今後、埋蔵文化財の活用と保護思想の涵養に役立つことができれば幸いです。

調査にあたり、千葉県教育庁文化課、市原市清掃施設課、市原市教育委員会文化課をはじめ多くの方々に御協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

財 団 法 人	市原市文化財センター
理 事 長	星 野 一 郎

1. 本書は、千葉縣市原市山倉字堂後他の福増清掃工場搬入道路建設事業に先行して実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は、昭和58年度に調査の対象となった千葉縣市原市山倉字堂後501-1他に所在する「池ノ谷遺跡」および、千葉縣市原市福増六万部193-1 他に所在する「福増遺跡」についての資料報告である。
3. 発掘調査は、「池ノ谷遺跡」1700㎡、「福増遺跡」 800㎡を対象とし、市原市（担当課：清掃施設課）の依頼により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の要請と指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査は、確認調査を昭和58年 8 月29日～9 月30日、本調査を昭和58年12月 1 日～昭和59年 3 月31日に実施し、整理を昭和59年 4 月 1 日より昭和60年 3 月31日に実施した。
5. 調査は、調査課長 郷田良一のもとに、調査研究員 田所 真が担当し、調査研究員 森本和男、近藤 敏、高橋康男、調査員 鈴木英啓が協力した。
6. 整理は、調査課長 郷田良一のもとに、調査員研究員 田所 真が担当し、調査研究員 宮本敬一、米田耕之助、近藤 敏が協力した。
7. 本書の作成・執筆は、田所 真が担当し、縄文時代の遺物を米田耕之助が執筆した。
8. 調査および本書の作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、市原市（清掃施設課）、市原市教育委員会文化課をはじめとして、多くの方々に御指導、御協力をいただいた。

池ノ谷遺跡・福増遺跡
目次

序文
例言

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と地理的環境	3
III 調査の方法	6
1. 発掘の方法	6
a) 池ノ谷遺跡	6
b) 福増遺跡	7
2. 整理の方法	7

池ノ谷遺跡

I 池ノ谷遺跡周辺の歴史的環境	9
II 遺構と遺物	13
1. 遺構の種類と分布	13
2. 井戸跡 (No.1 遺構)	25
a) 遺構	25
b) 遺物	27
3. 溝状遺構 (No.2 遺構～No.11遺構)	40
No.2 遺構	40
No.3 遺構・No.4 遺構	40
a) 遺構	40
b) 遺物	41
No.5 遺構	42
No.6 遺構	43
No.7 遺構	43
a) 遺構	43
b) 遺物	43
No.8 遺構	44

No.9遺構	45
No.10遺構	45
No.11遺構	46
4. 土坑状遺構 (No.12遺構～No.18遺構)	48
No.12遺構・No.13遺構	48
No.14遺構	49
No.15遺構・No.16遺構	49
No.17遺構	50
No.18遺構	51
5. ピット (No.19遺構～No.67遺構)	52
No.63遺構～No.66遺構	52
No.48遺構	52
ピット内出土遺物	54
6. 堰跡 (No.68遺構)	54
7. 遺構外出土遺物	56
〔Ⅰ〕類および〔Ⅱ〕類遺物包含層	56
池ノ谷遺跡出土の縄文時代遺物 (米田耕之助)	64
III まとめ	70

福増遺跡

I 福増遺跡周辺の歴史的環境	77
II 基本層序	78
III 遺構と遺物	80
1. 遺構の種類と分布	80
2. 福増3号墳	81
a) 調査時の現状	81
b) 調査区設定の方法	81
c) 墳丘の構造	83
d) 周溝	84
e) 内部施設	84
f) 周溝内土器の出土状態	84

g) 出土遺物	87
周溝内出土の須器有蓋高坏	88
墳丘表土層内出土の埴輪片	88
墳丘表土層および周溝内出土の須恵器と土師器	88
旧表土層内出土の浅鉢	91
墳丘盛土内及び墳丘下出土の縄文土器 (米田耕之助)	92
h) 福増3号墳の編年の位置付け	97
3. 道路状遺構 (No. 1 遺構～No. 4 遺構)	101
No. 1 遺構・No. 2 遺構	101
No. 3 遺構	101
No. 4 遺構	102
4. 土坑状遺構 (No. 5 遺構・No. 6 遺構)	102
No. 5 遺構	102
No. 6 遺構	103
5. 溝状遺構 (No. 7 遺構)	104
No. 7 遺構	104
6. 福増遺跡出土の石鏃	105
IV まとめ	106

挿 図 目 次

図1. 池ノ谷遺跡・福増遺跡の位置と周辺の地形	2
図2. 池ノ谷遺跡・福増遺跡周辺の地形と字名	5
図3. 池ノ谷遺跡・グリッド配置図	6
図4. 福増遺跡・グリッド配置図	7
図5. 池ノ谷遺跡周辺の遺跡	10
図6. 調査区域内遺溝配置図	15～16
図7. 第1グリッド内遺溝実測図	18
図8. 第2グリッド内遺溝実測図	19
図9. 第3グリッド遺溝実測図	20
図10. 第3グリッド内溝状遺溝・ピット実測図	21
図11. 第4グリッド内遺溝実測図	22

図12. 第3. 第4グリッド内溝状遺構・ピット実測図	23
図13. 第4グリッド・第5グリッド内遺構実測図	24
図14. No.1遺構実測図	26
図15. No.1遺構出土遺物〔Ⅰ〕	29
図16. No.1遺構出土遺物〔Ⅱ〕	31
図17. No.1遺構出土遺物〔Ⅲ〕	35
図18. No.1遺構出土遺物〔Ⅳ〕	37
図19. No.3遺構・No.4遺溝出土遺物	41
図20. No.5遺構出土鉄床石	43
図21. 溝状遺構内出土遺物	46
図22. No.12遺構 No.13遺構実測図	48
図23. No.12遺構出土遺物	49
図24. No.14遺構実測図	49
図25. No.15遺構 No.16遺構実測図	50
図26. No.17遺構実測図	51
図27. No.18遺構実測図	51
図28. No.58遺構内出土遺物	54
図29. No.68遺構実測図	55
図30. No.68遺構内出土遺物	56
図31. 遺構外出土遺物〔Ⅰ〕	59
図32. 遺構外出土遺物〔Ⅱ〕	61
図33. 遺構外出土遺物〔Ⅲ〕	62
図34. 遺構外出土遺物〔Ⅳ〕	63
図35. 遺構外出土遺物〔Ⅴ〕	65
図36. 遺構外出土遺物〔Ⅵ〕	66
図37. 遺構外出土遺物〔Ⅶ〕	67
図38. 遺構外出土遺物〔Ⅷ〕	67
図39. 福増古墳群古墳分布図	78
図40. 福増遺跡 トレンチ配置 および基本層序図	79
図41. 調査範囲内遺構配置図	80
図42. A区地形測量図	81
図43. 福増3号墳 墳丘実測図	82

図44 古墳断面図	85～86
図45 福増3号墳出土遺物実測図	89
図46 縄文土器拓影図	93
図47 縄文土器拓影図	95
図48 縄文土器拓影図，実測図	96
図49 No.1. No.2（道路状遺構）実測図	100
図50 No.3 遺構（道路状遺構）実測図	101
図51 No.4 遺構（道路状遺構）実測図	102
図52 No.5 遺構（土坑）実測図	103
図53 No.6 遺構（土坑）実測図	103
図54 福増遺跡 B区 溝状遺構実測図	104
図55 福増遺跡出土石鏃実測図	105

図 版 目 次

図版1	池ノ谷遺跡，福増遺跡周辺の航空写真
図版2	1. 第1グリッド（東側から） 2. 第2グリッド（東から）
図版3	1. 第3グリッド（東側から） 2. 第4グリッド（東側から）
図版4	1. 第5グリッド（西側から） 2. No.1 遺構 No.2 遺構（北側から）
図版5	1. No.1 遺構内遺物出土状態（〔II〕層中間） 2. No.1 遺構内遺物出土状態（〔II〕層下面）
図版6	1. No.1 遺構内ヒョウタン出土状態（〔I〕層上層） 2. No.1 遺構内遺物出土状態（〔II〕層下層）
図版7	1. No.3. No.4 遺構西半部検出状態 2. No.3 遺構土層断面
図版8	1. No.3. No.4 遺構・土層堆積状態 2. No.5 遺構（北側から）
図版9	1. No.7 遺構覆土堆積状況 2. No.8 遺構（東側から）

- 図版10 1. №8 遺構堆積状況－1 (北端)
2. №8 遺構堆積状況－2
- 図版11 1. №8 遺構堆積状況－3
2. №8 遺構遺物出土状況
- 図版12 1. №9 遺構 (南側から)
2. №12. №13 遺構 (西側から)
- 図版13 1. №12. №13 遺構湧水堆水状況 (西側から)
2. №14 遺構 (北側から)
- 図版14 1. №14 遺構覆土堆積状況 (北側から)
2. №15 遺構 (北側から)
- 図版15 1. №16 遺構 (北側から)
2. №17 遺構覆土堆積状況 (西側から)
- 図版16 1. №17. №18. 遺構 (北西から) 奥はB－6区
2. №42 遺構 (北側から)
- 図版17 1. 堰跡トレンチ確認状況
2. 堰跡堆積状況－1
- 図版18 1. 堰跡状況－2
2. 堰跡堆積状況－3
- 図版19 1. B－6区全景 (調査状況)
2. B－6区堆積状況 (部分)
- 図版20 1. 遺構内出土遺物〔I〕
- 図版21 1. 遺構内出土遺物〔II〕
- 図版22 1. 遺構内出土遺物〔III〕
- 図版23 1. 遺構内出土遺物〔IV〕
- 図版24 1. 遺構内出土遺物〔V〕
- 図版25 1. 遺構外出土遺物〔I〕
- 図版26 1. 遺構外出土遺物〔II〕
- 図版27 1. 遺構外出土遺物〔III〕
- 図版28 1. 遺構外出土遺物〔IV〕
- 図版29 1. 遺構外出土遺物〔V〕
- 図版30 1. 遺構外出土遺物〔VI〕
- 図版31 1. 遺構外出土遺物〔VII〕

- 図版32 1. 遺構外出土遺物 〔Ⅷ〕
- 図版33 1. 遺構外出土遺物 〔Ⅸ〕
- 図版34 1. 遺構外出土遺物 〔Ⅹ〕
- 図版35 1. 基本土層
2. 福増3号墳表土除去後 (西側から)
- 図版36 1. 福増3号墳 (西南から)
2. 福増3号墳 (西側から)
- 図版37 1. 福増3号墳 墳丘調査状況
2. 福増3号墳 墳丘盛土構築状況
- 図版38 1. 福増3号墳 墳丘盛土構築状況
2. 福増3号墳 周溝内覆土堆積状況 (東側)
- 図版39 1. 福増3号墳 周溝内覆土 (南側) および No.3 遺構覆土堆積状況
2. 福増3号墳 周溝内遺物出土状況
- 図版40 1. No.1 遺構 (西側から)
2. No.1 遺構内覆土堆積状況－1
- 図版41 1. No.1 遺構内覆土堆積状況－1
2. No.1 遺構 No.2 遺構内覆土堆積状況－2
- 図版42 1. 福増3号墳周溝覆土 (西南側) および No.3 遺構覆土堆積状況
2. No.4 遺構内覆土堆積状況
- 図版43 1. No.4 遺構 (東側から)
2. No.5 遺構 (南側から)
- 図版44 1. No.6 遺構覆土状況
2. No.6 遺構 (西側から)
- 図版45 1. B区全景
2. No.7 遺構 (西側から)
- 図版46 1. 福増遺跡出土遺物 〔Ⅰ〕
- 図版47 1. 福増遺跡出土遺物 〔Ⅱ〕
- 図版48 1. 福増遺跡出土遺物 〔Ⅲ〕
- 図版49 1. 福増遺跡出土遺物 〔Ⅳ〕

I 調査に至る経緯

昭和55年9月29日付けで、市原市長井原恒治は、市原市福増清掃工場（当時仮称）の建設に伴う進入道路建設に先がけ「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出した。それを受けて現地踏査とテストピットを実施した結果、昭和56年1月9日付けで千葉県教育長より、土師器散在地2ヶ所の回答がなされた。その遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会教育庁文化課、市原市清掃施設課および市原市教育委員会による再々の協議の結果、記録保存をする結論となった。

発掘調査は、調査対象地区土師器散布地（池ノ谷遺跡）1700㎡福増遺跡（古墳群）800㎡を（財）市原市文化財センターへの委託事業として昭和58年8月29日より開始した。

（市原市教育委員会文化課）



図1 池ノ谷遺跡、福増遺跡の位置と周辺の地形

Ⅱ 遺跡の位置と地理的環境

市原市は、房総半島の西北部に位置し、東京湾岸の八幡宿から姉崎に至る海岸線より内陸へ延びて養老溪谷に至る、旧市原郡全域を包括する地域である。

地形的には、南部に北—北北西の単斜構造を持つ上総丘陵が聳え、北部に浅い谷を樹枝状に発達させた下総台地が続いている。市域のほぼ中央には、清澄山系を源泉とする養老川が流れ、両岸に河岸段丘面を、また下流域に広い沖積地と三角州性低地とを形成して東京湾へ注ぐ。

今回調査を実施した「池ノ谷遺跡」および「福増遺跡」は、養老川の下流域に属している。

房総丘陵を侵食、蛇行しながら下流域へとおよんだ養老川は、大坪・海士有木の微高地西側においてうねり、海浜部の三角州性低地へと流路を変える。海士有木の微高地は、養老川右岸最下流域の洪積世河岸段丘面（有木面：木村 1978）にあたり、これをとり囲む後背台地からは、数条の小開析谷が延びている。池ノ谷遺跡と福増遺跡とは、この開析谷群の最南端にあたる猿が谷、池ノ谷の開口部と谷頭部とにあたっており、地形的には海士有木の河岸段丘面上と後背台地上とに立地する。（第1図）

海士有木の河岸段丘立面は、現在の前廣神社参道前あたりから、海士有木の泰安寺・八幡神社を経て白山神社に至る線より台地寄りの133200㎡で、上面は東から西へ向かって緩やかに傾斜している。

当地域に関する地質学的な調査は、木村泰治氏によって行なわれている（木村1978）。それによると、海士有木の微高地（有木面）は、養老川流域の洪積世段丘面の最下位面にあたり、表土の下層に立川ローム層の堆積が確認されている。⁽²⁾（しかし、池ノ谷遺跡の調査範囲内においては明確な立川ロームの堆積を認めることができなかった。）

微高地上の地理的景観は、海士有木の集落およびその北側に広がる畑作・荒蕪地と、山倉の集落前面に広がる水田景観とに分けられる。これは、後背台地から微高地に延びた数条の開析谷が、形成過程において微高地をも侵蝕したため水田に適した地形をつくり出したことによる⁽³⁾と考えられ、地籍図に観られる地割りの在り方にも、侵蝕谷の痕跡がよく反映されている。

池ノ谷に連続すると考えられる水田には「北堀」という小字名が観られる。ここは微高地の南端に位置する有木城の北堀にあたり、自然地形を利用したものである。中世における平城の堀は、通常水田として利用されていたことが知られており、「北堀」についても同様であった⁽⁴⁾ものと推測される。他方、池ノ谷は調査時においても比較的に安定した量の湧水が流れており、谷そのものも微高地に面する開析谷としては最も発達したものとなっていた。字「池ノ谷」の地に池の存在した証左は得られていないが、「池」を水に関わる地理的景観の形容と考えるな

らば、池ノ谷は湧水の豊かな当地の字名として相応しい字名とすることができ、「北堀」についても、小河川が存在していた可能性が考えられるのである。（第2図）

このことから翻って池ノ谷遺跡の立地的景観を考えるならば、池ノ谷を開析した旧小河川が、池ノ谷遺跡の東南部をかすめて海士有木の微高地を西進し、現在の小湊線海士有木駅あたりで他の流れと合流して養老川へ注いでいたものと推測することができる。（後章にて報告するB4区以東の遺物包含層は、この旧小河川の一部か。）

福増遺跡は、池ノ谷の谷頭部、洪積台地上に位置しており、古老の話によれば海士有木の微高地から本遺跡に至る谷添いに「馬車道」とよばれる道が通っていたそうである。この馬車道が、いつ頃から使われていたかは明らかではないが、福増遺跡において検出された道路状遺構⁽⁵⁾の存在、池ノ谷と福増の中間に位置する猿ガ谷遺跡（鬼高期）の存在、微高地上の有木城跡および土器器散布地の存在等を考え合わせると、比較的古い時期から使われていたものと考えられる。

註

(1) 養老川流域の河岸段丘は、中～下流域に著しい発達をみせており、基本的には三段の面に分けられる。

多数の河岸段丘を形成している河川の類例としては、小櫃川があげられるこれは、両河川がともに洪積層を基盤としているために、段丘面形成にあずかる海水準変動や隆起運動のわずかな変化を、克明に記録した結果であると考えられている。（木村泰治「市原市の地形」『市原市史（別巻）』1978）

(2) 木村泰治 前掲書

(3) 海士有木の微高地にみられる小字名を整理すると、概して古代海士郷に関するもの、中世有木城に関するもの、現在の春日神社・円葉寺に関するもの、地形に由来するものなどに分けることができる、この中から、現在の水田面にあたる小字を後背台地の開析谷との関係で拾い出してみると、「若宮」の谷からは「後田」→「下田」→「西嶋」→「西ヶ崎」のルートが、また「棒坂」「栗山」の谷からは「沖田」「堂道」→「竹越」→「下田」のルート、或いは「栗山」から「老尻」→「渡戸」→「山ノ王」→「下田」のルートが考えられ、これに「猿ヶ谷」「池ノ谷」→「北堀」→「西ヶ崎」と「上葉様」→「下葉様」→「西ヶ崎」のルートが「西ヶ崎」で合流している。このうち、「堂道」「竹越」「老尻」「渡戸」「山ノ王」については、地形・景観に直接結びつく字名ではないが、これらの小字に取り囲まれた微高地の字名が、メアングーの袂にみられる様な「中島」であることを考慮すれば、小河川跡とみなすことができる。

尚、「西嶋」を、「池ノ谷」→「西ヶ崎」ルートの下刻作用と結びつけて考えることが許されるとするならば、同ルートは、「西嶋」以北の旧河川の活動衰退後も、小河川として存続していたものと推測することができる。

(4) 鈴木英啓氏の御教示による。

(5) 調査終了後の建設工事中に発見されている。小字名をとって「猿が谷遺跡」と仮称しておく。鈴木英啓氏の御教示による。



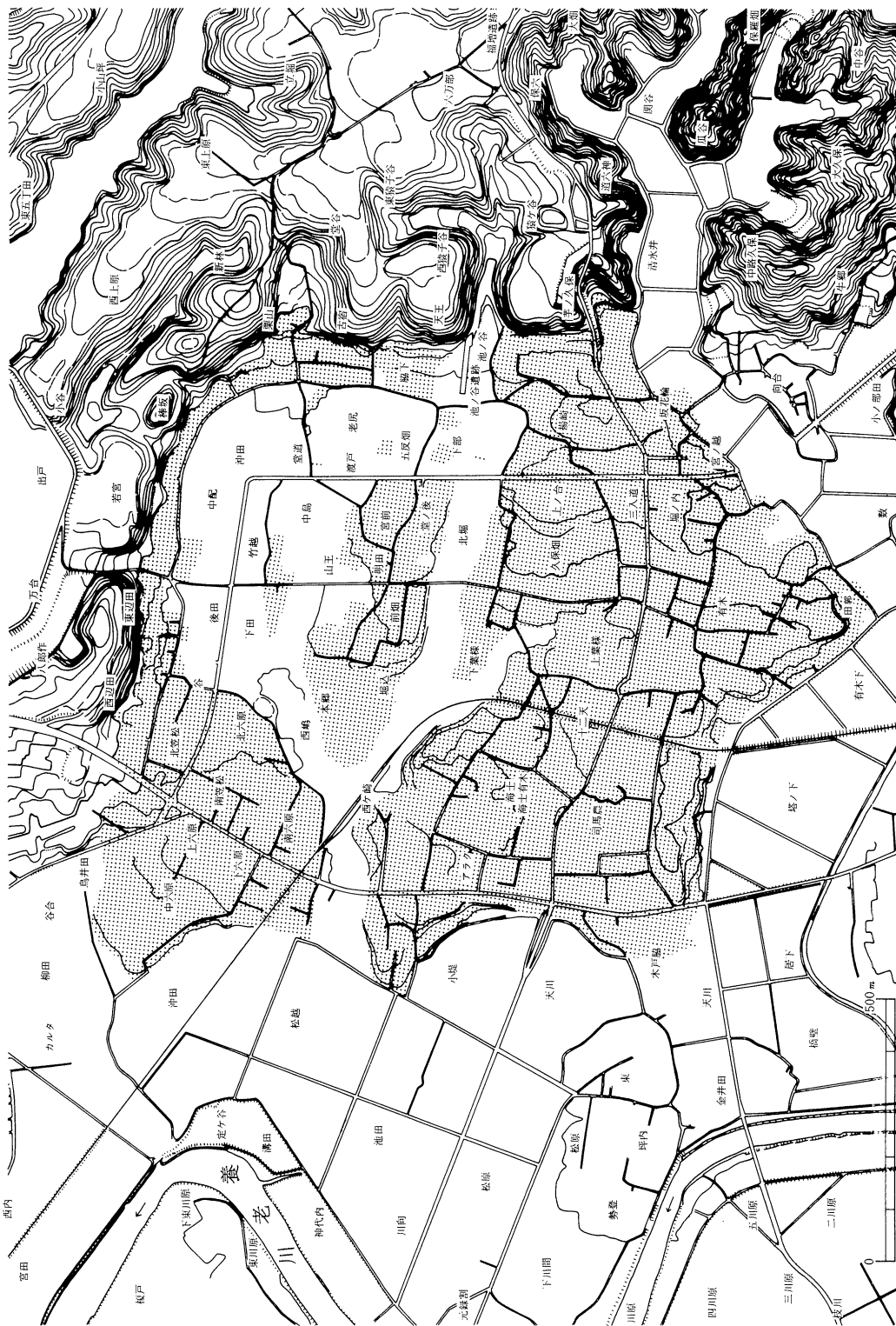


図2 池ノ谷遺跡・福増遺跡の地形と字名

Ⅲ 調査の方法

1. 発掘の方法

調査の対象となった「池ノ谷遺跡」と「福増遺跡」とは、遺跡の立地や遺構の性格の違いから、それぞれの遺跡に適したグリッドの設定による調査方法を採用した。

a. 池ノ谷遺跡（図3）

発掘区は、任意座標による20mピッチの工事用センター杭を基準とし、センターラインに直交する線で区割り設定した大グリッド（20m×20m）の方眼を基本とた。グリッドの呼称は、センターラインより北側をA区、南側をB区とし、東西方向は西側より1～6列として、この座標の組み合わせによって個々のグリッド名とした（例：A-4）。また、調査の進捗に伴い、細分化を要する大グリッドについては（B4区以东のB区）、25の小グリッド（4m×4m）によって細区割した。

確認調査の時点では、各大グリッド内に2m×6m程度のトレンチを、A区とB区とが交互になる様な形で配置し、調査対象面積の約10%を目処として入れた。この結果、遺構の密度は濃くないものの、全面にわたって遺構および遺物の分布していることが判明したため、予定区域全面の本調査を実施することとなった。

表土の除去にあたっては、確認調査において一部慎重な掘り下げを実施することによって、遺跡全域が数次にわたる水田および畑作による耕作土によって被覆していることが判明したため、重機によって実施した。

遺物は、遺構内出土のものについてはポイントレベルの記録を基本としたが、覆土中出土の小片は層位のための記録にとどめ、遺構確認時に出土した遺物等については、グリッドごとに取りあげた。

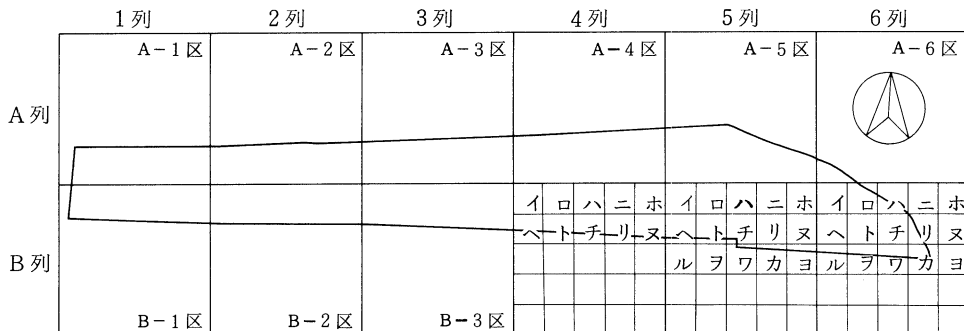


図3 池ノ谷遺跡グリッド配置図

B4区以東，B区下層に拡がって泥炭層の発達を観察された遺物包含層については，上述の小グリットによる取りあげを基本としたが，層位的な関係はとらえられず，調査も最下層まで至っていない。

b. 福増遺跡（図4）

福増遺跡の調査対象範囲は，その東側で私道によって分割されていた。このため，調査の時点では，私道の西側をA区，東側をB区と便宜上分けて調査を行なった。

確認調査は，周知されていた福増三号墳の周溝の確認と，周辺部の遺構の有無を目的として実施した。この結果，B区において溝状遺構の存在が判明し，A区においても道路上遺構の存在が判明するとともに，三号墳の周溝が東側において既存の私道下に延びている可能性のあることが明らかになった。

B区の調査は，周溝の調査に伴う私道の迂回路を確保するためにA区に先行して実施した。A区との関係はトラバース測量によって求め，特にグリッドの設定は行っていない。

A区では，福増三号墳がその主体となる調査対象であったため，10cmコンターによる地形測量の後，墳頂部の推定中心部を基準とし，工事用センターラインと一辺の方位が一致する4m間隔のグリッドを設定して実施した。

福増三号墳は，全体を墳頂部より均等に放射線状に八分割し，調査区域内に5本の土層観察用のベルトを残して表土を除去した。周溝の検出は表土の除去と平行して行ない，墳丘測量ののちに盛土を精査して主体部の検出につとめた。

先土器時代に関しては，調査対象区域の約2%を目処とし，確認グリッドを設定して調査した。この結果，第V層よりチップが検出されたため拡張して調査したが，追加資料は認められなかった。

遺物は，西側周溝内より須恵器の有蓋高坏3セットを一括資料として得たが，いづれも周溝底よりやや高い位置の周溝内径より出土しており，周溝底との間に間層が観られたので層位的な記録のみにとどめ，他は調査区ごとに取り上げた。

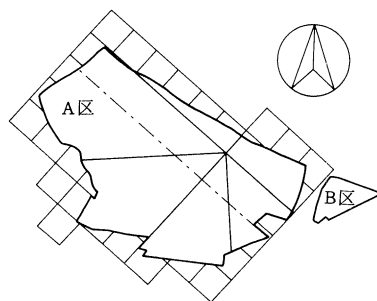


図4 福増遺跡グリッド配置図

2. 整理の方法

整理は，「池ノ谷遺跡」「福増遺跡」ともに一般的な方法によった。土器は，器形の特徴がわかるもののみを対象とし，他は接合関係のチェックと遺構ないしはグリットごとの数量表を

作成した。

尚、「池ノ谷遺跡」より出土した緑釉陶器および灰釉陶器については、名古屋大学文学部助手斎藤孝正氏に、また墨書土器については、国立歴史民族博物館助教授平川南氏に観ていただき、御教示を賜った。

また、須恵器については、静岡県湖西市教育委員会後藤健一氏の御好意により、湖西古窯の製品を拝見させていただくとともに、同氏ほか多くの方々から御教示を賜った。

池ノ谷遺跡

I 池ノ谷遺跡周辺の歴史的環境

池ノ谷遺跡の位置と周辺の地理的環境については、前述（II）において述べたとおりである。海士有木の微高地東南部にあたる調査区域内からは、平安時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。

この海士有木の微高地は、『倭名類聚抄』にみられる「上総國市原郡海部郷」に比定されており、微高地上に鬼高期以降の遺物が広く分布している。⁽¹⁾

遺跡周辺の古墳の分布をみると、海士集落内の泰安寺南側に前方後円墳二基を含む海士古墳群が知られており、これより南に向かって有木古墳群・武士古墳群が微高地上に続く。⁽²⁾一方、台地上では、本報告書掲載の福増古墳群を南端として、山倉古墳群・持塚古墳群・上神台古墳群・東間部多古墳群・諏訪台古墳群・天神台古墳群とほぼ間断なく続いている。⁽³⁾

奈良・平安時代の遺跡としては、微高地上に池ノ谷遺跡と海士遺跡とが知られており、他に有木字「揚場」において平安時代のものと考えられる仏像が表採されている。また、台地上では、上総國分寺、國分尼寺をはじめとして、持塚遺跡・蛇谷遺跡・南田瓦窯・荒久遺跡・本郷遺跡・宮ノ前遺跡などの国分寺台内の遺跡群や、「寺」の墨書がみられる坏等を出土した千草山遺跡や山田橋遺跡などが北方に分布し、南方では武士廃寺址が知られている。尚、養老川の対岸にあたる市原市西野において現在調査が進められている西野遺跡で、井戸群などが検出されている。⁽⁴⁾

中近世の遺跡としては、微高地南端に蟻木城址が知られており、戦国期の蟻木城主二階堂実綱の墓標といわれる石造十三重塔が現存するほか、海士遺跡の部分的な調査において、当城の外郭敷設と推定される柵列が検出されている。⁽⁵⁾

註

(1) 『倭名類聚抄』によると、市原郡は海部・市原・江田・湿津・山田・菊麻の六郷からなり、海部については、高山寺本に「安万」、大東急記念文庫蔵本に「阿万」と訓じている。

尚、『正倉院宝物銘文集成』に収められている天長五年十一月の正倉院庸布銘文には、「海部郷戸主刑部小黒人」の名が見えている。

(2) 図上No.9にみられる前方後円墳は、現在の市西小学校校庭に所在する学校塚古墳である。全長 14.80m 埴輪を樹立していたが、現在では半壊している。尚、同校敷地内には、他に二基の円墳が築造されていた学校塚を北限として数基の古墳が群集していたものと考えられる（有木古墳群）。

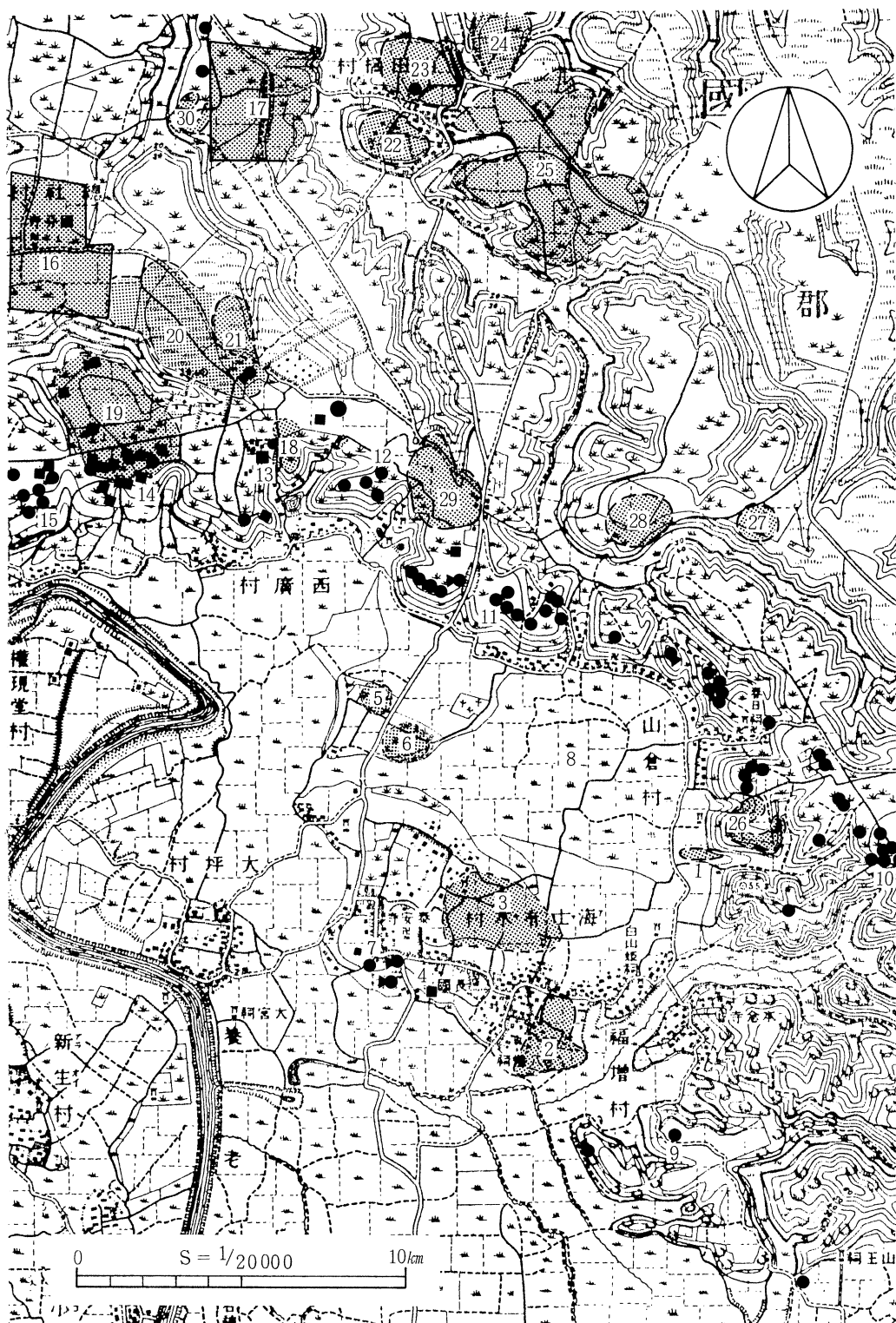


図5 池ノ谷遺跡周辺の遺跡

表 1 周 辺 遺 跡 名 一 覧 表

No.	遺 跡 名	時 期	種 別	備 考
1	池ノ谷遺跡	古墳～	包含地	
2	蟻木城跡	中近世	城跡	(文献)⑥
3	海士遺跡	弥生～奈良, 平安	包含地	新殿古墳 1号墳前方後円墳全長305m 2号墳円墳 径8m 3号墳前方後円墳全長20.3m
4	海士古墳群	古墳	古墳	
5	六原遺跡	古墳	包含地	
6	行人塚遺跡	古墳	包含地	
7	有木供養塚	中近世	塚	
8	山倉遺跡	古墳	包含地	
9	有木古墳群	古墳	古墳	
10	福増古墳群	古墳	古墳	(文献)⑦
11	山倉古墳群	古墳	古墳	
12	持塚古墳群	古墳	古墳	
13	上神台古墳群			
14	東間部多古墳群	古墳	古墳	(文献)⑧
15	諏訪台古墳群	古墳	古墳	(文献)⑨⑩
16	上総國分寺跡	奈良, 平安	寺院跡	(文献)①②③④
17	上総國分尼寺跡	奈良, 平安	寺院跡	(文献)①②④⑤
18	持塚遺跡	縄文中期, 奈良, 平安	包含地	
19	蛇谷遺跡	縄文～奈良 平安	集落跡	灰釉, 縁釉
20	荒久遺跡	奈良, 平安～	集落跡, 墳墓址	(文献)⑪
21	南中台遺跡	弥生後期～古墳前期	集落跡	
22	本郷遺跡	縄文, 奈良, 平安以降	包含地	
23	宮の前遺跡	縄文, 奈良, 平安以降	包含地	(文献)⑫
24	千草山遺跡	縄文, 奈良, 平安	集落跡	(文献)⑬
25	山田橋遺跡	縄文, 古墳	包含地	
26	山倉天王貝塚		貝塚	(文献)⑭
27	分廻り貝塚			
28	山倉貝塚	縄文中期～後期	貝塚他	(文献)⑮
29	西広貝塚	縄文中期～晩期, 弥生		(文献)①⑯
30	祇園原貝塚			(文献)①

① 千葉県教育委員会『千葉県史跡名勝天然記念物調査報告書第1輯—市原遺跡発掘調査概報—』(1949年)。

② 上総國分寺址調査団『昭和42年度上総國分寺址調査報告』(1968年)。

③ 上総國分寺址調査団『昭和43年度上総國分寺址調査報告』(1969年)。

④ 滝口宏『上総國分寺』(1973年)。

⑤ 千葉県教育委員会『昭和45年度上総國分尼寺址調査略報』(1971年)。

⑥ 『市原郡誌』『上総町村誌』

⑦ 中村恵次他,『福増古墳群』『市原市周辺地域の調査』

⑧ 『上総國分寺台遺跡調査団』『東間部多古墳群』

⑨ 『上総國分寺台発掘調査概報』(1982年)

⑩ 『上総國分寺台発掘調査概要ⅩⅡ』(1984年)など

⑪ 平野元三郎『下あらく遺跡』(「日本考古学年報24」)(1973年)

⑫ 平野考古学研究所『宮前遺跡第1次, 第2次調査報告書』(1976年)

⑬ 『千草山遺跡』

⑭ 『伊知波良』2(1979)

⑮ 『山倉貝塚』早大

⑯ 市毛勲, 戸田健『千葉縣市原市西広貝塚』

武士古墳群は、分布図に掲載し得なかったが、有木古墳群の南側に所在しており、鍋塚古墳（径 30.00 m、高さ4.40m）を取り囲む様に八幡越古墳、タルガ塚、稲荷塚、馬頭塚などが群集しており、北方台地にやや離れて人見塚古墳（前方後円墳）が所在している。

尚、人見塚古墳に隣接して武士廃寺址が所在している。

- (3) 国分寺台の遺跡については、上総國分寺台遺跡調査団によって分布調査が実施され『東関部多古墳群—上総國分寺遺跡調査報告Ⅰ—』にまとめられているので参照されたい。
- (4) 千葉県文化財センターによって調査が進められており、調査員の御好意によって実見させていただいた。養老川左岸の沖積微高地上に立地しており、木柢をもつ井戸跡が検出されている。
- (5) 昭和54年に調査されている。田中清美氏の御教示による。

分布図の作成にあたっては、明治16年測量の「迅速測図二万分の一」（八幡宿）を原図とし「千葉県市原市埋蔵文化財包含地カード」および全分布図、『東関部多古墳群—上総國分寺台遺跡調査報告書Ⅰ—』（昭和49年）、『文化庁全国遺跡地図（千葉県）』を参考とした。

Ⅱ 遺 構 と 遺 物

1. 遺構の種類と分布 (図 6～13)

調査区域内より検出された遺構は、井戸跡 1 基、溝状遺構 10 条、土杭 7 遺構、小ピット 49 ヶ所、堰跡 1 基の計 68 遺構であった。

井戸跡は調査区域の西端にあたる B-1 区より検出されており、上層の一部を溝状遺構 (No. 2 遺構) によって切られている。遺構内には、木杵、曲物などの遺存が認められず、周囲にも排水溝・上屋などの諸施設は認められなかった。土師器の坏類などのほか、韃の羽口・鉄滓・瓢箪などが出土している。

溝状遺構は井戸跡と重複する No. 2 遺構とその東側の No. 3 遺構・No. 4 遺構とを除き、概ね A-3・B-3 区と A-4・B-4 区とに集中している。遺構の時期や前後関係については、供伴する遺物で時期の決定におよぶ資料が少ないため不明瞭とならざるを得ないが、立地や軸の方位、切り合い関係などから、概ね以下のように類別することができる。

A-3・A-4 区の北端を東から西へ傾斜する No. 7 遺構に対して、東端で No. 11 遺構が接続しほぼ中央で No. 10 遺構が接続している。No. 7 遺構では、数度の造り変えが確認されているので必ずしもこれらの遺構が同時期の所産とは考えられないが、No. 7 遺構を中心とした一連の遺構として捉えられる。No. 10 遺構に平行する No. 9 遺構については、No. 7 遺構の手前で止まっており、上記 3 遺構との関係を掴むことは困難である。しかし、北端の小ピット (No. 45 遺構・No. 46 遺構) が No. 7 遺構から取水するための付属設備を意味するものであると仮定するならば、立地と軸の方位から No. 7 遺構などとの関連性を考えることも可能であろう。(A 類)

尚、No. 7 遺構の西端は、やや北折して調査区域外へ延びている。

A-3・B-3 区のほぼ中央を南から北へ傾斜している No. 6 遺構は、No. 7 遺構の西端手前で西へ屈曲し、細い排水溝が連続している。この排水溝は巾の狭い不明瞭なもので、A-2 区では確認されなかったが、地形的には No. 5 遺構の北端を経て東側へ延びていた可能性が考えられる。(B 類)

No. 3 遺構と No. 4 遺構とは、平行しており No. 4 遺構の方がやや深い。切り合い関係から No. 3 遺構の方が新しいが、時期的には連続するものと思われる。(C 類)

No. 8 遺構は東南から西北へ傾斜する V 字溝で、切り合い関係から No. 7 遺構・No. 9 遺構より古いことが確認されている。(D 類)

No. 5 遺構は、調査区域内で完結する唯一の溝である。性格は不明であるが、遺構内より古鍛

冶に使用される鉄床石が出土しており、近似した材質の石塊が井戸跡内で轆の羽口などと供伴していることから、同時性を示唆しているものとも考えられる。(E類)

各類型間で時期的な前後関係が捉えられるものは、D類→A類のみであり、時期別の分布は十分には捉えられない。

土坑は、A-1区、B-3区、A-5・B-5区に各2～3遺構ずつ分布している。このうち、井戸跡に隣接したA-1区から検出されたNo12遺構とNo13遺構とは、供伴した遺物から井戸跡の時期に前後するものと考えられる。また、B-5区のNo17遺構では、No11遺構との切り合い関係から、No11遺構→No17遺構であることが確認されている。しかし、他の土坑については不明であり、時期別の分布は十分に捉えることができない。

小ピットの検出数は49ヶ所で、調査区域内の遺構総数の70%以上を占めている。このうち、ピット相互の関係がわかるものは、No63・No64・No65・No66遺構からなる方形のプランのみで他はまったく規則性を見出すことができなかった。しかし、No48遺構については、径・深度ともに他のものを凌いでおり、掘り方も比較的にしっかりとしている。遺構の深度が、確認面より約80cmで、地下水の透過層を切っており、比較的に安定した清水が得られたことから、調査当初はNo10遺構(溝状遺構)との関連を考えて、No1遺構(井戸跡)やNo12遺構(土坑)に類する遺構と考えたが、断面観察による覆土の堆積状況から掘立柱の建物の柱穴である可能性が出てきた。同規模のピットが調査区域内からは他に検出されていないことから、明らかではない。

他の小ピット群については、A-3・B-3区、A-4・B-4区に集中していることを指摘し得るにとどまる。

堰は、調査区の東端に築かれたものであり、地形的には谷の開口先端部にあたる。調査当初後背台地より延びる自然地形を利用したものと考えていたが、下層に遺物包含層が認められたことから、人工による治水堰と判断した。構築の時期は不明であるが、①堰の客土に遺物の混入が殆ど認められないこと、②客土の大半が山砂であること、③堰に面する斜面にカット面がみられること、④構築に際して、盤築されていないこと、⑤堰の表土層内から中・近世の遺物が検出されること等々から、池ノ谷前面の農地化に伴う湧水の灌漑利用を目的とした近世以降の構築物と考えられる。

以上が、今回の調査区域内より検出された遺構の種類と分布であるが、他にB-4区からA-6・B-6区にかけて鬼高期から奈良・平安時代に至る遺物を包含する深い落ち込みがみられた。湧水の流入が著しく、調査が困難であったため小グリッドごとによる遺物の回収をしたが、完掘できず、層位関係も全く捉えられなかった。包含していた遺物は、須恵器の坏類・甕類、土師器の坏類、緑釉陶器片、灰釉陶器片・瓦片などであった。

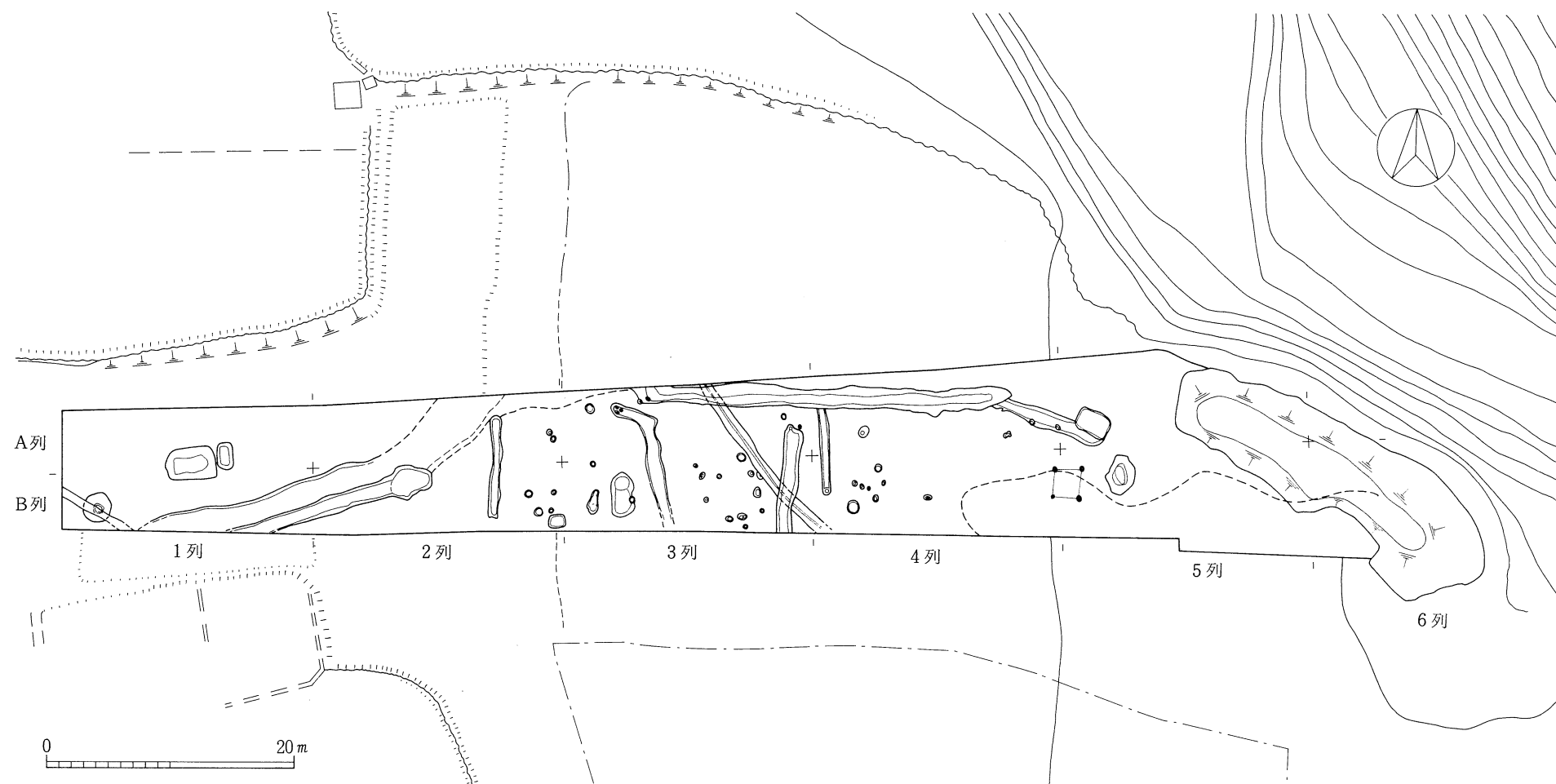
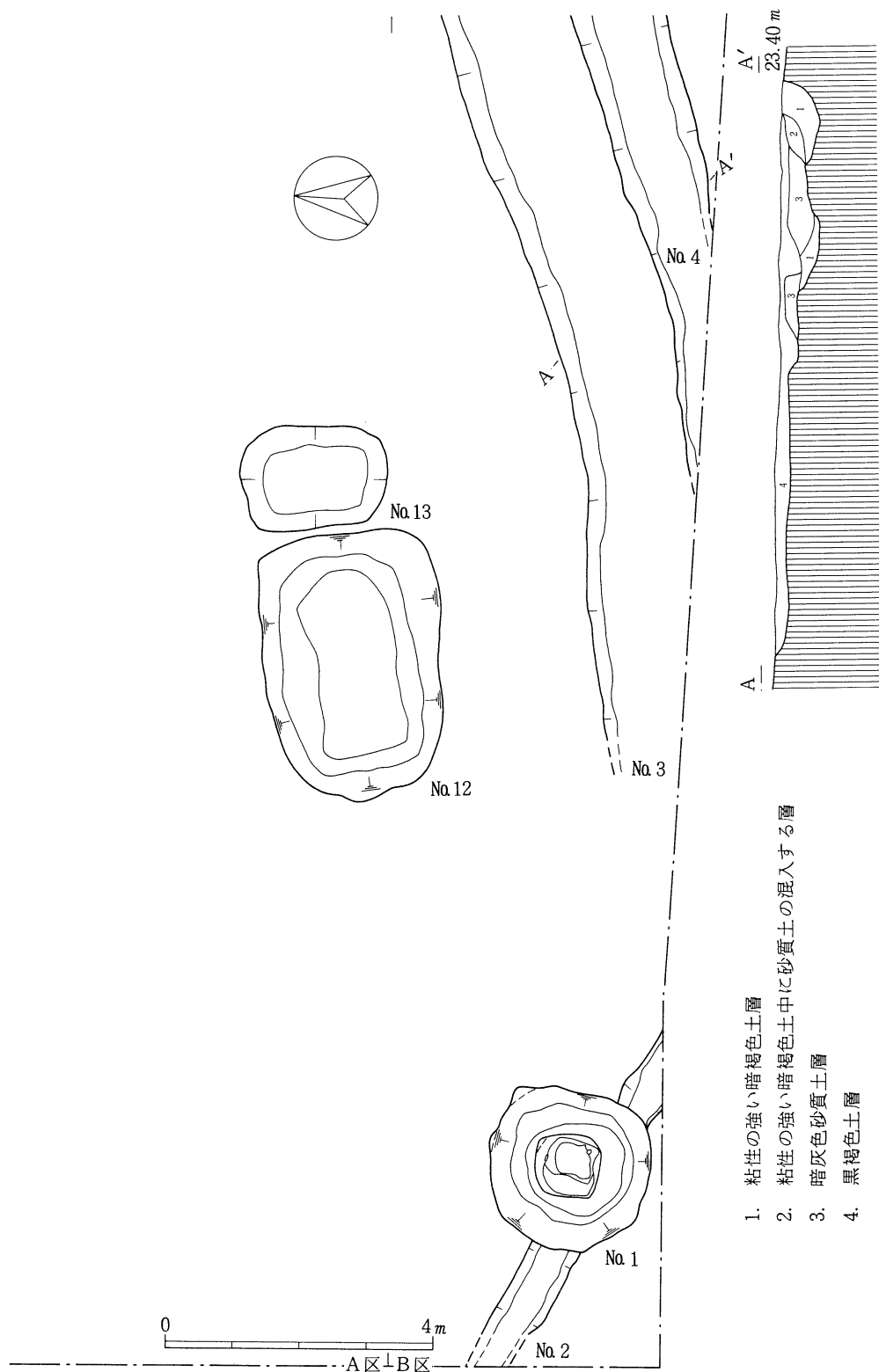


图6 調査区域内遺構配置図

表 2 検出遺構一覧表

番 号	遺構の種類	所在グリット	調査時 №	番 号	遺構の種類	所在グリット	調査時 №
1	井	B-1区	65	35	ピット	B-3区	11
2	溝状遺構	B-1区	65 B	36	ピット	B-3区	13
3	溝状遺構	B-1区	66 A	37	ピット	B-3区	14
4	溝状遺構	B-1区	66 B	38	ピット	B-3区	12
5	溝状遺構	B-2区	52	39	ピット	B-3区	15
6	溝状遺構	B-3区	4	40	ピット	B-3区	16
7	溝状遺構	A-4区	36	41	ピット	B-3区	17
8	溝状遺構	3区	37	42	ピット	B-3区	18
9	溝状遺構	3区	38	43	ピット	B-3区	19
10	溝状遺構	4区	23	44	ピット	A-3区	39
11	溝状遺構	A-5区	36 B	48	ピット	B-4区	24
12	土坑	A-1区	60	49	ピット	B-4区	25
13	土坑	A-1区	59	50	ピット	B-4区	26
14	土坑	B-2区	7	51	ピット	B-4区	29
15	土坑	B-3区	1	52	ピット	B-4区	28
16	土坑	B-3区	2	53	ピット	B-4区	31
17	土坑	A-5区	45	54	ピット	B-4区	32
18	土坑	B-5区	46	55	ピット	A-4区	40
19	ピット	B-2区	54	56	ピット	B-4区	30
20	ピット	B-2区	53	57	ピット	B-4区	33
21	ピット	B-2区	8	58	ピット	A-4区	34
22	ピット	B-2区	55	59	ピット	A-4区	44
23	ピット	A-2区	56	60	ピット	A-4区	43
24	ピット	A-2区	57	61	ピット	A-4区	42
25	ピット	B-3区	3	62	ピット	A-4区	49
26	ピット	A-3区	5	63	ピット	B-4区	50
27	ピット	A-3区	4	64	ピット	B-4区	51
28	ピット	A-3区	4	65	ピット	B-5区	47
32	ピット	B-3区	10	66	ピット	B-5区	48
33	ピット	B-3区	35	68	堰跡	A-5区～B-6区	小丘 67
34	ピット	B-3区	9				

(※) 29～31, 45～47は溝状遺構, 土坑調査時に各遺構の中で処理した。詳細は表5を参照されたい。



1. 粘性の強い暗褐色土層
2. 粘性の強い暗褐色土中に砂質土の混入する層
3. 暗灰色砂質土層
4. 黒褐色土層

図7 第1グリッド内遺構実測図

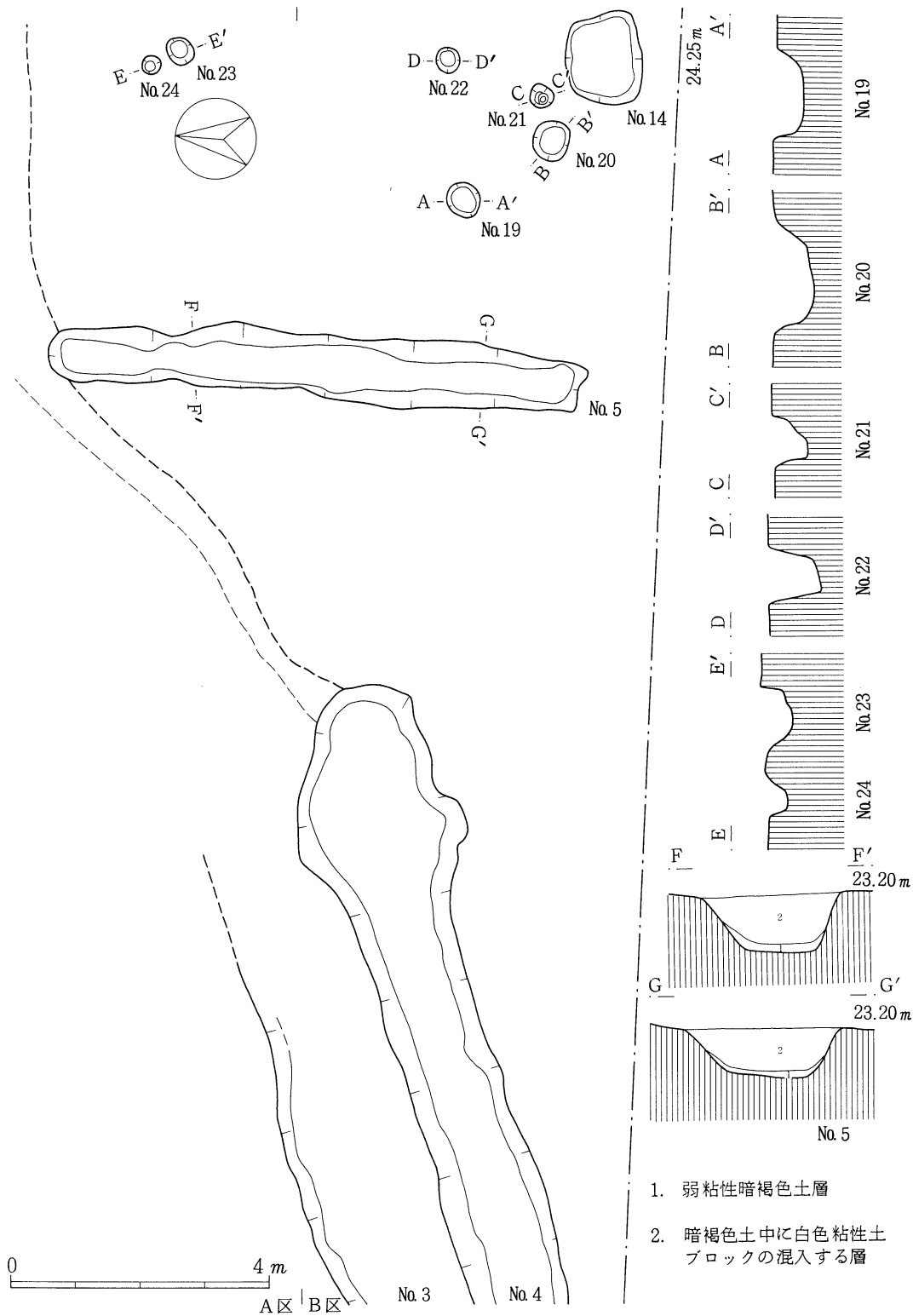


図8 第2グリッド内遺構実測図

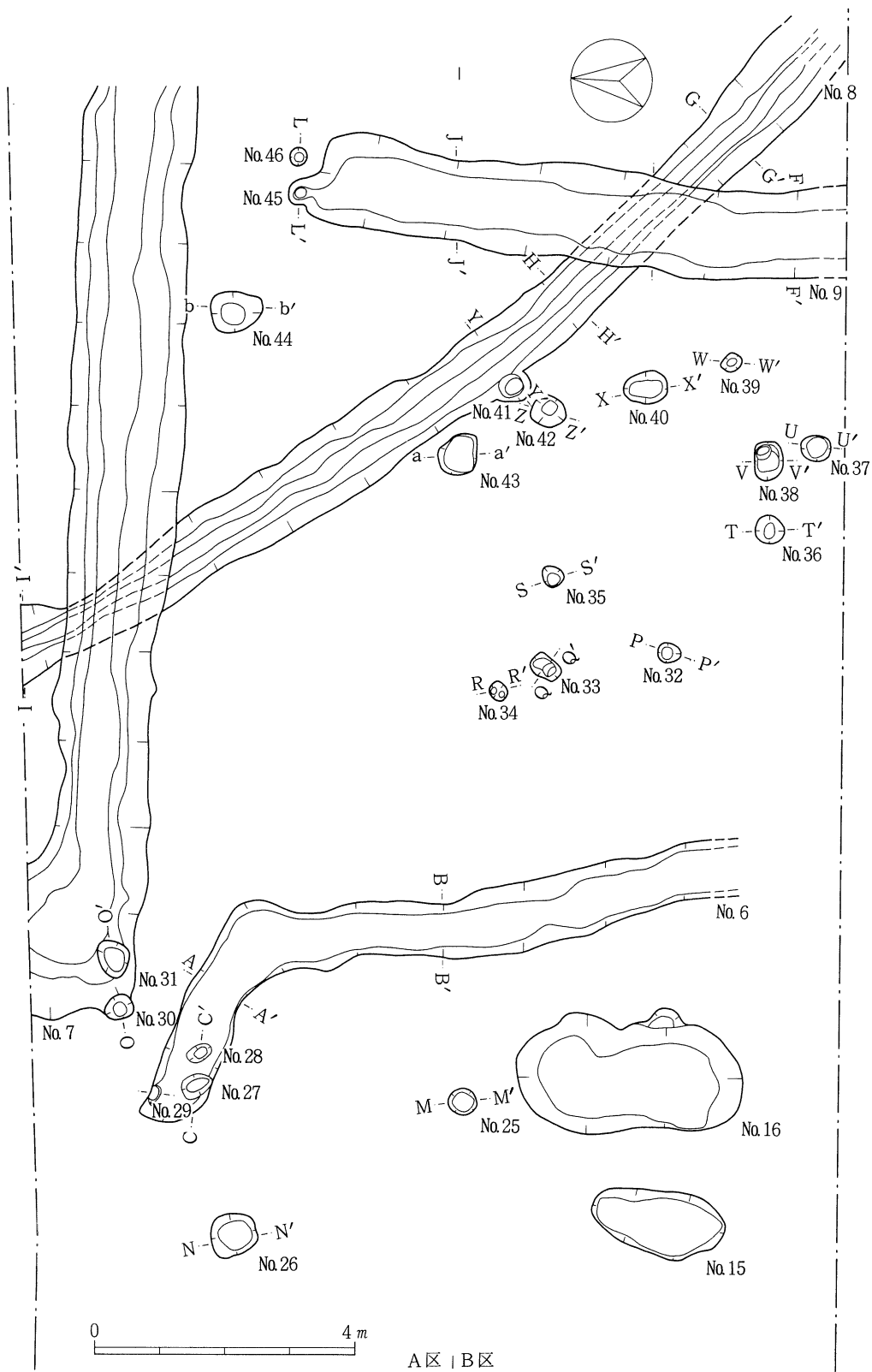
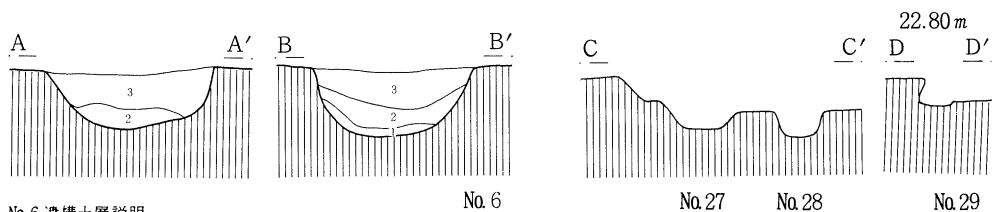
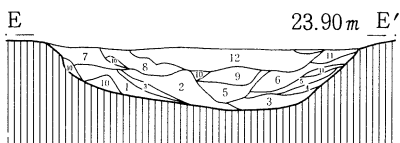


図9 第3グリッド遺構実測図



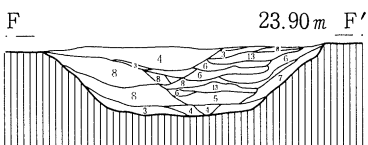
№ 6 遺構土層説明

1. 白色粘性砂質層
2. 暗褐色粘性ブロック土中に酸化鉄の混入する層
3. 暗褐色粘性土ブロックと白色粘性土がマール状を呈している層

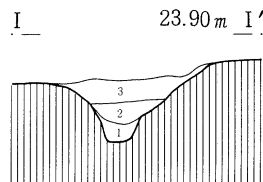
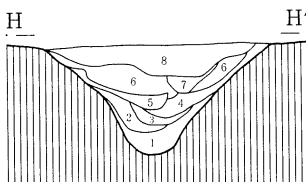
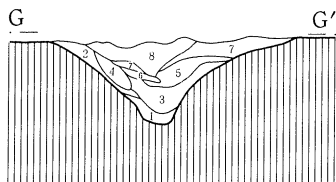


№ 7 遺構土層説明

1. しまりのある暗褐色土中に酸化鉄のブロック混入
2. しまりのある暗褐色土
3. 酸化鉄の沈殿層
4. 青灰褐色砂質土層に酸化鉄の混入する層
5. 青灰褐色砂質土層に黄色砂質土の混入する層
6. 青灰褐色砂質土層
7. 暗褐色土層
8. しまりのある暗褐色土層
9. 青灰褐色砂質土中に白色粘性土のブロックが混入する層
10. 白色粘性土ブロック
11. 砂層
12. 粘性の強い黒褐色土
13. 青灰褐色砂質土中に暗褐色粘性土と酸化鉄ブロック混入



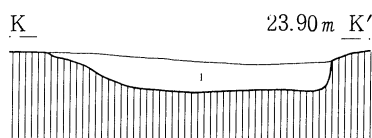
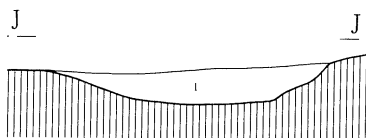
№ 7



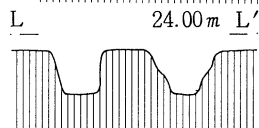
№ 8

№ 8 遺構土層説明

1. 粘性のある暗褐色土（下面に酸化鉄の沈殿層がみられる）
2. しまりのある暗褐色土
3. 暗褐色土中に黄土白の粘性土ブロックが混入する層
4. しまりのある暗褐色土中に、酸化鉄の赤褐色ブロックが混入する層
5. 黄土色粘性土中に白色粘性土などが混入する層
6. しまりのある粘性暗褐色土中に白色粘土ブロックの混入する層
7. しまりのある粘性暗褐色土
8. 暗褐色土中に酸化鉄の赤褐色ブロックが混入する層

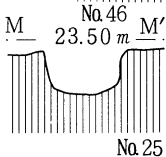


№ 9

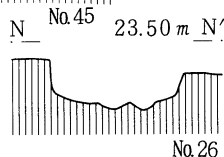


№ 9 遺構土層説明

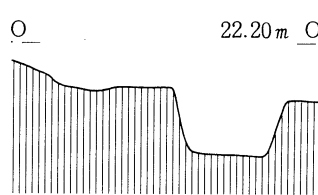
1. やや粘性のある暗褐色土ブロック中に酸化鉄の混入する層



№ 25

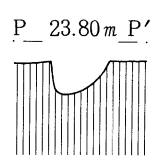


№ 26



№ 30

№ 31



№ 32

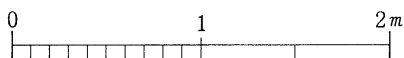


図10 第3グリッド内溝状遺構・ピット実測図

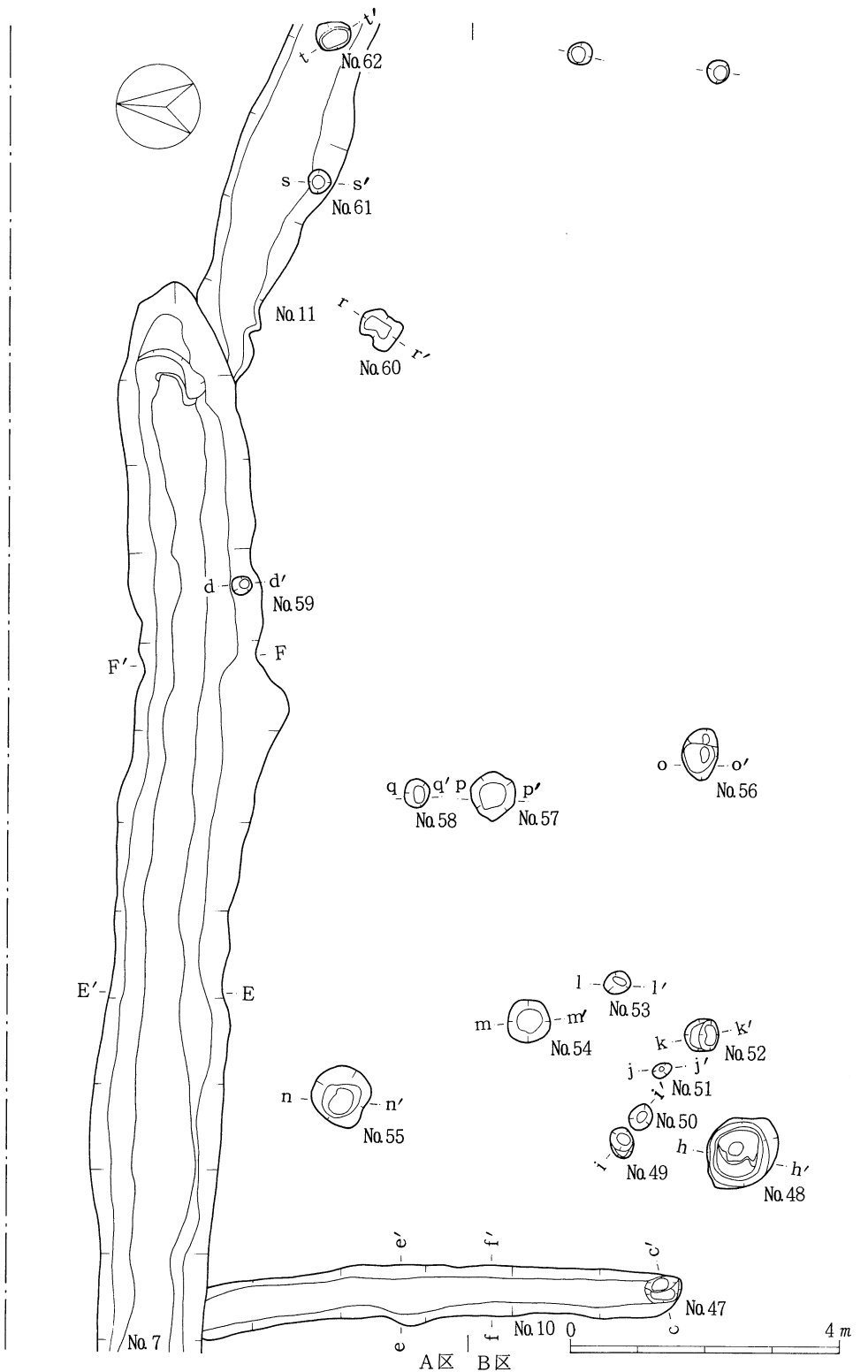


図11 第4グリッド内遺構実測図

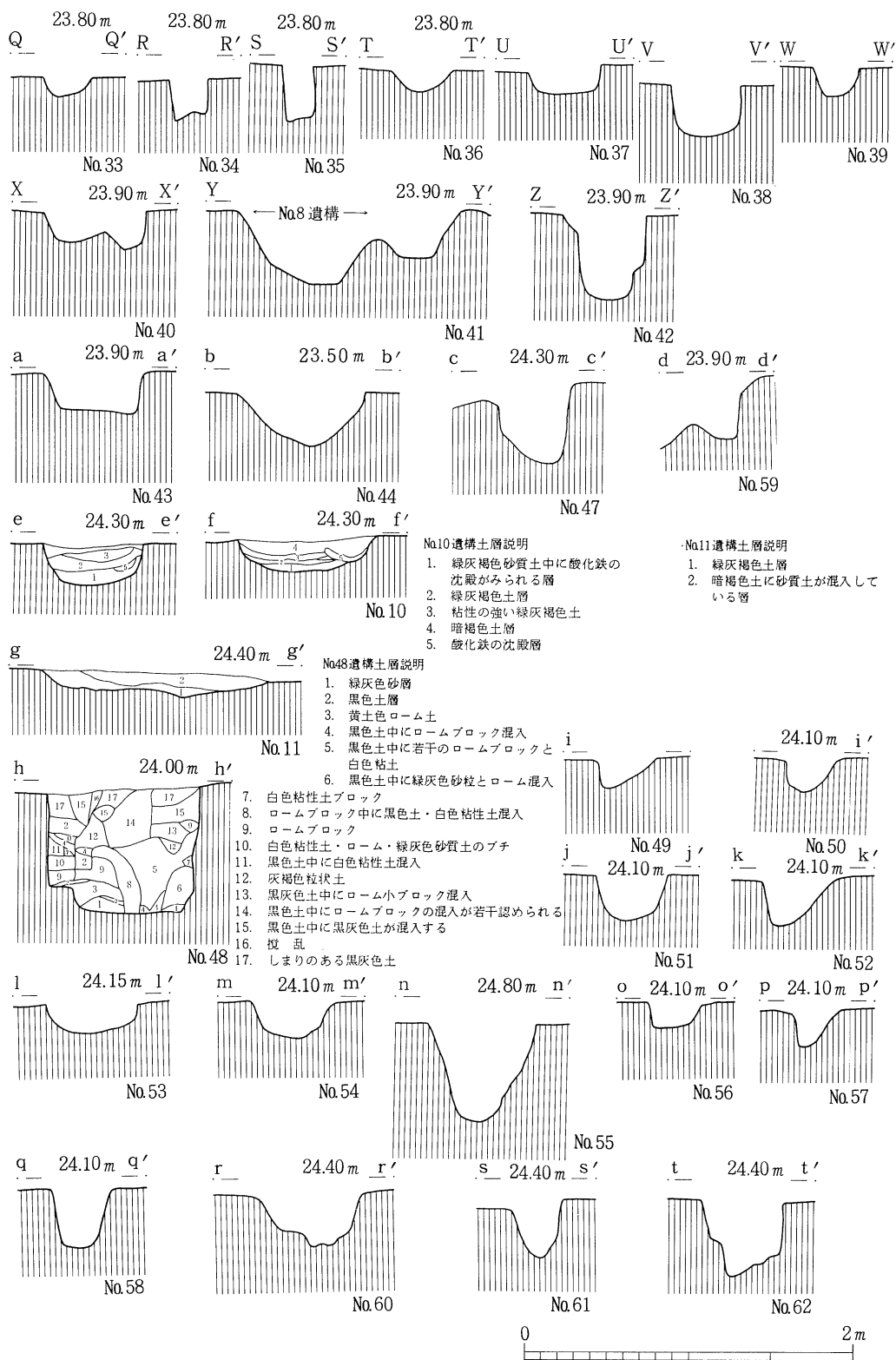


図12 第3. 第4グリッド内溝状遺構・ピット実測図

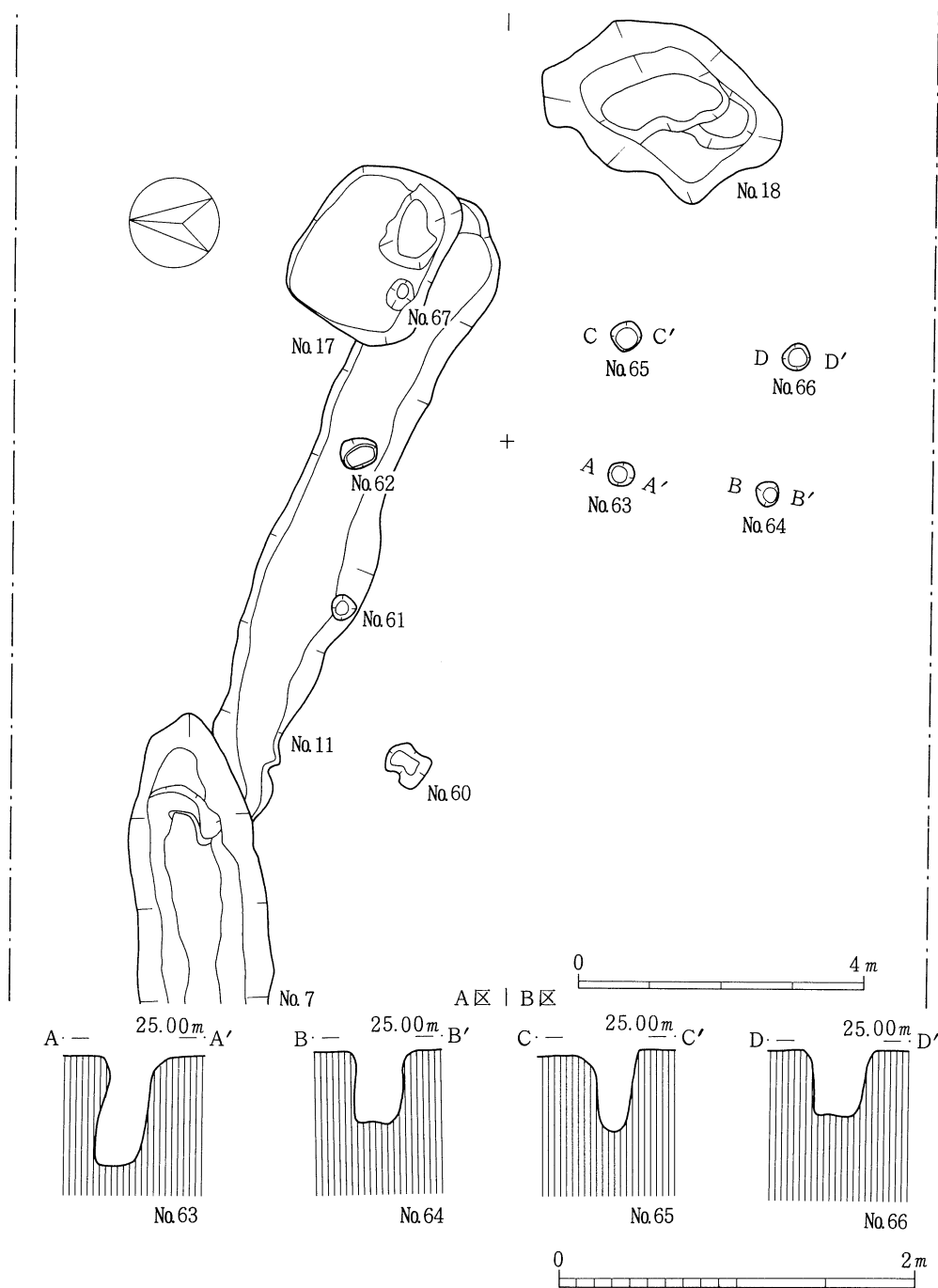


図13 第4グリッド, 第5グリッド内遺構実測図

2. 井戸跡 (No.1 遺構)

a. 遺構 (図14)

今回の調査によって検出された井戸跡は、B-1区東端のNo.1遺構一基のみであった。遺構検出面より上層は、水田および畑作の耕作時に削平され原形を知り得ないが、白色粘性土を基盤とする確認面下では、一部No.2遺構と重複しているものの、比較的によく遺存していた。

遺構の平面形態は、やや方形がかった直径2m20cm～30cmの円形で、中央部に一辺93cm程度のほぼ正方形を呈する井戸本体痕が遺存していた。断面形態は、上部掘り方が深さ1m30cmを測る掘鉢型で、下部本体痕が深さ約80cmを測る方形であった。底面は、西から東にやや傾斜して浅い段を一段有し、東南の隅に小ピットが検出された。井戸底の標高は、中央部で22m27cmである。

覆土の堆積状態は、I井戸本体痕内のやや緑色がかった白色の弱粘性山砂質土層、II井戸跡のほぼ中間に観られる無遺物層を含む黒色泥炭質土層、III上層に観られる多量の遺物が包含した暗褐色系粘性土層のI～III堆積に大別することができる。

これらの堆積については、基本的にA～A'断面によって観察し記録したが、湧水の流入が著しく、II層の一部とIII層は調査時に剝落、崩壊したため詳細を期することができなかった。

井戸本体痕内の堆積は、山砂質土層の堆積であり、調査の時点で湧水による影響を最も多く受けた部分である。堆積の状況はほぼ平行堆積であり、各層の間層には樹葉等の植物遺存体が観察された。井戸本体痕底部から連続する同様の堆積は、上部掘鉢型の下面にまで及んでいるが、上層部数層にわたって方形プランの中央部のみに若干の乱れが観察された。この乱れは、I層の堆積を切る様な形で観られ、II層の黒色土に近似した堆積土の混入とともに、落ち込みの底部から瓢箪が出土している。尚、当層の攪乱はII層に連続しておらず、上層には若干ながらもI層の堆積が観察された。

井戸本体痕内部からは、この他に最下層より鉄滓が一点出土しているが、曲物、木杵などは全く認められなかった。

中間層群にあたる黒色泥炭質土層の堆積は、三層に分層されI層同様の平行堆積層である。下層は厚さ約20cm程度の無遺物層であり、上層はIII層によって切られている。中間層からは若干の坏類が出土しているが、III層内出土遺物と接合関係の認められるものが含まれている。

調査期間中に確認し得た範囲では、放置状態における湧水の水位は、II層の上面にまで達しており、降雨等による流入がない限り、これを越えることはなかった。本井戸跡の用途が飲料に供するものであれ、生業に供するものであれII層堆積時をもって本遺構の使命は終了していたものと考えられる。

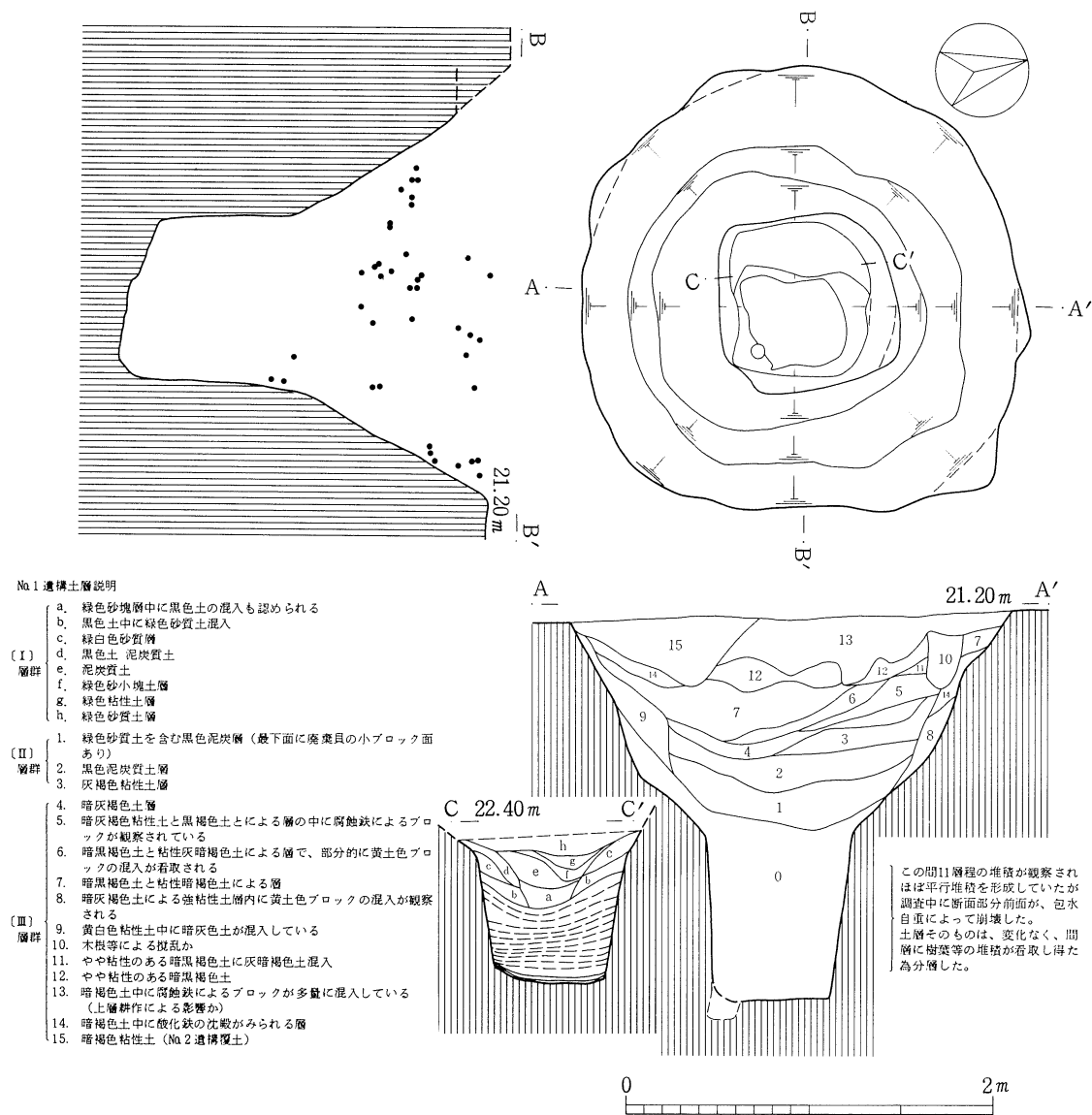


図14 No.1 遺構実測図

上部層群の堆積は、下層においてII層を若干切っているが、台地上で観られる一般的な遺構の自然堆積と近似した堆積が認められる。III層内からは各層から比較的に多い量の遺物が出土しているが、その包含状態は、4層・7層・13層において顕著に認められる。

このうち、4層底面からは第15図の5と6に挙げた完形の坏が二枚貝を合せた様な状況で出土している。III層がII層をやや掘り込んでいることと、本遺物の出土状態とを考え合せると、或いは井戸の廃棄に伴う資料と考えることもでき、本遺構の時期的な下限を示すものである。

尚、III層からは、他に灰釉陶器片、椀形滓、砥石、韃の羽口などが検出されている。

b. 遺物（図15～18）

井戸跡（No.1 遺構）より検出された遺物は、土師器（坏類・甕類）、須恵器（坏類ほか）、灰釉陶器片、緑釉陶器片、韃の羽口、椀形滓、砥石、瓢箪、石皿、凹石、小貝ブロックなどであった。

遺物の出土状況を層位的な観点からみると、先に挙げた大別3層群中で多少の相違点がみられる。即ち、井戸本体痕内では瓢箪が特異的な出土状態を示すほかは、極めて数少ない遺物の包含しかみられず、しかも鬼高期の坏底部片を含む等混入の様相が強いのに対し、中間層位群にあたるⅡ層内では、無遺物層の存在する一方で、Ⅲ層内出土土器片との接合頻度が高く、本遺構の機能的最終段階を示唆している。また、上位層群にあたるⅢ層内では、最下層にあたる第4層において、時期的に安定した土師器の完形坏が数点正置の状態出土する等、本遺構の廃棄に伴う儀式的様相を強く示す一方、第7層・第13層には、第4層出土の坏類と平行関係と考えられる遺物群に混じって、韃の羽口、砥石、灰釉陶器片、緑釉陶器片、鬼高期の坏口縁片、静岡県伊場遺跡A類相当の須恵器片、石皿、凹石など多彩なバリエーションの混入物が認められ、投棄物的様相が強く観られるのである。

以下、器種別に取り上げて簡単な説明を加えておきたい。尚、資料の掲載にあたっては、層位的に下層のものから列挙することを基本とし、出土点数の多い土師器および須恵器については、器形・特徴の明らかなものに限り図示して、報告の対象とした。

第15図1は、径128mm、器高32.5mmを測る坏である。円形の粘土板に粘土紐を貼付し、指頭によるナデとヘラケズリによって成形している。底部はやや丸味を有し、体部との陵は不明瞭である。色調は内面が白茶色であるが、外面は炭黒色を呈し器壁内部にまで及んでいる。

〔Ⅱ〕層（第2層）と〔Ⅲ〕層（第7層）とから出土した土器片の接合個体であり、鬼高期の所産と考えられる。

尚、同様の坏底部片が〔Ⅰ〕層内からも出土しており、いずれも混入品と考えられる。

第15図の2は、口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{6}$ が遺存する坏である。推定法量は、口縁部の径123mm、器高43mm以上である。底部および体部外面を手持ちヘラケズリによって整形しており、内・外面ともに赤色顔料の塗布が観られる。〔Ⅲ〕層の中程より出土しており、1同様鬼高期の所産と考えられる。

第15図の3、4は、〔Ⅱ〕層（第2層）出土の土師器の坏である。3は〔Ⅲ〕層最下層出土土器片と、また4は、〔Ⅲ〕層中間位層出土土器片と接合関係を有している。

3は、全体的に歪みが観られ、口縁部が若干欠損した坏である。口縁部径147～138mm、底部径60mm、器高48～43mmを測る。胎土は多孔質で多量の暗赤褐色微粒と若干の白色砂粒を含み、赤橙色を呈している。体部上半から口唇部にかけてロクロ成形痕が明瞭に観られ、体部外面下

半は巾の広い手持ちヘラケズリによる整形が施されている。底部は不定方向のヘラケズリによって整形されており、切り離し技法は観察されない。内面底部にヘラ描きによる「□万」の陰刻文字が刻書されている。⁽¹⁾
[子カ]

4 は、口縁部の一部欠損を除きすべて遺存している。口縁部径 134mm、底部径61mm、器高42～44mmを測る。3 同様の暗赤色微粒と砂粒を含み、明橙色を呈している。成形にはロクロが使用されており、底部は回転糸切りによって切り離されている。体部外面下端および底部外周には手持ちヘラケズリによる整形が施されている。

第15図5～8は、〔Ⅲ〕層の最下層にあたる第4層から出土した完形の土師器坏である。いづれも正置された状態で出土しており、殊に5は6とは二枚貝を合わせた様な状態で6が5に被せられてセットをなしていた。本遺構の時期的な下限を示す資料群である。

5 は、口縁部径 130mm、底部径59mm、器高40mmを測る。胎土には3 同様の赤色微粒や多量の白色砂粒、黒色砂粒が観察され、白茶色を呈している。成形にはロクロが使用されており、体部外面下半約 $\frac{1}{3}$ と底部全面に丁寧なヘラケズリ整形が施されている。切り離し技法は全く観察されない。

6 は、全体的に歪みが観られ、口縁部 124～130mm、底部径38mm、器高40～44mmを測る。胎土は5と近似しており、橙茶色を呈している。成形にはロクロが使用されており、底部は回転糸切りによって切り離されている。体部外面下半約 $\frac{1}{3}$ を手持ちヘラケズリによって整形しているが、底部は切り離し後、補強のための粘土を若干貼付した上で手持ちヘラケズリ整形を施している。尚、体部には、藁の付着痕が観られる。

7 は、口縁部径 134mm、底部径54mm、器高45mmを測る。胎土には白色微粒が多量に含まれており、灰白色を呈している。ロクロ使用による成形ののち底部を回転糸切りによって切り離しており、体部外面下端を底部に手持ちヘラケズリ整形を施している。

8 は、口縁部径 131mm、底部径60mm、器高42～44を測る。胎土には多量の白色微粒を含むが、内・外面ともに褐色を呈し、底部のみがやや明るい橙色を呈している。成形にはロクロが使用されており、法量的には供伴する坏類と大差はないが、底部は回転糸切無調整である。体部外面下半には丁寧な手持ちヘラケズリ整形が施されており、下端に一条の沈線が観られる。

第15図9～12は、〔Ⅲ〕層の中間位層にあたる第7層より出土した土師器の坏である。

9 は、口縁部径 122.5mm、底部径51mm、器高45～44mmを測る完形品である。胎土は5と近似しており、橙赤色を呈している。ロクロ使用による成形ののち、回転糸切り技法によって切り離されており、体部外面下端および底部に手持ちヘラケズリによる整形を施している。

10は、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。推定法量は、口縁部径 130mm、底部径50mm、器高41mmである。胎土には白色微砂粒が観られ、焼成は他と比較してやや甘く、器壁が

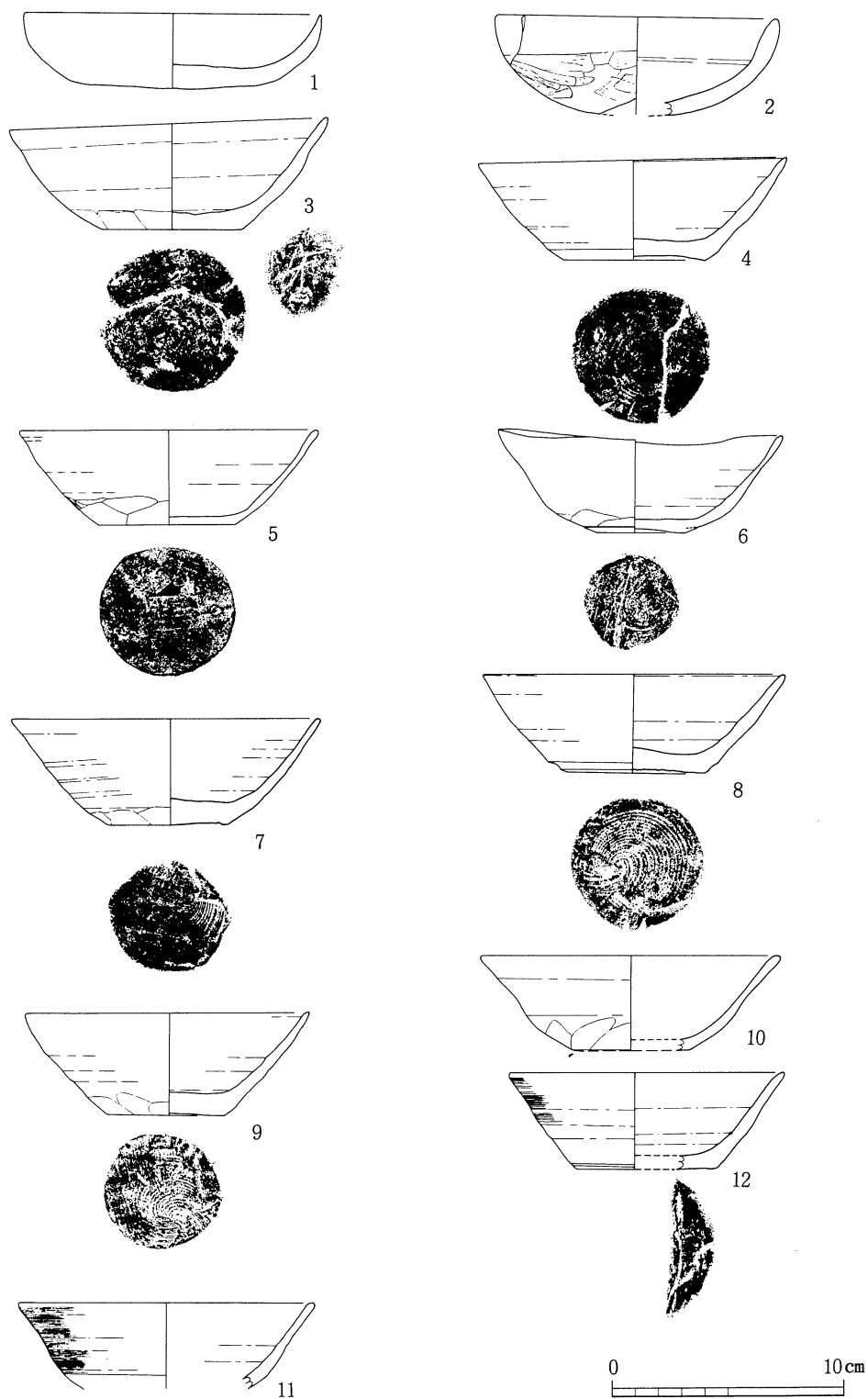


図15 No. 1 遺構出土遺物〔I〕

容易に剥落する。白橙色を呈している。

11 は、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。推定法量は、口縁部径 128mmを測るが底部径および器高については不明である。成形にはロクロが使用されている。焼成は比較的硬く、明褐色を呈している。

12には、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。推定法量は、口縁部径約 119mm、底部径60mm、器高42mmである。胎土には白色微粒、赤色微粒、黒色微粒などが観察され、全体的に赤橙色を呈している。体部外面下端に不明瞭な段を有し、ロクロ使用によって成形されている。底部の切り離し技法、整形などは、磨滅が著しいため十分には観察できないが、回転糸切り無調整のものと思われる。

第16図 1～4 は〔Ⅲ〕層中程より出土した土師器の坏である。いずれも小片のため帰属する層位は不明である。

1 は、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。器壁が比較的薄手で、胎土に白色微粒の混入が観察される。白茶色を呈している。成形はロクロを使用しており、体部外面に成形時の明瞭な沈線痕をのこしている。

2 は、体部下半から底部にかけて一部が遺存している。胎土には砂粒等を全く含んでおらず、焼成がやや甘い。白茶色を呈している。成形はロクロを使用しており、体部内外面に明瞭なロクロ目を残している。底部は回転糸切り無調整で体部外面にもヘラケズリ整形痕は認められない。

3 は、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。器壁が比較的薄手で、胎土に白色微粒を多量に含む。赤褐色を呈している。成形はロクロを使用しており、口縁部と体部との境に明瞭な屈曲がみられる。

4 は、体部下半から底部にかけて一部が遺存している。底部推定径60mmを測る。胎土には白色微粒、赤色微粒の混入が観られる。外面および器壁は白茶色を呈すが、内面は黒色処理されており不定方向のヘラミガキが施されている。底部および体部外面には、丁寧なヘラケズリ整形が施されており、切り離し技法は観察されない。

5 は、口縁部から底部にかけて一部が遺存している。推定される法量は、口縁部径 128mm、底部径67mm、器高38mm、である。胎土には、稀に赤褐色微粒の混入が観察され、暗灰褐色を呈している。焼成がやや甘く、全体的に磨滅している。成形にはロクロが使用されており、体部外面下半にヘラケズリによる整形痕が認められるが、不明瞭である。底部の切り離し技法は回転糸切りによるものと思われるが不明瞭で、爾後整形の有無は判断し難い。

6 は、体部下半から底部にかけて一部が遺存している。底部推定径60mmを測る。胎土には、白色微粒およびガラス質の半透明な微粒子が観察され、黒灰褐色を呈している。全体的に薄手で、成形にはロクロを使用している。底部および体部外面下半には手持ちヘラケズリ整形が施

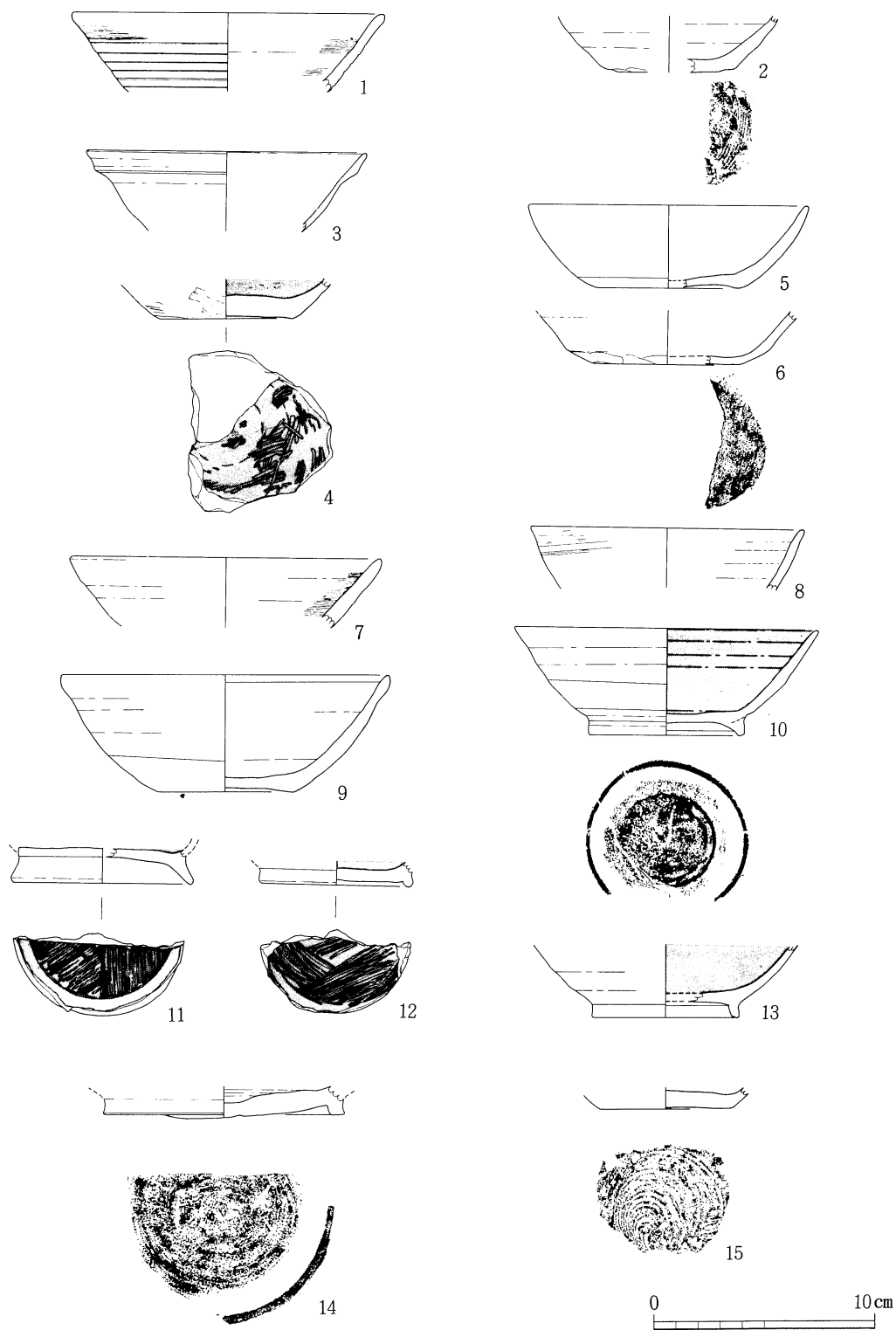


図16 No. 1 遺構出土遺物〔Ⅱ〕

されており、切り離し技法は観察されない。

7は、口縁部から体部にかけて一部が遺存している。胎土には、多量の白色微粒と赤褐色微粒の混入が観察され、橙赤色を呈している。口縁部推定径は142mmを測る。成形はロクロを使用しており、体部外面下半に手持ちヘラケズリ整形が施されていたものと思われる。

8は、口縁部から体部にかけて一部が遺存する小片である。胎土には、白色微粒・赤色微粒のほか雲母粒の混入が観察される。黄灰色を呈し、ロクロによって成形している。

9は、14層内より出土した復元完成品である。口縁部径150mm、底部径62mm器高53mmを測る。胎土には、多量の雲母粒の混入が観察される。外面は橙赤色を呈すが、内面一部が炭黒色である。成形にはロクロを使用しており、体部外面下半および底部に手持ちヘラケズリ整形が施されている。切り離し技法については観察されない。

第16図10～13は、いずれも高台杯の内黒土師器である。10は中位層出土片と最上層出土片とが接合したものであり、他は最上層より出土している。

10は、口縁部から体部にかけての一部を底部が遺存している。口縁部径138mm、底部径71mm、器高49mmを測る。胎土には、赤橙色微粒、雲母微粒などの混入が観察され、外面は白茶色を呈している。成形にはロクロを使用しており、体部外面下半を回転ヘラケズリによって整形している。底部には、回転ヘラケズリ痕が認められるが、切り離しに伴うものか整形に伴うものかは不明である。高台部径は71.5mmを測り、巾3mm、高さ7mmの高台部が貼付されているが、内面に粘土の補強が認められるため断面形では逆台形を呈する。

11は、底部のみについて約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定高台径82mmを測る。胎土には白色微粒の混入が多量に観察され、外面は白茶色を呈している。底部には、回転ヘラケズリ痕が認められる。高台部は、やや足長で外反ぎみに貼付されており、断面形逆三角形を呈する。杯部内面にはヘラミガキ痕が明瞭に観察される。

12は、底部のみについて約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。推定高台径70mmを測る。胎土には赤色微粒・白色微粒のほか、多量の雲母微粒が混入している。外面は白茶色を呈している。高台は断面形で径5mmの円形を呈している。杯部内面には、不定方向のヘラミガキ痕が明瞭に観察される。

13は、体部下端から底部にかけて一部が遺存している。推定高台径67mmを測る。胎土には白色微粒、雲母微粒の混入が認められ、外面は白茶色を呈している。高台は巾約4mm高さ約6mmで断面形台形を呈し、糸尻に浅い段を一段有する。

第16図14～15および第17図1～2は須恵器の高台杯および杯である。14は〔Ⅲ〕層群の中間層位にあたる11層から出土しており、他は覆土最上層からのものである。

14は、底部のみ遺存している。推定高台径109mmを測る。胎土には白色微粒の混入が顕著に認められ、全体的に青灰白色を呈している。底部外面は回転ヘラケズリが施されており、丸底

である。体部と底部の境は遺存部位が狭隘なため不明確であるが高台は稜の近くに貼付されたものと思われる。高台の造りはほぼ台形を呈し、外面は外へ反りぎみになっている。底部が高台の下へ突出しており、静岡県伊場遺跡のA類に観られる特徴を有している。⁽²⁾

15、推定底部径60mmである。胎土には多量の白色微粒、赤色微粒、石英粒を含み、赤橙色を呈している。底部は回転糸切り無調整であり、体部外面下端部にも整形痕は認められない。ロクロの回転方向は、右回転である。

第17図－1 推定底部径59mmである。胎土には赤褐色微粒、白色微粒、黒色粒を含み、赤橙色を呈している。ロクロノ回転方向は不明であるが、狭隘な遺存体部にみられる砂粒の動きから右回転であったものと思われる。体部および口縁・口唇部の造りは不明であるが、底部は回転糸切りによる切り離し後、一方向の手持ちヘラケズリ整形を施しており、体部下端も同様である。

第17図－2、推定底部径70mmである。胎土には多量の白色微粒とともに若干の石英粒が観察され、赤褐色を呈している。右回転のロクロによって成形されており、回転糸切りによる切り離し後、底部全面および体部外面下端部を手持ちヘラケズリによって整形している。体部は底部厚に比べ極端に薄手で、底部より丸味を帯びて内湾ぎみに立ち上がっている。内面には全面にわたって暗褐色に変色した付着物がみられる。

第17図3～5は、灰釉陶器および緑釉陶器である。いずれも〔Ⅲ〕層群の中間層位より出土している。

第17図－3は、底部のみが遺存している。推定高台径76mmを測る。胎土には白色微粒の混入が認められ、全体的に灰白色を呈している。高台のつくりは、外面が丸味を帯びた三日月形を呈し、接地面を狭く作っている。坏部内面に焼成時の圧痕認められ、重ね焼きされたものと思われる。若干年ら、体部内面に灰釉の痕跡が観察される。内面底部は良く磨滅しており、転用硯として使われていた可能性がある。K-90号窯式に比定されるものと思われる。

第17図－4は長頸瓶の頸部片である。頸部下端貼付け部における推定径は、外径53mm、内径38mmで残存高39mmを測る。焼成は堅緻で胎土に白色砂粒と黒斑とが顕著に観られ、色調はやや明るい灰色を呈している。右回転のロクロによって成形されており、内、外面にロクロ目の凹凸を良く残している。体部との接合は、頸部下端をやや外側に引出し受け部をつくって体部に被せたもので、内面では接地面が沈線状にみられ、外面においても帯状の有段となっている。

第17図－5は緑釉陶器の皿の破片である。高台部の推定外縁径98mmを測る。〔Ⅲ〕層中間位層より出土しており、破口の一边を転用砥として利用している。K-90号窯式に比定される篠岡の製品である。⁽³⁾

第17図－6は小型の土師器甕の底部片である。〔Ⅱ〕層（第2層）より出土している。底部

径は67.5mmを測る。胎土には砂粒の混入が観られ、焼成は堅緻である。底部は直交する二方向の手持ちヘラケズリによって丁寧に作られており、体部下端にも横方向のヘラケズリが観られる。

第17図－7～10は、〔Ⅲ〕層の中間層位から出土した土師器甕片である。

7は、口縁部から胴部にかけて遺存する小片である。推定法量は、口縁部径 184mm、頸部径 166mmであるが、図上復元の許容範囲を越えており誤差が予想される。胎土には稀に砂粒の混入が観察され、赤橙色を呈している。胴部は球状を呈し外面に縦方向のヘラケズリが施されている。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部内面には横方向のヘラケズリ痕がみられる。頸部外面に不明瞭ながらロクロ目が観察されることから、成形にロクロを使用したものと思われる。

8は、口縁部から胴部にかけて遺存する小片である。推定法量は、口縁部径 222mmであるが、図上復元の許容範囲を越えており誤差が予想される。胎土には赤色微粒、白色微粒の混入が観察され、褐色を呈している。胴部外面に縦方向のヘラケズリが施されており、短い口縁が、「く」の字状に外反する。口縁部および口唇部には横ナデが観られ、胴部内面には横方向のヘラケズリが施されている。

9は、口縁部から胴部上端にかけて遺存する小片である。推定法量は、口縁部径 152.5mmを測る。胎土には白色砂粒の混入が観られ、焼成は堅緻で褐色を呈している。胴部外面には巾のやや狭い縦方向のヘラケズリが施されており、短い口縁部が「く」の字状に外反している。口唇部外面直下には、巾 3.5mm程度の沈線が一条廻っており、口唇部は丸くつくられている。頸部および口縁部にロクロ目の観察されることから、成形にロクロを使用したものと思われる。

10は、胴部下端から底部にかけて遺存する。推定底部径74mmを測る。胴部外面下端部には、不明瞭ながら縦方向のヘラケズリが施されており、底部外周についても手持ちヘラケズリが施されている。

第17図12～15は、〔Ⅲ〕層最上層より出土した土師器甕の口縁から胴部にいたる破片である。いずれも上記甕片同様小片のため推定法量が図上復元の許容範囲を越えており誤差が予想される。

12は推定口縁径 252mmを測る。胎土には白色微粒、赤色微粒の混入が観られ、焼成はやや甘く白茶色を呈している。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されており、口縁部が「く」の字状に外反し口唇部直下でやや立ち上がる。口縁部内・外面には横ナデがみられ、胴部内面には横方向のヘラケズリが施されている。

13は、推定口縁径 240mmを測る。胎土には白色砂粒の混入が観られ、焼成は比較的に堅緻で褐色を呈している。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施され、「く」の字状に外反した口縁

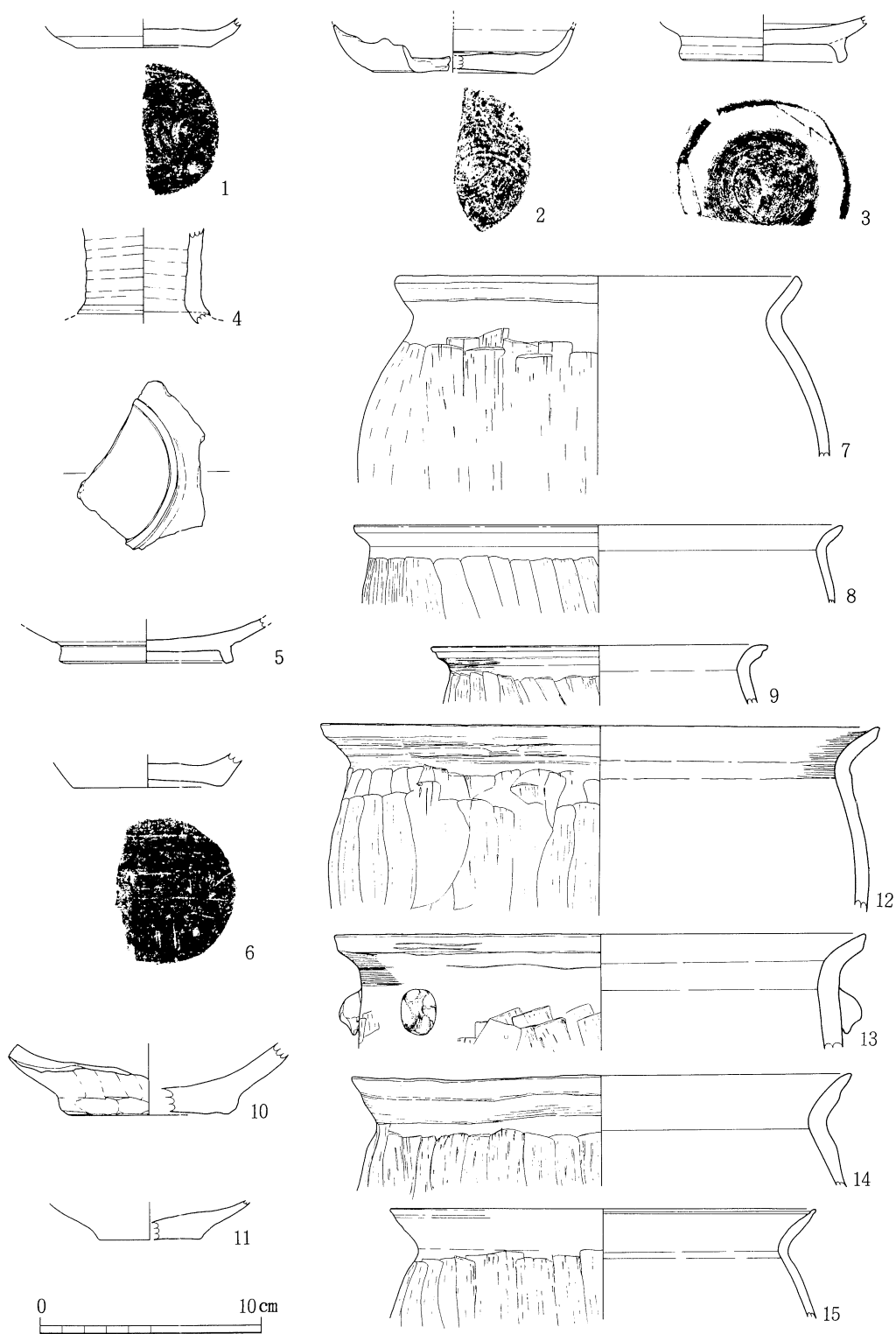


图17 No. 1 遺構出土遺物〔Ⅲ〕

部が口唇部直下で立ち上がり、断面形でほぼ三角形を呈している。口縁部にはロクロ目が観察され、成形にロクロが使用されていたものと思われる。胴部内面には横方向のヘラケズリが施されている。胴部上端に不整形の瘤状把手が貼付されている。

14は、推定口縁径 226mm、同頸部径 203mmを測る。胎土には白色砂粒などが観察され、色調は外面が褐色、内面が白茶色を呈している。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されており、「く」の字状に外反した口縁部が口唇部直下で浅い段を有している。全体的に磨滅しており胴部内面のつくりは観察されない。

15は、推定口縁径 194mm、同頸部径 168mmを測る。器壁は薄手で胎土に白色微粒の混入が観察される。全体的に白茶色を呈している。胴部外面には比較的に巾の広い縦方向のヘラケズリが施されており、口縁部が「く」の字状に外反している。口唇部直下には浅い沈線が一条廻っており、内側に浅い段を有している。

第17図11は、五領期の甕の底部片であり〔Ⅲ〕層最上層より出土している。

第18図1および2は〔Ⅲ〕層の最上層にあたる第13層から出土した小型土師甕である。胎土焼成、色調、器壁厚ともに近似しており、同一個体の可能性を有している。

1の推定法量は、口縁部径 132mm、頸部径 125mm、同部最大径 147mmを測る。胎土には白色微粒の混入が観察され、器壁が比較的に薄手で堅緻である。全体的にやや白味がかかった褐色を呈している。同部は球状を呈し、外面に縦方向のヘラケズリが施されている。口縁部は「く」の字状に短く外反しており、口唇部直下で立ち上がり端部を丸くつくり出している。胴部内面には横方向のヘラケズリが観られる。口縁部内・外面にロクロ成形痕が観察される。

2は、胴部下半の一部から底部にかけて遺存している。底部径50mmを測る。胴部内外面には横方向のヘラケズリが施されており、底部にも一方向の手持ちヘラケズリ痕が観察される。

第18図3～6は、〔Ⅲ〕層の最上層にあたる第13層から出土した女瓦（平瓦）の破片である。いずれも小片のため、長さ・巾ともに不明であるが、厚さ約20mmを測る。3の凸面には縄目の叩き目が明瞭に観察される。凹面には布目痕が残り、5と6では端部に面取りが観られる。5と6に観られる瓦側面の整形はヘラによるケズリで、5では凸面端部にも施されている。

4は凸面が剝離しており、叩き目は観察できない。

第18図7、〔Ⅲ〕層最上層中より出土した管状土錘である。

残存長64mm、最大径48mm、端部径23mmを測る。長軸のほぼ中央部に径11mmの正円を呈する孔が貫通し、外に向かってラッパ状にやや広くなっている。端部における管の内径は13.5mmである。径11mm程度の心棒に、厚さ18mm内外の粘土板を捲き付け、外面をヘラと指頭によって成形しており、心棒を回転させながら残存する端部に向かって引き抜いている。胎土には白色微粒、赤色微粒などの混入が観察され、土師器の製作に使用されるものと特に変わらない。

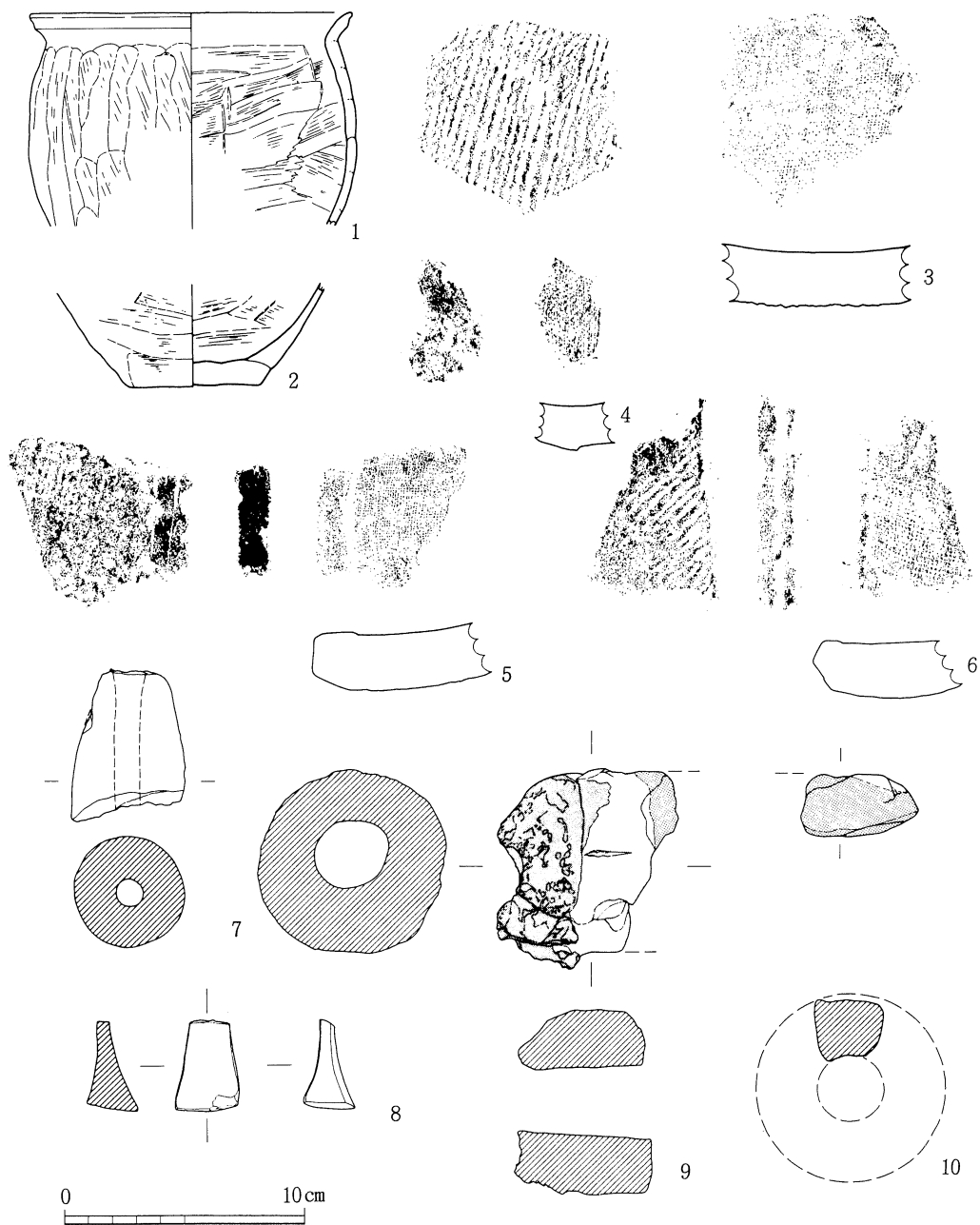


图18 No. 1 遺構出土遺物〔Ⅳ〕

第18図8,〔Ⅲ〕層の中層位より出土した砥石である。

井戸跡廃棄後の投棄資料と考えられる。残存する砥石の計測値は、長さ38mm、巾27mm、高さ21mmである。黒色粒を多量に含む明灰色を呈しており、四辺ともに使用され磨滅している。

第18図9,10は、製鉄鍛冶に使用される鞆の羽口である。

井戸跡覆土中間層の上面にあたる第5層内より出土している。出土時の状況は、先端部にあたる鞆片5点がほぼ原形を残した状態で検出されており、これと接合しない胴部小片1点が整理作業中に同層の一括資料中から抽出された。

いずれも、砂質の強い粘土製素焼によるもので、特に精選された胎土とは言えない。全体的に軟質で砂粒が剥落しやすく、破口はいずれも著しく磨滅している。

先端部の計測値は、外径75mm、内径30mm～27mmを測り、口唇部に向かってやや細く作られており、口唇部周辺は溶解物の付着によって若干狭められている。現存する長さは77mmで、以下送風管の受け部までを欠損しているが、口唇部周辺の熔融状態や使用時の還元炎焼成の範囲などから、鍛冶炉に布設されていた時点の上下および取付けの角度を概ね推測することができる。それによると、羽口の上下関係は図示したとおりであり、角度は下方に向かって約10度傾斜していたものと思われる。製法には髓抜が利用されていると思われるが明らかではない。⁽⁴⁾

尚、先端部と接合しない胴部小片は、内径がやや開きぎみになっており、送風管との接合部に近い部位の破片ではないかと考えられ、胎土から上述先端部と同一個体である可能性も考えられる。計測値は、長さ46mmであるが、外径、内径ともに小片のため測定できない。

その他の遺物として鉄滓（殊に碗形滓）が出土している。

碗形滓（図版31－1）

井戸跡本体痕最下層より出土している。径66mm～52mm程度、厚さ25mm程度の碗形滓が2個体縦に重なって融着している。碗形滓の底部には鍛冶炉の炉底土が付着しており、鉄滓片中には多量の木炭片が混入している。計測された重量は210gであった。

尚、井戸跡内からは、上記碗形滓一点のほか中間層から鉄滓一点が出土している。25mm×30mm×8mm程度のもので重量は15gであった。

以上が井戸跡出土の主な遺物である。概して〔Ⅱ〕層群より上層は、口縁部径と底部径の比率が2：1を越えるプロポーションで、底部および体部外面下端部に手持ちヘラケズリ整形を施したものが主流となっており、〔Ⅱ〕層と〔Ⅲ〕層とでは特に形式差を認めることができなかった。これに〔Ⅲ〕層群内出土の完形坯の存在を考慮すると、土層観察で捉えた〔Ⅲ〕層群の堆積については、自然堆積乍らも放置状態によるものではなく、投棄場として短い期間内に漸次的に埋没したのではないかとと思われる。

尚、自然遺物として〔Ⅰ〕層群上層より瓢箪が出土し、〔Ⅲ〕層群下層より二枚貝を主体と

表 3 井戸跡出土遺物計測表

番 号	器 種	法量口縁径	器 高	底 部 径	高 台 部 径	胎	土	色	調	整	形	技 法、底部の調整
No. 15 - 1	土 師 器 杯	128mm	32.5mm	—	—	—	内面 灰白色、外面 灰黑色	赤 色 顔 料	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
15 - 2	"	123	43	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15 - 3	"	147~138	48~43	60mm	—	多孔質で多量の暗赤褐色 靫と若干の白色砂粒を含む	赤 色	赤 色	"	—	—	—
15 - 4	"	134	42~44	61	—	"	明 褐色	明 褐色	"	—	—	—
15 - 5	"	130	40	59	—	黒色砂粒を含む	白 茶 色	白 茶 色	"	—	—	—
15 - 6	"	124~130	40~44	38	—	"	暗 茶 色	暗 茶 色	"	—	—	—
15 - 7	"	134	45	54	—	白色微粒多量を含む	灰 白 色	灰 白 色	"	—	—	—
15 - 8	"	131	42~44	60	—	"	内、外面 褐色、底部明い橙白色	—	"	—	—	—
15 - 9	"	122.5	45~44	51	—	5と同じ	暗 赤 色	暗 赤 色	"	—	—	—
15 - 10	"	130	41	50	—	白色微砂粒含む	白 褐色	白 褐色	—	—	—	—
15 - 11	"	128	—	—	—	白色・黒色、黒色微粒含む	明 褐色	明 褐色	—	—	—	—
15 - 12	"	119	42	60	—	白色微粒含む	赤 褐色	赤 褐色	—	—	—	—
No. 16 - 1	土 師 器 杯	—	—	—	—	白色微粒含む	白 茶 色	白 茶 色	—	—	—	—
16 - 2	"	—	—	—	—	白色微粒多量を含む	赤 褐色	赤 褐色	—	—	—	—
16 - 3	"	—	—	—	—	白色・赤色微粒を含む	外 面 白 茶 色、内 面 黒 色	—	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
16 - 4	"	—	—	60	—	赤褐色微粒を含む	暗 灰 褐色	暗 灰 褐色	ヘ ラ ケ ズ リ (不明瞭)	—	—	—
16 - 5	"	128	38	67	—	白色微粒がラス質の半透明微粒子含む	黒 灰 褐色	黒 灰 褐色	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
16 - 6	"	—	—	60	—	多量の白色・赤色微粒含む	暗 赤 色	暗 赤 色	"	—	—	—
16 - 7	"	142	—	—	—	白色・赤色微粒混濁を含む	—	—	—	—	—	—
16 - 8	"	—	—	—	—	多量の黒色微粒を含む	黒 灰 色	黒 灰 色	—	—	—	—
16 - 9	"	150	53	62	—	白色の雲蓋微粒を含む	外 面 暗 赤 色、内 面 一部 灰 黒 色	—	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
16 - 10	土 師 器 高 台 杯	138	49	71	71.5mm、巾3mm、高7mm	赤褐色、雲蓋微粒を含む	外 面 白 茶 色	外 面 白 茶 色	—	—	—	—
16 - 11	"	—	—	—	82mm	白色微粒含む	外 面 白 茶 色	外 面 白 茶 色	"	—	—	—
16 - 12	"	—	—	—	70mm、断面形5mm	赤色・白色微粒多量の雲蓋微粒を含む	—	—	—	—	—	—
16 - 13	"	—	—	—	67mm 巾4mm 高6mm	白色雲蓋微粒を含む	—	—	—	—	—	—
16 - 14	土 師 器 高 台 杯	高台径109mm	—	—	—	白色微粒含む	青 灰 白 色	青 灰 白 色	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
16 - 15	"	76mm	—	—	—	白色微粒を含む	灰 白 色	灰 白 色	—	—	—	—
No. 17 - 1	須 恵 器 杯	底部径 59mm	—	—	—	赤褐色・白色・黒色微粒	赤 褐色	赤 褐色	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
17 - 2	"	" 70mm	—	—	—	多量の白色微粒若干の石英粒含む	—	—	"	—	—	—
17 - 3	"	" 60mm	—	—	—	白色砂粒、黒斑含む	や や 明 る い 灰 色	や や 明 る い 灰 色	—	—	—	—
17 - 4	長 頸 瓶	頸部径 外径53mm 内径38mm 残存高39mm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17 - 5	灰 輪 器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17 - 6	"	高台部外縁径98mm	—	—	—	砂 粒 含	—	—	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
17 - 7	小型土師器(底部)	底部径67.5mm	—	—	—	桶に砂粒含む	赤 褐色	赤 褐色	"	—	—	—
17 - 8	土 師 器 甕	口縁部径184mm 頸部径166mm	—	—	—	赤色微粒、白色微粒含む	暗 褐色	暗 褐色	"	—	—	—
17 - 9	"	" 222	—	—	—	白色微粒含む	—	—	"	—	—	—
17 - 10	"	" 152.5	—	—	—	白色微粒含む	—	—	"	—	—	—
17 - 11	"	底部径74mm	—	—	—	白色微粒、赤色微粒含む	白 茶 色	白 茶 色	—	—	—	—
17 - 12	"	口縁径252mm	—	—	—	白色微粒含む	褐 色	褐 色	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
17 - 13	"	" 240	—	—	—	白色微粒含む	外 面 褐色、内 面 白 茶 色	—	"	—	—	—
17 - 14	"	" 226	頸部径203	—	—	白色微粒含む	白 茶 色	白 茶 色	"	—	—	—
17 - 15	"	" 194	" 168	—	—	白色微粒	白 味 かった 褐色	—	"	—	—	—
No. 18 - 1	小 型 土 師 器	口縁径132mm 頸部径125mm 胴部147mm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18 - 2	"	底部径50mm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18 - 3	女 瓦 (半瓦)	厚さ20mm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18 - 4	"	—	—	—	—	—	—	—	ヘ ラ ケ ズ リ	—	—	—
18 - 5	"	—	—	—	—	—	—	—	"	—	—	—
18 - 6	"	—	—	—	—	—	—	—	"	—	—	—
18 - 7	甕 状 土 師 器	残存長64mm 最大径48mm 底部径23mm	—	—	—	白色微粒・赤色微粒	—	—	—	—	—	—
18 - 8	砥 石	長さ38mm 巾27mm 高さ21mm	—	—	—	黒色微粒多量を含む	明 灰 色	明 灰 色	—	—	—	—
18 - 9	甕 の 羽 口	外径75mm 内径30~27mm 現存する長さ77mm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

した貝の小ブロックを検出している。瓢箪には、加工痕は認められない⁽⁵⁾。(図版31)

註

- (1) 須田勉氏の御教示によれば、同様の陰刻は国分寺・国分尼寺などの国分寺台の遺跡群からも多く出土しているとのことである。
- (2) 川江秀孝(1980)「第2章 墨書土器の形態分類」『伊場遺跡遺物編2』
- (3) 名古屋大学文学部助手斉藤隆正氏の御教示による。
- (4) 粘土製羽口の製法については、『鉄山秘書』に記録が残っており、髓拔を使用していることが知られている。第18図8は、内径が一部不定円形を呈しており、髓拔の引抜きによるものと考えられる。
- (5) 宮本敬一氏の御教示によれば、上総国分尼寺寺域内の井戸跡より検出された瓢箪には、加工痕が認められたとのことである。尚、井戸跡から瓢箪が出土する例は多くみられる。

3. 溝状遺構 (No.2遺構～No.11遺構)

今回の調査区域内より検出された溝状遺構は、No.2遺構からNo.11遺構までの10条であった。各遺構の分布は、前述のとおりである。

No.2遺構 (図7)

B-1区の西端、No.1遺構に一部重複して、両端が調査区域外へと延びている。遺構の底面はほぼ水平であり、水路としての用途を考えた場合、水の流れる方向は不明である。

断面形態は緩やかな丸底で、覆土中には遺物の包含が認められなかった。調査区域内で確認された溝の長さは約5mであり、上巾70cm、下巾40cm程度を測る。

遺物の検出が認められないことから、遺構の時期は不明であるが、No.1遺構の埋没時を上限とすることができる。尚、現在の地割りとは、全く異なっている。

No.3遺構・No.4遺構 (図7, 図8, 図19)

a. 遺構

B-1区からB-2区にかけて検出された。遺構底面は緩やかに東北東から西南西に傾斜しており、長軸の方向は、No.3, No.4遺構ともに一致している。

断面形態は、いずれも浅い平底状を呈しており、No.4遺構の方がやや深い、覆土は粘性の強い暗褐色土を基本とするが、No.4遺構上層には暗灰色の砂質土が堆積していた。No.3遺構とNo.4遺構との切り合い関係は、No.4遺構→No.3遺構を示している。遺構の西端は、No.3・No.4と

もに調査区域外へ延びているが、東端では、No.3 遺構がA 2 区中程で消滅し追えなくなっているのに対し、No.4 遺構ではやや玉状に膨れて止まっている。調査区域内で確認できた溝の長さは、No.3 遺構が約19.4m、No.4 遺構が約14.2mであった。

b. 遺物

No.3 遺構より出土した遺物は、土製支脚1点、須恵器片12点、土師器細片28点であった。図示できたものは、このうちの須恵器3点で他はいずれも小片であった。殊に、土師器については細片が顕著に認められ、接合する個体は皆無であった。尚、図示した3点は、すべて遺構底部直上より出土している。

1 は、口縁部から頸部にかけて遺存している須恵器壺類の破片である。推定口縁部径 228mm 残存高74mmを測る。胎土には黒色微粒が若干観察されるが、砂粒は全く含まれていない。色調は、内外面ともに青灰白色を呈している。口縁部直下には、指頭の手押し込みによる回転を利用した沈線が一条廻っており、頸部との境をなしている。口唇部は丸く納められており断面形態隅丸の三角形を呈している。

2 は、底部から胴部にかけて遺存している壺・瓶類の破片である。推定底部径79mm、残存高65mmを測る。胎土には白色砂粒が多量に混入している。内面は、降灰釉が厚く被覆しており、光沢を発しているが、外面には全く覗られず灰色を呈している、底部外面は、薄く釉が付着し

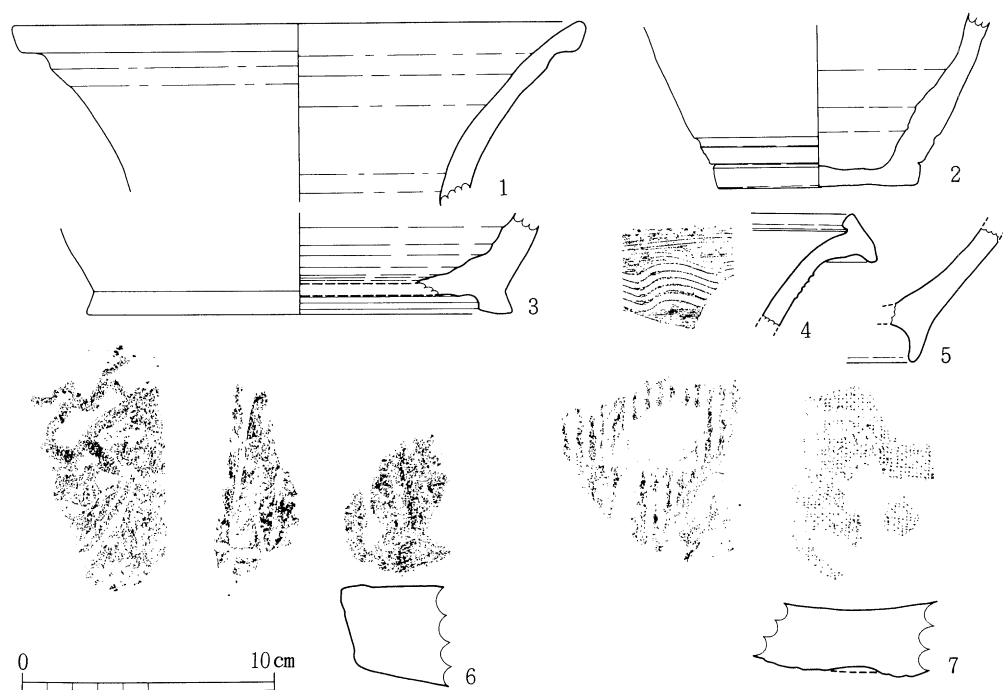


図19 No.3 遺構・No.4 遺構出土遺物

ており、整形技法等は観察されない、胴部外面下端部に、ヘラ状工具による二条の沈線が施されている。

3は、高台部から胴部にかけて遺存する高台付の瓶類の破片である。推定法量は、高台部外縁径 169mm、同内縁径 141mm、高台部高 9mm、底部径 162.5mmで、残存高は40mmであった。胎土には多量の黒斑が観察され、内外面ともに釉で被覆されている。胎土から東海系の製品と考えられる。

No.4 遺構より出土した遺物は、須恵器片19点、土師器片49点、瓦片3点、鉄滓2点であった。図示できたものは、このうちの須恵器片2点と瓦片2点であり、他はいずれも小片であった。須恵器では第19図4の口縁部と同一個体と考えられるものが8点、他が10点出土しており中に一点瓶類の頸部の接合部が含まれている。土師器では、No.3 遺構同様細片が目立っているが、高杯の脚部が二点含まれている。尚、図示した2点は、遺構底部直上より出土している。

第19図4は、甕の口縁片である。小片のため径を測定することはできない。頸部に櫛描き波状紋を施しており、内外面ともに黒灰色を呈しているが胎土は赤紫色である。残存している頸部には凸帯が認められない。

5は、高台部から体部下半にかけて遺存している。断面形がほぼ鋭角三角形を呈する高台が、体部下端に貼付されており、接地面が狹隘に作られている。底部は全く欠損し不明であるが、平底状を呈していたものと思われる。胎土には多量の白色砂粒が混入しており、色調は灰白色を呈している。体部の外面は横方向の回転ヘラケズリによって整形されているが、粗雑で砂粒の移動痕が顕著に観察される。内面は良く摩耗しており、用途の一端を示唆しているが器形等明確なところは不明である。

第19図6は、宇瓦の小片である。長さ・巾ともに不明であるが、厚さ40mm～24mmを測る。凸面には荒い格子目の叩きが観られ、凹面には布目痕が残っている。瓦側面には面取りが施されており、断面形ほぼ台形を呈している。

7は女瓦（平瓦）の小片である。長さ、巾ともに不明であるが、厚さ約26mmを測る。凸面には縄目のたたき目が明瞭に観察され、凹面には布目痕を残している。尚、6、7ともに還元炎焼成されている。

その他の遺物として、鉄滓が3点出土している。

No.5 遺構（図8、図20）

A-2区からB-2区にかけて南北に掘削された溝状遺構である。確認面からの深さは約35cm、底部巾約45cmを測り、断面形態は逆台形を呈している。上部構造については、他の遺構同様、耕作による削平を受けており不明であるが、調査区域内で完結する唯一の溝状遺構である。底面の南北による比高差は殆ど認められない。全長は、底面で約3m15cmであった。

覆土は概ね暗褐色土で、白色粘性土がブロック状に混入している。遺構内からは鉄床石が一点出土している。(図20)

鉄床石の使用面には鍛造時の付着物が観られる。遺存している床面は約11.5cm× 12.00cmで高さは 13.00cmであった。

尚、近似した材質の石片が井戸跡上層部の覆土中から出土している。

No. 6 遺構 (図 9, 図10)

A－3区からB－3区にかけて南から北へ流れ、No.7 遺構の手前で西へ屈曲してA－2区の方角を向いている溝状遺構である。。確認面からの深さは約15cm, 底部巾約70cmを測り、断面形態は低い逆台形型を呈している。底面の南北による比高差は、37cm前後で南から北へ向かって緩傾斜している。調査区域内で確認された遺構全長は、底面で 9 m90cmであったが、南端は調査区域外へ延びている。遺構内からは、須恵器片 2点・土師器片 1点が出土しているがいずれも小片のため図示できるものはなかった。

No. 7 遺構 (図 9, 図11)

a. 遺構について

A－3区よりA－4区にかけて、調査区の北端を東から西へ流れる溝状遺構である。確認面からの深さは約30cm～38cm, 底部巾約80cm～ 130cmを測る。断面形態は丸底で、土層の観察から二度 以上の造り変えが行われていたことが判明している。A－4区西端を南北に走るNo.10 遺構は、本遺構に付随する施設と考えられる。尚、No.8 遺構との切り合いによる新旧関係は、土層の観察によってNo.8 遺構→No.7 遺構が判明している。

b. 遺物について (図21)

No.7 遺構から検出された遺物は、土師器片83点、須恵器片35点、中世陶器片15点、石製紡錘車 1点、古銭 3点であった。このうち、土器、陶器類については小片が多く、器形・特徴など

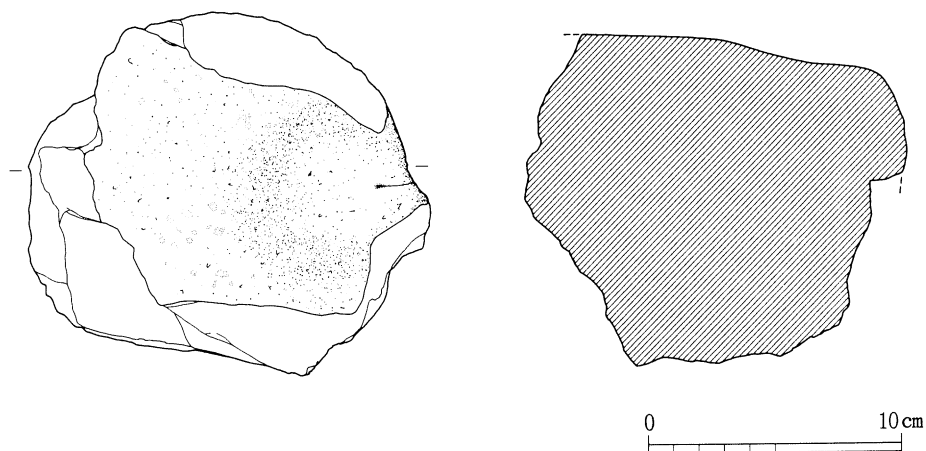


図20 No. 5 遺構出土鉄床石

のよくわかるものは、図示した6点に過ぎなかった。

図21-1は、No.1遺構〔I〕，〔II〕層より出土した鬼高期の杯（第15図-1）と類似した杯の底部である。焼成は良好で淡黄褐色を呈している。底部外面は中央部がやや凹んでおり、内面には赤彩がみられる。覆土中より出土している。

2，4は、須恵器の高台部である。いずれも覆土中より出土している。

2は、底部のみについて約 $\frac{1}{6}$ が遺存している。底部径 123.5mm，高台部径 102.5mm，残存高 23mmであった。胎土には砂粒の混入が全く認められない。高台は底部外縁より13mm内側に貼付されている。高台巾 6mm，高さ 7mmを測り，接地面は内側に浅い凹みを廻らすことで狭くなっている。断面形ほぼ台形を呈している。底部の切り離し技法などについては観察されなかった。

4は、底部のみについて約 $\frac{1}{2}$ 強が遺存している。高台部径65mmを測る。胎土には細白色砂粒をまばらに含み，灰色を呈している。高台は，底部外縁よりやや内側に貼付されており，巾 4mm，高さ 8mm程度である。底部に対してやや開きぎみに貼付されている。

3, 5, 6は中世陶器の甕の口縁である。いずれも白色砂粒を多く含み，赤紫色を呈している。

7は，覆土中層より出土した石製紡錘車である。厚さ18mm，上面径24mm，下面径34mmを測り，下面より厚さ 5mm程度のところで内曲している。円盤の中央には径 7.5mmの孔が貫通している。

このほかに，溝の底部から散在的に「熙寧元宝」「紹聖元宝」「皇宋通宝」の三点の古銭が出土している。

No. 8 遺構（図 9，図10，図21）

A-3区からB-3区にかけて東南より北西へ流れる溝状遺構である。確認面からの深さは約23cmであり，薬研状の断面形態を呈している。遺構の両端は調査区外へ延びており，切り合っているNo. 7 遺構・No. 9 遺構との新旧関係は，土層の観察によってNo. 8 遺構→No. 7 遺構・No. 9 遺構であることが明らかとなっている。

調査区域内において確認し得た遺構の規模は，全長15m80cm，底面巾約25cm，確認面の上巾約 1m14cmであった。南端と北端の比高差は約12cmで，東南から北西へ傾斜している。

No. 8 遺構より出土した遺物は，縄文土器片 3 点，土師器片 9 点であった。このうち，縄文土器では安行 I 式に比定される鉢類の底部が一点出土しており，土師器では土製支脚が一点出土している。他はいずれも小・細片であり覆土上層から出土している。

第21図-9は，No. 8 遺構底部直上より出土した土製支脚である。砂質粘土を用いており，赤橙色を呈している。円錐状を呈しているが，上端部および下半が欠損している。断面形はやや不整の円形で，残存高11cmを測る。土製支脚一点で本遺構の時期を判断することは，必ずしも好ましいとは言えないが，覆土上層包含の土師器片に鬼高期の特徴を有するものの観られることと，本遺物の類例を千草山遺跡第40号住居址および土宇遺跡第83号住居址に求められること等

から、鬼高期中葉～後葉に上限を考えておきたい。

註

- (1) 千草山遺跡発掘調査団編『千草山遺跡発掘調査報告書』（昭和54年）尚、本住居址には、杯、甕類を供伴していないので、直接的に時期区分を指し示さないが、本住居址カマドが同書中においてII-B類に分類され「鬼高期～真間期」にみられるとしていることから例示の対象とした。
- (2) 日本文化財研究所『千葉県市原市土宇遺跡発掘調査報告』（昭和54年）

No.9 遺構（図9，図10）

A-3区からB-3区にかけて南北に走る、やや巾の広い溝状遺構である。確認面からの深さは約15cm～20cm、底部巾約80cmを測る。底面は、ほぼ水平である。調査区域内で確認された遺構の全長は、底面で8m50cm程度であったが、南端は調査区域外へ延びている。北端部は、No.7遺構の手前で止まっており、底径約16cm程度の小ピットが遺構の内・外に一ヶ所ずつ付設されている。No.9遺構とこれら小ピットとの関係は、必ずしも判然とはしないが、覆土が近似しており、配置も溝端部を良く整合していることから、No.9遺構に付帯する施設として取り扱った。

尚、本遺構からは、土師器の細片が18点出土している。器形・特徴のわかるものは皆無であった。

No.10遺構（図11，図12，図21）

グリッドの西端をB-4区からA-4区にかけて南北に走り、No.7遺構に接続する溝状遺構である。確認面からの深さは約20cmで、断面形態はやや丸底状を呈している。遺構の規模は、全長8m70cm、底面巾約45cm、確認面における上巾は約72cmであった。遺構底面における南端と北端との比高差は約12cmで、南から北へ緩やかに傾斜している。覆土は灰緑褐色の砂層と白色粘性土を基本としており、遺構底部には二価鉄の沈澱層が形成されていた。このことと、遺構北端がNo.7遺構に接続していることを考え合わせると、本遺構はNo.7遺構に付属する排水溝として供せられていたものと考えられる。

尚、本遺構南端に近接して観られるNo.42遺構は、他のピット群よりも径、深さともに計測値が大きく、湧水の取水が可能である。取水→使用→排水という水利用の流れから考えた場合、No.42、No.10、No.7は、これら一連の流れ図の中でとらえることも可能であると思われる。

No.10遺構より出土した遺物は、土師器片29点、須恵器片5点であった。いずれも小片のため図示した杯蓋片1点を除き、器形・特徴を有するものは観られなかった。

第21図-8は、No.10遺構底部直上より出土した須恵器の杯蓋片である。胎土に若干の白色砂

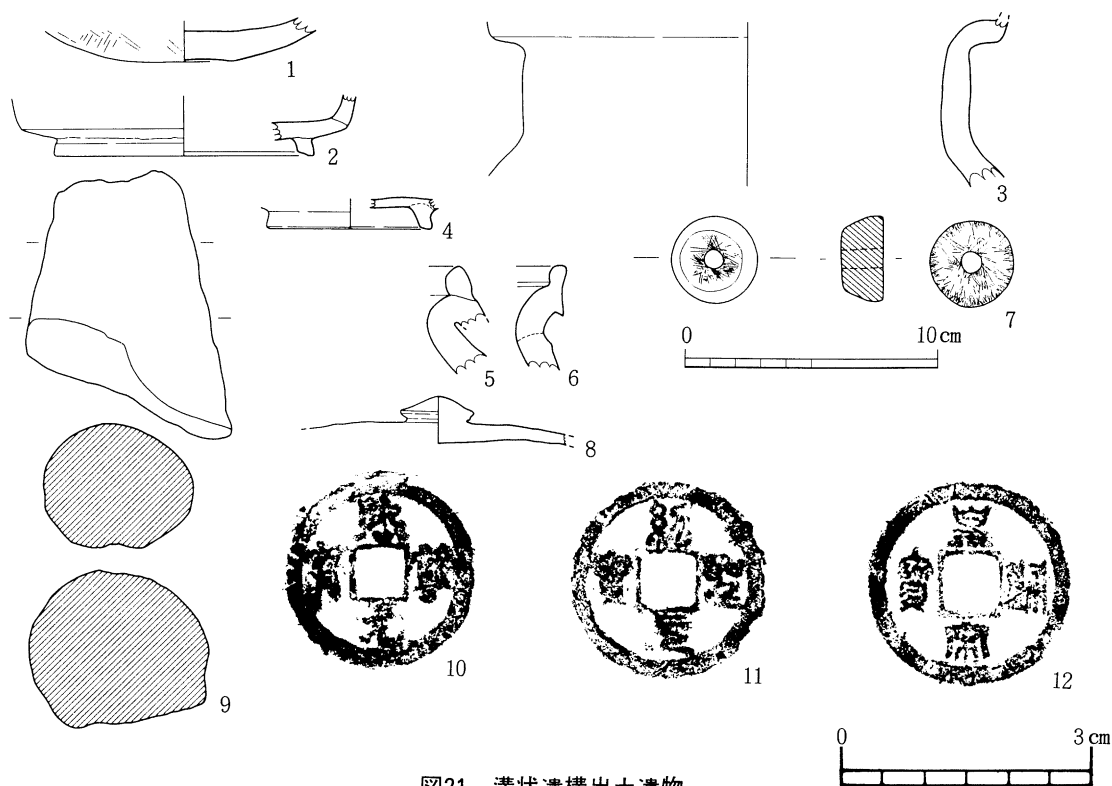


図21 溝状遺構出土遺物

粒を含み、灰白色を呈している。つまみには、低い擬宝珠状のものがつけられている。

口縁部が欠損しているため、カエリの有無や杯身受け部の形態は不明であるが、倉田編年の⁽¹⁾II期に相当するものと思われる。

No.11遺構 (図11, 図13)

A-4区からA-5区にかけて東南東から北北西に流れる溝状の遺構である。東端はNo.17遺構と一部が重複し、西端ではNo.7遺構に連続している。確認面からの深さは約10cmで、底部巾約73cmであった。遺構東端と西側のNo.7遺構との接続部との比高差はほとんど認められない。

No.17遺構との切り合いによる新旧関係は、土層観察によってNo.11遺構→No.17遺構であることが判明しているが、No.7遺構との関係については掴むことができなかった。

尚、本遺構からは、土師器と須恵器の小・細片が出土しているが、器形・特徴のわかるものは皆無であった。

註

- (1) 倉田義広 (1983) 「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』

表 4 溝状遺構出土遺物計測表

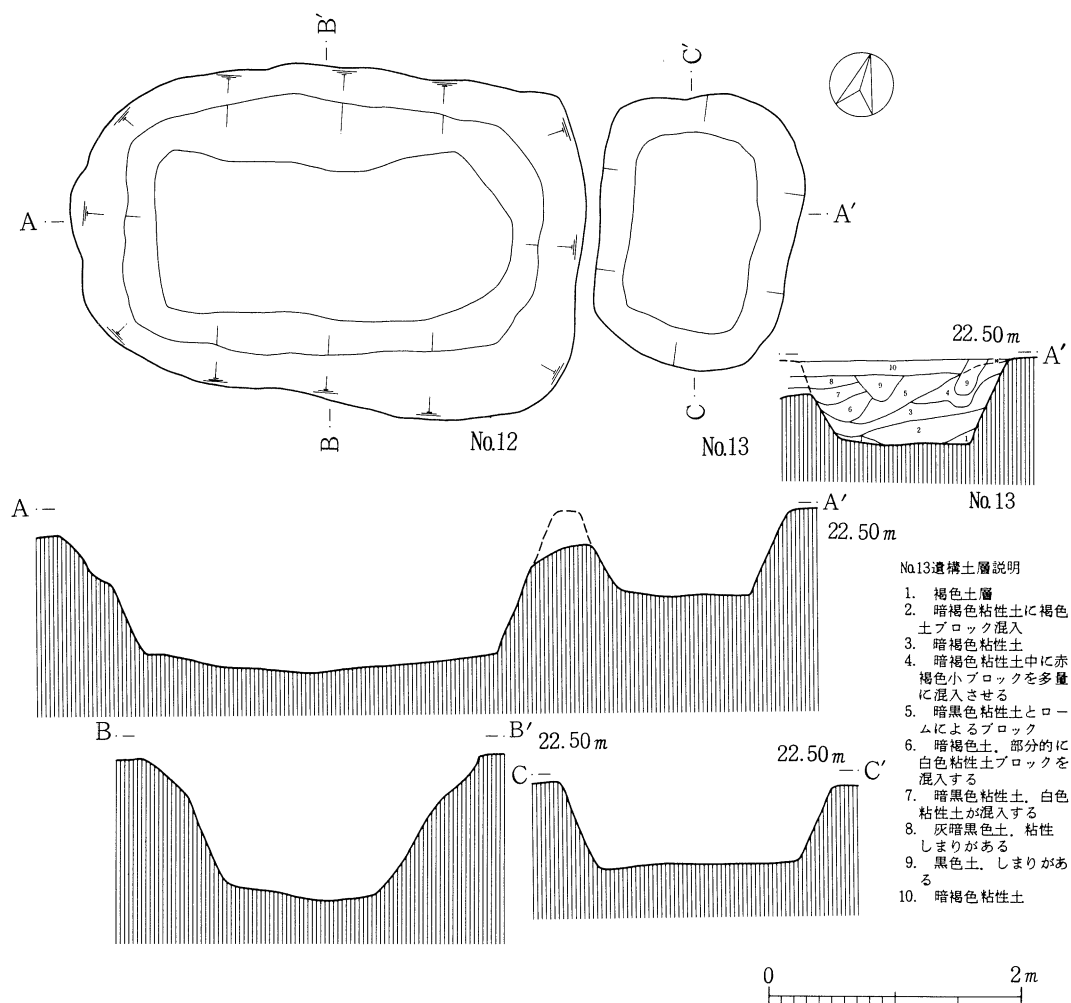
番号	器種	口縁径	器高	底部径	胎土	色調	整形
No19-1	須恵器(釜)	228 mm	74 mm		黒色微粒若干含む	青灰白色	
19-2	〃		65 mm	79 mm	白色砂粒多量に含む	内面、隣灰釉外面、灰色	
19-3	〃 (瓶)	高台部外縁径 169 mm 内縁径 141 mm 高台部高 9 mm 底部径 162.5 mm 残存高 40 mm			} 黒斑多量に含む	釉で被覆	
19-4	甕	—	—			黒灰色	
19-5		—	—	—	白色砂粒多量に含む	灰色	ヘラケズリ
19-6	宇瓦	—	—	厚さ 40 mm ~ 24 mm	—	—	
19-7	女瓦			厚さ 26 mm	—	—	
					—	—	
No20-1	鉄床石	床面 11.5 cm × 12.00 cm 高さ 13.00 cm			—	—	
					—	—	
No21-1	土師器 坏				—	内面、赤彩	
21-2	須恵器	底部径 128.5 mm 高台部径 102.5 mm 残存高 23 mm 高台底部外縁より 13 mm 高台巾 6 mm 高さ 7 mm			—	—	
21-3		高台部径 65 mm 巾 4 mm 高さ 8 mm			白色砂粒まばらに含む	灰色	
21-4	中世陶器				白色砂粒多量に含む	赤紫色	
21-5	〃				〃	〃	
21-6	〃				〃	〃	
21-7	石製紡錘車	厚さ 18 mm	上面径 24 mm	下面径 34 mm	—	—	
21-8	土製支脚	残存高 11 cm			—	赤燈色	
21-9	古銭	熙寧元宝					
21-10	〃	紹聖元宝					
21-11	〃	皇宋通宝					

4. 土坑状遺構（No.12遺構～No.18遺構）

今回の調査区域内より検出された土坑は、No.12遺構からNo.18遺構までの7遺構であった。各遺構の分布は、前述のとおりである。

No.12遺構・No.13遺構（図7，図22～図23）

A-1区に並列して位置している。平面形態はいずれも隅丸の長方形を呈し、No.13遺構の長軸長とNo.14遺構の短軸長とがほぼ一致している。底部は平底でNo.13遺構の方が浅く、No.19遺構底部との比高差は、約60cmであった。No.12遺構は、No.1遺構と同様に湧水の流れ込みが著しく、調査期間中に確認得た範囲においても、放置状態における湧水の水位は底から60cmに達している。貯水池的な用途に使用されたものとも考えることもできる。



覆土の堆積状態は、No.12遺構・No.13遺構ともに同様近似していたが、両遺構ともに湧水および降水による崩壊が著しく、No.13遺構の短軸を記録し得るに過ぎなかった。覆土は粘性の強い暗褐色土を基本としており、井戸跡〔III〕層の堆積土と基本的には変わらなかった。No.12遺構の長軸方向とNo.13遺構の長軸方向とが一致していることから、同一時期に利用された遺構と考えることができる。

尚、遺構それぞれの計測値は、No.12遺構が長軸 3 m 35cm, 短軸 2 m 65cm, 深さ 1 m 15cmであり、No.13遺構では、長軸 2 m 10cm, 短軸 1 m 65cm, 深さ 67cmであった。

No.12遺構より出土した遺物は、須恵器片 7 点, 土師器片 4 点, 砥石 1 点であった。須恵器片には、かえりを持たない坏蓋の口縁片や甕類・瓶類の小片が含まれており、殊に遺構底部直上から甕類の胴部片が出土している。土師器には、底部回転糸切未調整の坏片や鬼高期の所産と思われる高坏などの小片が含まれている。遺構底部直上出土の胴部片一点を除き、すべて覆土上層から出土している。尚、図示できたものは、第23図-1の砥石 1 点であった。砥石の計測値は、残存長 100mm, 巾 34mm, 高さ 38mmであった。No. 1 遺構出土の砥石と近似した材質の製品である。

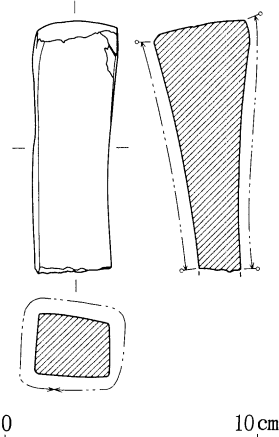


図23 No.12遺構出土遺物

No.13遺構より出土した遺物は、土師器片 2 点, 瓦片 2 点であり、他に遺構底部から種子が 3 点出土している。土師器は坏類と思われる小片である。

No.14遺構 (図 8, 図24)

B-2 区の東南端に位置する土坑である。確認面からの深さは非常に浅く、底部は平底である。平面形態は、一辺約 90~140cm の隅丸方形を呈している。覆土は、黄白色粘性土 (下層) と暗褐色土 (上層) とに分けられ、下層覆土内より土師器片が 2 点出土している。

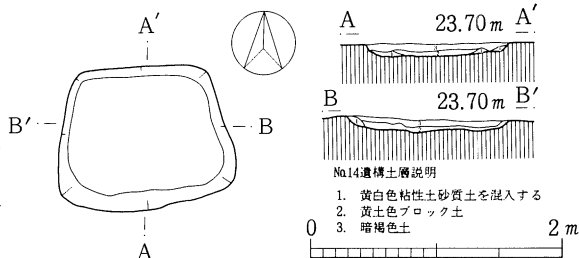


図24 No.14遺構実測図

細片ではあるが、坏類の体部片と甕類の胴部片と思われる。

No.15遺構・No.16遺構 (図 9, 図25)

No.15遺構は B-3 区の西南に位置している。平面形態は、やや胴長の楕円形を呈している。土層観察から、3 基の土坑が重複していたものと考えられるが、覆土が近似しており、平面も平底であることから確証を得ることはできなかった。覆土は、暗褐色粘性土と白色粘性土ブロックからなり、No.16遺構覆土と近似している。長軸長 2 m 5cm, 短軸長 84cm を測り、確認面か

らの深さは28cmであった。

No16遺構はB-3区の西南、No15遺構の東側に平行して位置している。No15遺構との間隔は約1mを測る。確認面におけるプランは、不定円形を呈しているが、土層観察によって径約1m40cmの円形土坑と、短軸径約1m70cmの楕円形土坑および径30cm程度と径60cm程度のピットが重複していたものと思われる。しかし、覆土がいずれも近似しており、プランや切り合い関係を調査中には十分に確認することができなかった。円形土坑と楕円形土坑との底部における比高差は、ほとんど認められない。

No15遺構からは、土師器片9点、No16遺構からは、土師器片20点、須恵器片3点、陶磁器片1点が出土している。いずれも覆土上層より出土した細片であった。

No17遺構（図13、図26）

A-5区の西端に位置し、一部がNo11遺構と重複している。切り合いによる新旧関係は、確認面による覆土の状況と、断面の土層観察から、No11遺構→No17遺構であることを確認している。

平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長軸長2m48cm、短軸長1m93cmを測る。遺構底部には、不定形の土小坑とピットの痕跡が認められるが、覆土にはNo17遺構との相違を認めることができなかった。底部は全体的に東へ傾斜しており、東端部と西端部との比高差は約18cmであった。覆土は、粘性の強い褐色土層（上層）と灰褐色砂質土層（下層）とに分けられる。褐色土層は本遺跡内の遺構で一般的にみられるもので、降水あるいは湧水に対して透過性の低い

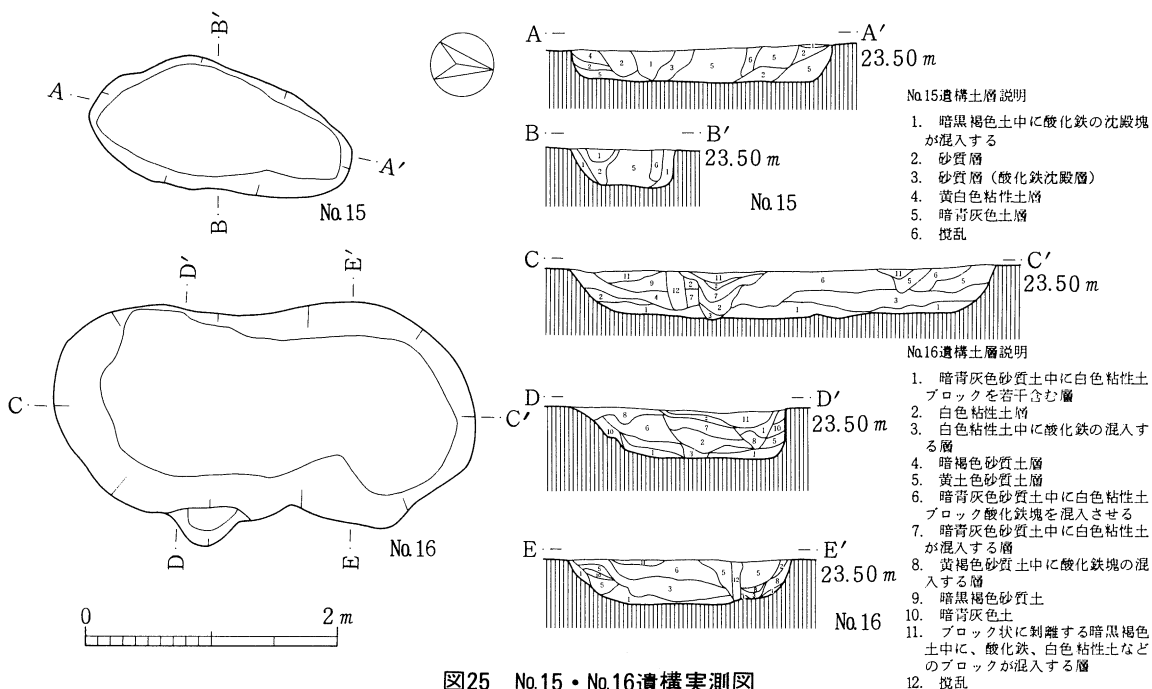


図25 No.15・No.16遺構実測図

土質であるが、灰褐色砂質土は透過性も高く、近接する後背台地の山砂層に類似している。上層を一般的な自然堆積層と考えるならば、下層は外的な要因による短時間の堆積層と見做すことができる。

No.11遺構との新旧関係は、先に述べたとおりであり遺構間の同時性は認められないものの、遺構東端の位置がほぼ一致していること、遺構長軸の方位がほぼ一致することなど類似点が認められ興味深い。

尚、本遺構からは、須恵器片2点と鬼高期—I期以前に比定される高杯の脚部1点とが出土しているが、覆土中であり、切り合い関係とも整合しないことから混入品と考えられる。

No.18遺構 (図13, 図27)

B-5区に位置する不定形の土坑である。遺構底面には二段の狭いテラスを有している。遺構確認面における計測値は、長軸長3m33cm、短軸長2m20cmを測り、底部最下面における長軸長は1m72cm、短軸長は58cmであった。長軸の方位は、概ね南北を向いている。

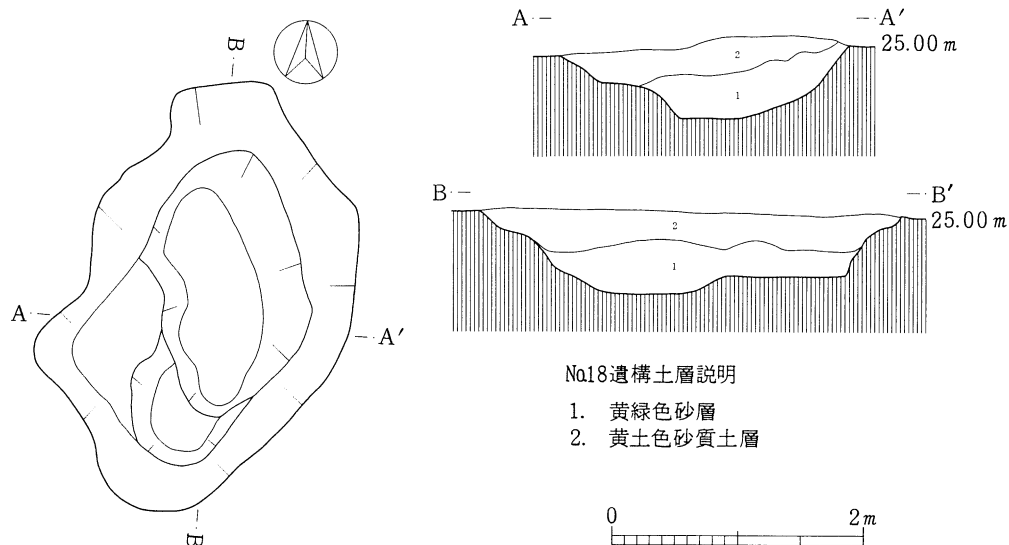


図27 No.18遺構実測図

覆土は、黄土色砂質土層（上層）と黄緑色砂質土層（下層）とからなっており、他の遺構とは異なる様相を示している。堆積は、谷の奥側にあたる東側から西側へ流れ込む様にしてみられ、上層と下層の境は比較的に明瞭であった。No17遺構の下層堆積土と同様、外的な要因による短時間の堆積と考えられる。

覆土中からは、土師器の杯片2点と甕片1点が出土している。いずれも小片のため図示できないが、杯には体部外面全面にヘラケズリ整形の施されているものが認められる。口唇部のつくり、体部の形態などから佐久間・豊巻・笹生編年のⅡa期あるいはⅡb期に比定されるもの⁽¹⁾と思われる。他の二点についても、この範疇に含まれるものと思われることから、本遺構の下限を示す資料と考えられる。

註

- (1) 佐久間豊・豊巻幸正・笹生衛（1983）「旧上総国における奈良・平安時代 土器編年試案」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』

5. 小ピット（No19遺構～No67遺構）

今回の調査区域から検出されたピットは、No19遺構からNo67遺構までの49遺構であった。遺構の分布については、概略を既に述べたとおりである。（図8～図13・図28）

調査時において、ピット間の関係あるいは性格について推測し得たものは、B-5区のNo63～No66遺構による一間四方の建物のみであった。その他のものは、B-2区東端、B-3区、B-4区西半に小群をなしているが、各群内でのピット間の関係を捉えることはできなかった。

No63～No66遺構

B-5区西端に位置し、一間×一間の建物の柱穴と考えられる。平面形態は、柱間2m30cm～40cm×2mの不整長方形を呈しており、長軸の方位は磁北とほぼ一致している。後節7で報告する遺物包含層の堆積後に建てられており、各柱穴の底面径が短径で20cm～28cm程度のものである。立地が湿潤でありながら、柱材や柱痕が検出されなかったため不明瞭ではあるが、中・近世以降に建てられた作業小屋程度の建物であったものと思われる。

No48遺構

B-4区の東南端に位置する円形のピットである。遺構底面における径は62cm～72cmを測る。掘り方は壁が直に掘り込まれており、底面に24cm～28cmを測る小ピットが認められる。断面の観察から掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられるが、調査区域内には対応する様なピットが検出されていないことから、確証は得られていない。遺構内からは、遺物が全く出土しな

表 5 小ピット計測値一覧表

遺構No	平面形態	断面形態	確認面計測値： 長径×短径×深さ(cm)	底面計測値： 長径×短径 (cm)	挿図番号	備 考
16-b	(円形)	隅丸形			図9.図25	Na16遺構と重複
19	円形	隅丸形	58×52×18	44×34	図8	
20	円形	隅丸形	63×58×24	41×38	"	
21	円形	隅丸形	39×38×22	8×8	"	
22	円形	長方形	41×36×30	24×22	"	
23	円形	隅丸形	46×40×20	28×24	"	
24	円形	隅丸形	30×28×12	16×14	"	
25	円形	隅丸形	44×42×22	32×30	図9.図10	土師器細片7点
26	隅丸方形	長方形	77×70×21	52×41	"	
27	円形	不明	45×37×10	21×20	"	
28	円形	隅丸逆台形	58×48×30	41×30	"	
29	円形	隅丸形	30×27×13	10×7	"	
30	円形	隅丸形	×10	30×27	"	
31	円形	隅丸形	60×57×35	44×41	"	
32	円形	隅丸形	35×34×18	18×17	図9.図10	
33	楕円形	隅丸形	48×30×12	18×7	図9.図12	土師器細片5点,馬歯1点
34	円形	不整形	30×26×12	10×7	"	
35	円形	長方形	36×28×32	20×18	"	土師器細片1点
36	円形	隅丸形	45×43×13	23×16	"	
37	円形	長方形	44×42×15	32×29	"	
38	円形	隅丸形	62×44×30	40×34	"	須恵器片4点 底面に一段のテラスを有している
39	円形	隅丸形	30×26×16	20×10	"	
40	円形	不整形	70×50×16	50×28	"	底面に2つのピットを有している
41	円形	逆台形	58×?×30	28×22	"	Na8遺構と一部重複,切り合い関係不明
42	円形	隅丸形	56×50×50	25×22	"	
43	円形	隅丸逆台形	72×60×24	60×45	"	
44	円形	隅丸形	80×64×32	36×34	"	
45	円形	隅丸形	35×34×18	18×17	"	
46	円形	隅丸形	34×33×25	18×18	"	
47	円形	隅丸形			図11,図12	
48	円形	長方形	104×98×76	72×62	"	底面に28×24(円形)の柱穴跡がみられる
49	円形	隅丸形	46×36×16	20×13	"	
50	円形	隅丸形	42×33×21	18×12	"	
51	円形	隅丸形	29×19×26	7×6	"	
52	円形	隅丸形	52×48×29	29×12	"	
53	円形	隅丸長方形	41×36×18	22×10	"	
54	円形	隅丸形	67×64×24	39×37	"	
55	円形	隅丸形	92×82×62	40×32	"	
56	楕円形	隅丸形	78×48×16	43×34	"	底面に2つのピットを有している
57	円形	隅丸形	70×67×20	42×36	"	
58	円形	隅丸逆台形	42×38×36	24×15	"	土師器片6点,須恵器片1点
59	円形	隅丸形	30×26×16	20×10	"	
60	不整形	不整形隅丸形	62×38×32	38×17	"	
61	円形	隅丸形	36×32×34	20×18	"	
62	円形	不整形逆台形	51×42×46	40×21	"	
63	円形	隅丸長方形	38×32×62	22×20	図13	
64	円形	長方形	36×32×40	23×20	"	
65	円形	隅丸長形	43×40×45	30×28	"	
66	円形	長方形	38×36×36	26×24	"	
67	円形	隅丸形	42×40×15	23×21	"	

った。

その他のピットについては、表－5小ピット計測値一覧表のとおりである。

小ピット49ヶ所のうち、遺物を出土したものは、No25遺構・No33遺構・No35遺構・No38遺構・No58遺構の計5遺構のみであった。

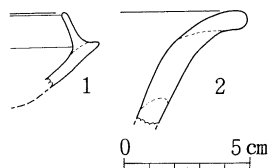
出土した遺物は、いずれも覆土中の小・細片であったため、器形や特徴のわかるものは、図示した2点のみであった。

出土遺物の数量については、表-5に記載したとおりであるが、No33遺構からは土師器細片とともに馬の歯が出土しており、No38遺構からは、同一個体と思われる須恵器甕の胴部片のみが出土している。

図28に図示したものは、No58遺構より出土している。

1は須恵器の坏身口縁部である。胎土には白色砂粒を混入し、灰白色を呈している。口縁部のみの細片であるため、口縁部径、器高などは不明であるが、器厚は体部、受け部ともに薄手で、特に受け部は1.5cm程度のかえりが直線的に延びている。

2は、土師器の甕の口縁部である。胎土には稀に白色砂粒が混入している。焼成が甘く、白茶色を呈している。小片のため、径・器高ともに不明であるが、頸部から口縁部にかけてラップ状に開くもので、口唇部は単純に丸められている。頸部外面に、僅かなロクロ目が観察されている。



6. 堰跡 (No68遺構)

a) 遺構 (図6・図29)

A-5区からB-6区にかけて、後背台地の縁辺にそって構築されている。比高2.5m、軸長28.5mを測る。調査当初、自然地形を利用し台地縁辺に狭い切り通しを通すことで谷の湧水を迂回させたものと考えたが、トレンチによる断面の観察とB-4区以東に観られる遺物包含層が本遺構の下層にまで延びていることから、人工的に構築された堰跡であることが判明した。

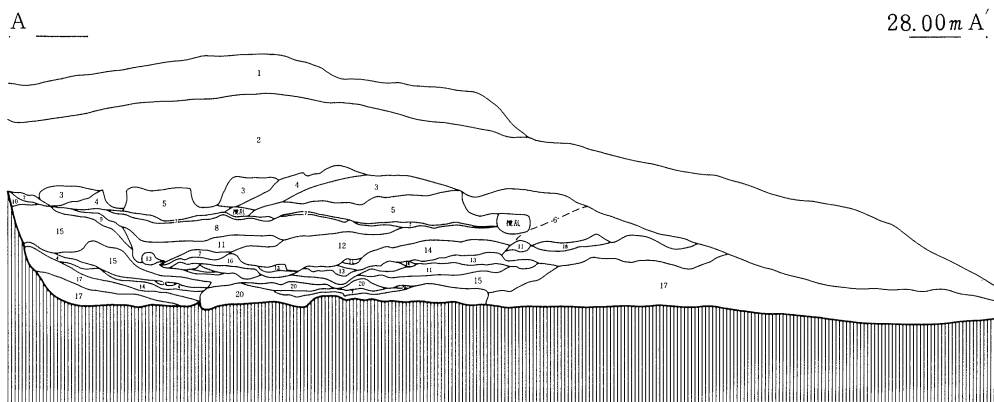
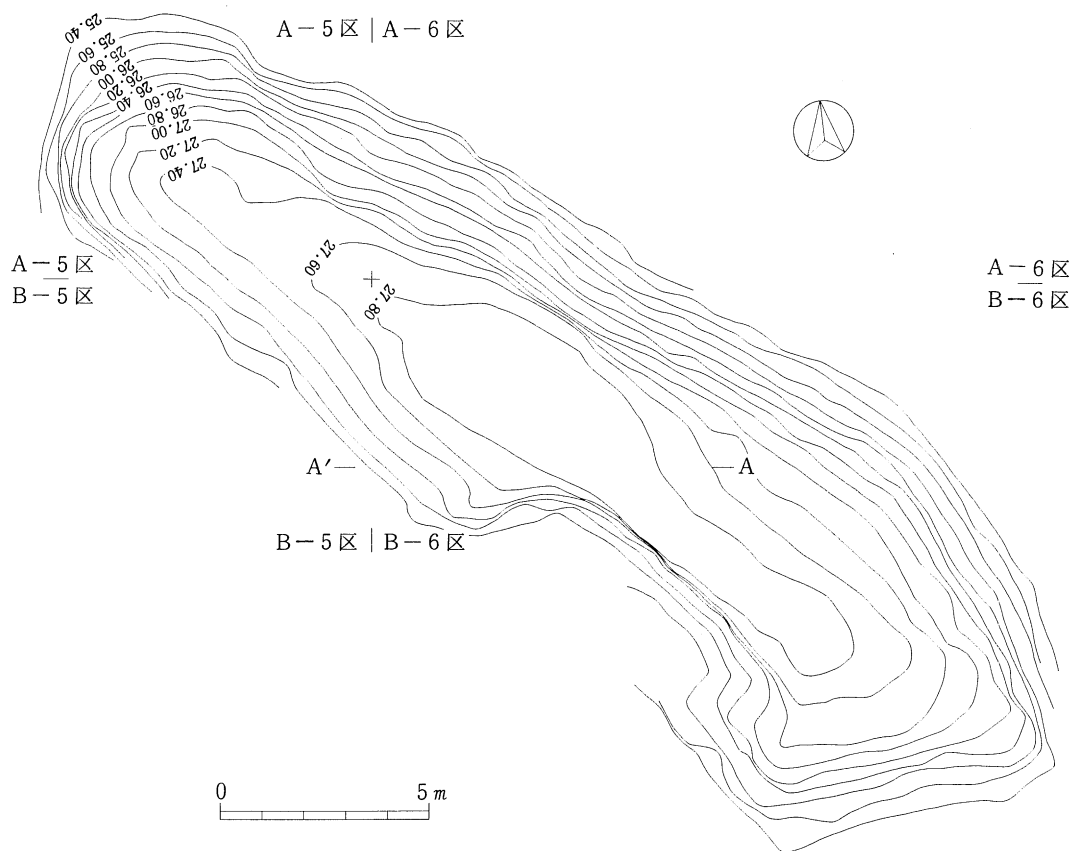
調査時における池ノ谷遺跡の現状は、大半が休耕による荒蕪地であった。しかし、表土層除去後の土層観察からは、数面の耕作面が観察されており、堰跡の西側10mのところまで及んでいる。耕作面の時期や面数は調査の対象としなかったため不明であるが、堰跡北端に狭い用水の引き込み溝の存在を確認している。堰跡北端の切り通しを経て東へ流れている湧水が、現在でも調査区域北側のポンプ小屋を経て用水に利用されていることから推察して、耕作に足るだけの用水を供給していたものと考えられる。

表土層内より内耳土器片2点と磁器製花瓶1点が出土している。

b) 遺物 (図30)

第28図1, 2は内耳土器(ほうろく)の内耳片である。いずれも小片のため器高・口径とも

図28 No58遺構出土遺物



№ 68 遺構土層説明

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 暗 褐 色 土 (表土層) 篠竹等の木根を混入させる | 12. 黄 土 色 砂 11層と同様(緑灰白色砂の混入率が高い) |
| 2. 黄 褐 色 土 粒子の細かな砂質土 | 13. 緑 灰 白 色 砂 |
| 3. 黄 土 色 山 砂 白色の弱粘性ブロックが混入する | 14. 黄 緑 灰 白 色 砂 |
| 4. 黄 土 色 山 砂 白色の弱粘性小ブロックを混入させる | 15. 黄 土 色 砂 に 赤 褐 色 を 斑 点 状 に 含 む |
| 5. 白 色 砂 弱粘性の白色土 | 16. 黄 土 色 砂 |
| 6. 白 褐 色 砂 弱粘性。二価鉄の沈殿ブロックが混入 | 17. 緑 白 色 砂 |
| 7. 赤 褐 色 二価鉄の沈殿ブロック層 | 18. 暗 緑 灰 色 砂 と 茶 褐 色 土 |
| 8. 黄 土 色 砂 やや大きな砂粒、ブロックなどを多量に含んでいる | 19. 暗 緑 灰 色 砂 |
| 9. 緑 黄 土 色 砂 | 20. グライ化粘性土 |
| 10. 茶褐色砂質土 | |
| 11. 黄 土 色 砂 緑灰白色砂の混入が多く観られる | |

図29 №68遺構実測図

に不明である。体部外面及び内耳に形態的な差が認められることから、1と2とは別個体であるが、石川城郭跡における内耳土器分類のⅡ類に含まれるものと思われる。⁽⁴⁾

3は鶴頸状の頸部を有する磁器製の一輪差しと思われる。頸部から体部にかけて、外面全面にぐり文（たこ唐草文）の青色絵つけが施されている。

註

- (1) 鈴木英啓（1983）「Ⅴまとめ 1. 調査の成果」『石川城郭跡』（市原市文化財センター調査報告書第2集）

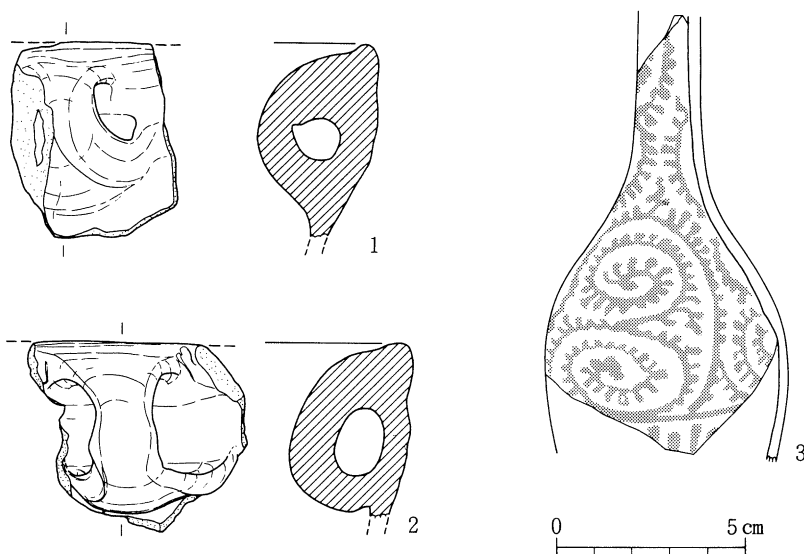


図30 No.68遺構内出土遺物

7. 遺構外出土遺物

池ノ谷遺跡の遺構外出土遺物は、その出土層位から、下記の2類に大別することができる。

- 〔Ⅰ〕 A-1・B-1区からA-5・B-5区にかけて、遺構確認面より上層から出土した遺物群。
- 〔Ⅱ〕 B-4区以東の地形的な落ち込み（遺構確認面よりも下層）から出土した遺物群。

〔Ⅰ〕 遺構確認面よりも上層の遺構外出土遺物

池ノ谷遺跡は「Ⅲ. 調査の方法」でも触れたように、調査区域全域が、数次に及ぶ耕作によって、地山面（白色粘性土層）に至るまで攪乱を受けている。従って、各時期の生活面は、削平され全く遺存していなかった。

このため、遺構外出土遺物についても、遺構確認面から現在の表土層に至るまで、散逸的に包含しており、層位的な整合性が認められなかった。

遺物の遺存状態は、小・細片が多く、遺構覆土内出土遺物と同様の傾向を示している。整理作業の結果から見る限り、接合するものも殆んど認められていない。（重機による表土層除去を実施しているため、この際に失なったものも見込まれるので、十分な整理結果とは言えないが）

しかし、遺物の種類・時期などは、遺構覆土内出土遺物とほぼ同様であり、分布の状態も、縄文時代の遺物を除くと、遺構周辺に集中する傾向が認められた。

これらの事柄は〔Ⅰ〕類の遺物群が、調査区域外で使用され廃棄された、二次堆積物群であることを示唆しており、溝状遺構を主体とする（今回の調査範囲内の）遺跡の性格を反映しているものと考えることができる。

〔Ⅰ〕類のうちで、図示し得たものは、土師器碗（第31図2）、土師器坏（15）、須恵器蓋坏坏身（20）、須恵器高台付坏（第32図5、7、9）、須恵器坏（15）、緑釉陶器皿類（16）、長頸瓶（17）、灰釉陶器瓶類（19、21）、土師器台付甕（第33図3）、中・近世甕類（10～12）、中・近世燈明皿〔かわらけ〕（13、14）砥石（18、19）、古銭（第34図1～3）、平瓦（4～6、8、10、11）の計27点及び第35図～第37図に掲げた縄文時代の土器および石器であった。

第31図から第34図までに掲載した遺物について観ると、次の様なことが看取される。

第31図2に掲げた土師器碗は、類例が国分寺台の台遺跡より出土している。住居跡内の一括資料中に含まれるもので、そのセット関係から7世紀代に比定されている。⁽¹⁾

また、同図20に掲げた須恵器蓋坏の坏身口縁部は、たちあがり部の特徴から7世紀代前半に比定し得る。

是に対して、〔Ⅰ〕類中には上記二点に先行する形態のものが見受けられず、（ただし、縄文時代の遺物群は除く。）池ノ谷遺跡の上限を7世紀代と観ることができる。⁽²⁾

他方、7世紀代に後続するものも見受けられず、第31図15に掲げた土師器坏が、8世紀代後半の特徴を有し、⁽³⁾ 時期的な隔りを若干埋めるものの、高台付坏・皿類、緑釉陶器片、灰釉陶器片などは、9世紀代後半以降、殊に10世紀代前半を中心とした時期の特徴を有している。⁽⁴⁾

第33図3に掲げた土師器台付甕は、上部が全く欠損しているため、年代的な判断の決め手に欠くが、台部・貼付部ともに縦方向のヘラケズリによって仕上げられており、後出的な要素が窺われる。⁽⁵⁾

第33図13・14に掲げたものは、所謂かわらけ（燈明皿）である。法量は大・小に分かれ、口

縁部の外反するもの(13)と、体部が内反気味に立ち上がるもの(14)とがある。かわらけの市内に於ける類例は、南総中遺跡⁽⁶⁾、石川城郭跡⁽⁷⁾などに求められる。殊に、石川城郭跡については、報告者によって形態的な分類が行なわれており、それに依ると、池ノ谷遺跡出土のものは、13がⅢ類、14がⅡ類に含まれるものと思われる。従って、年代観もこれにならい、16世紀後半から17世紀前半⁽⁸⁾の所産と考えられる。

古銭は、註8に述べたとおりであり、北宋銭である。渡米銭は、寛文10年(1670)の渡米銭使用禁止令迄、通貨として使用されていたことが識られている。⁽⁹⁾

砥石については、前述井戸跡で報告済みの、鞆の羽口や碗形滓などと共伴した砥石と近似した材質のものであり、推定断面形が畧方形を呈する点でも一致している。従って、第33図18・19に掲げたものについても、ほぼ同時期の所産と考えておきたい。

女瓦(平瓦)は、凸面に縄目タタキの観られるもの(第34図4～6, 8)と格子目タタキの観られるもの(第34図10, 11)とがある。いずれも小片のため十分な観察は行なえていない。

以上の遺物を瞥見すると、いずれも小・細片が多く、個々について厳密な意味での年代観は与えられないものの、7世紀代(前半代か)から8世紀後半代・9世紀後半代～10世紀前半代・16世紀後半代から17世紀前半代にかけてのものが、不連続な形で観られることがわかる。これは、池ノ谷遺跡の歴史的な経過を示唆するものであり、殊に井戸跡を中心とする9世紀後半代～10世紀前半代に、ひとつのepochを有することは、興味深い事柄であると思われる。

〔Ⅱ〕B-4区以東の遺構確認面下層出土の遺物

池ノ谷遺跡の立地は「Ⅱ、遺跡の位置と地理的環境」でも触れたとおり、調査区域の東南部を旧小河川が掠め、海土有木の微高地を西進して、養老川へと注いでいたものと推測される。

これは有木面に観られる旧河川の跡や、池ノ谷遺跡の西側に位置する字「北堀」の存在を根拠としたものであるが、それと同時に、B-4区以東に観られた自然地形的な落ち込みの存在に依るところが大きい。

地形的な落ち込みは、遺構確認面の検出された時点に於いて、第6図に示した範囲に暗褐色土の堆積土が存在することで確認した。広がりには調査区域外に延びているため、全体像を知り得ていない。

調査は、該当地区を4m×4mの小グリッドに再区画して実施し、規模・範囲・性格の判明に努めた。

しかし、折悪しく、例年には見られない降雪と厳冬に見舞われ、地下水位の急激な上昇を招き、調査できる状況にはなかった。従って、結局は遺物の回収に終始せざるを得なかった。グリッドは、調査中も湧水によって冠水していた。従って、遺物は全て小グリッド毎の取り挙げとし、層位的な関係は捉えられなかった。また、調査そのものも、作業上の安全確保を計った

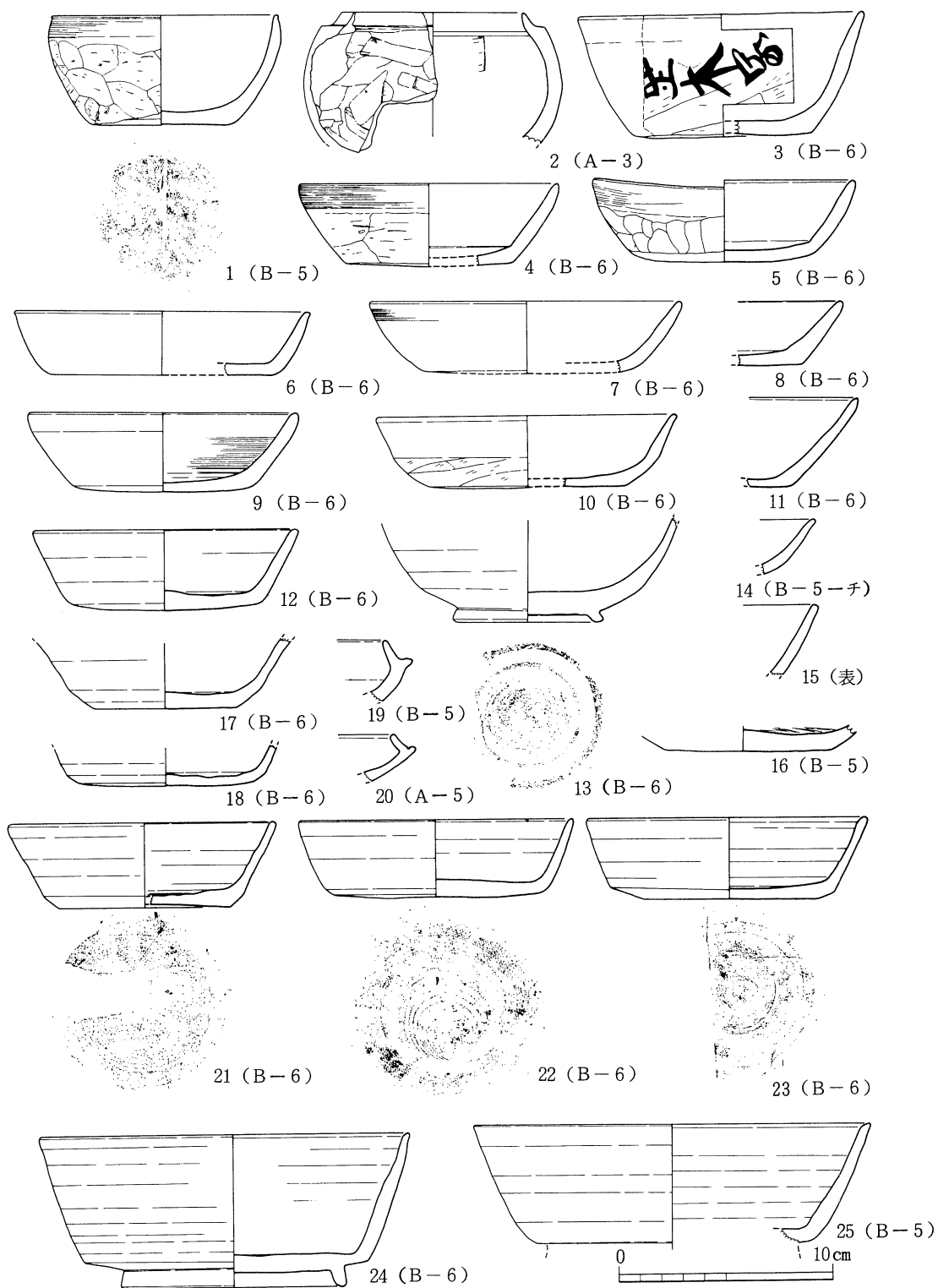


図31 遺構外出土遺物〔I〕

ため、最下層にまで及んでいない。

以下、調査時の所見と、出土遺物の観察結果とを略述しておきたい。

遺構外出土遺物の〔Ⅰ〕類については、前述のとおりであり、層位的に散逸的な傾向がみられている。これに対して〔Ⅱ〕類としたB-4区以東の遺物包含層については、全体的に二次的な攪乱の手が加わっておらず、層位的には良好な状態で遺存していたものと思われる。

次に、遺物の分布状況から観ると、B-4区周囲には甕類が多くみられ、B-6区に残存率の高い遺物の多いことが知れる。

時期的には〔Ⅰ〕類に欠落していた8世紀後半代～9世紀初期のものと〔Ⅰ〕類に重複する9世紀後半代～10世紀前半代のものとに集中している。

図示し得た遺物は、第31図～第34図に掲げた遺物のうち〔Ⅰ〕類としたものを除く全てであり、土師器坏類（第31図1，3～14，16）須恵器坏類（第31図17～19，21～23，第32図3）須恵器高台付坏類（第31図24～第32図1，2，4，6，8，10）須恵器坏類蓋（第32図11～14）灰釉陶器瓶類（第32図18，22）灰釉陶器皿類（第32図20）須恵器鉢類（第32図23，24）須恵器高坏（第32図25）須恵器甕類（第32図26，27）土師質土器高台付埴（第33図1）土師器台付甕（第33図2）土師器高坏（第33図4，5）土師器甕類（第33図6～8）土師器甕（第33図9）管類（第33図15）石製紡錘車（第33図16）砥石（第33図17，20）女瓦（第34図7，9，12）および陰刻花纹緑釉陶器（第38図）であった。

土師器および須恵器の坏類は、第31図19に掲げた蓋坏の様に7世紀前半代のものを含んでいるが、既して8世紀中葉から後半代に比定されるものである。⁽¹⁰⁾

このうち、第31図3には体部外面に「□木家」の墨書が観られる。⁽¹¹⁾「一家」の記載がある墨書土器は、各地に類例を求められる。近隣では、袖ヶ浦町遠寺原遺跡より「家士」「土家」「家」などの墨書が出土しており、⁽¹²⁾佐倉市江原台遺跡からは「中村家」、⁽¹³⁾吉原山王遺跡からは「吉原仲家」などの墨書が出土している。⁽¹⁴⁾

旧上総国において、初めて奈良、平安時代の編年観を示した東金市山田水呑遺跡からは、「山口館」と書かれた墨書が出土しており、⁽¹⁵⁾「山口郷」との関係で注目されている。他方、「家」については、集落内における社会構成を知る上で良好な資料となり得る事が指摘されており、⁽¹⁶⁾「館」「家」の違いを合わせて興味の持たれるところである。

13に掲げたものは、土師器高台付坏であり、内面に黒色処理が施されている。第31図中のものの中では、例外例であり、時期的に新しい方へ隔りがある。

21～23に掲げたものは、須恵器坏類である。法量・形態的には非常に類似しているが、底部の製作技法は三様を示している。⁽¹⁷⁾胎土・技法などから考えて、21は千葉市域（下総）の製品、⁽¹⁸⁾22は市原市（上総）石川窯の製品、⁽¹⁹⁾23は、同市永田・不入窯の製品と⁽²⁰⁾考えられる。

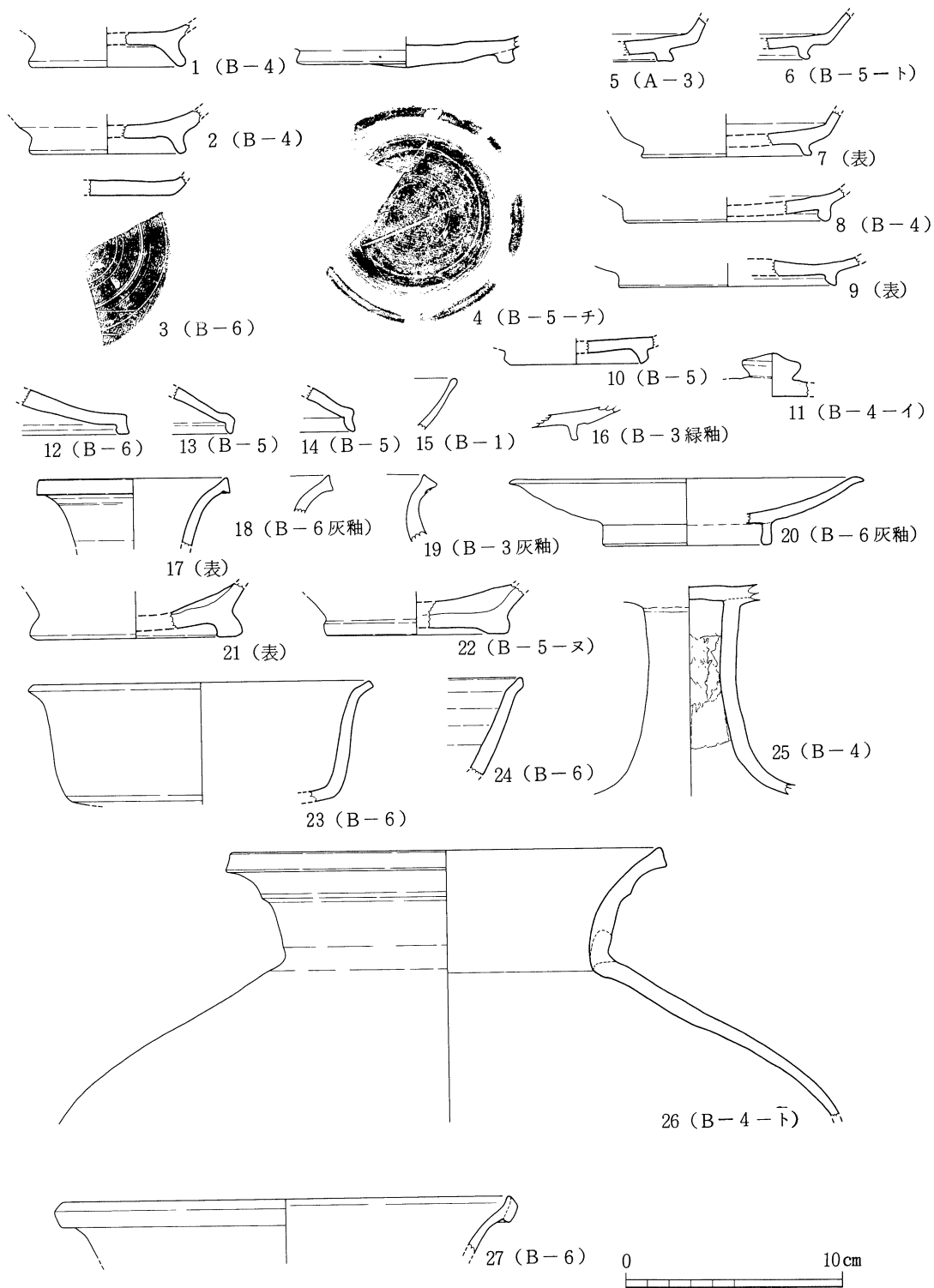


図32 遺構外出土遺物〔Ⅱ〕

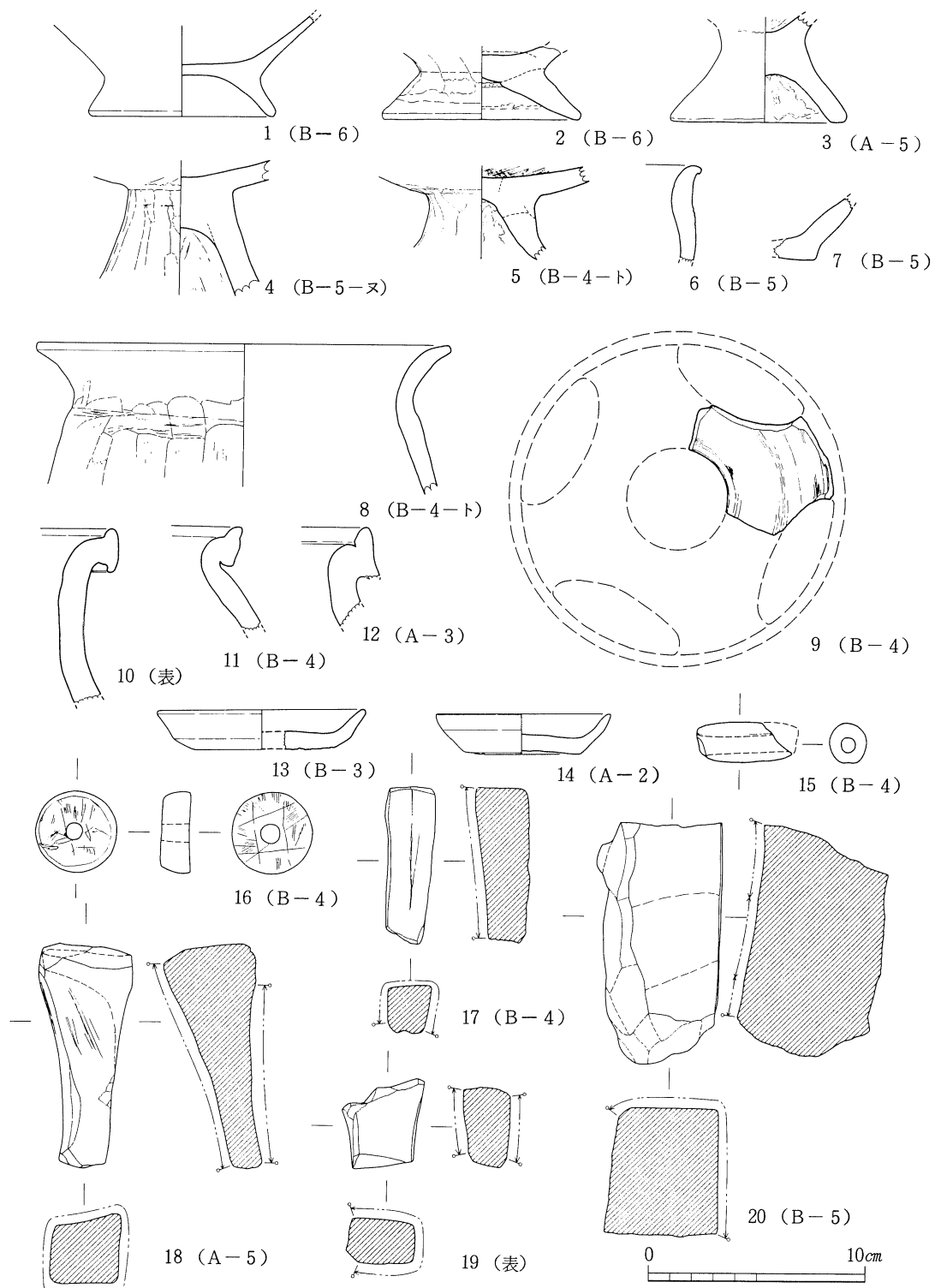


図33 遺構外出土遺物〔Ⅲ〕

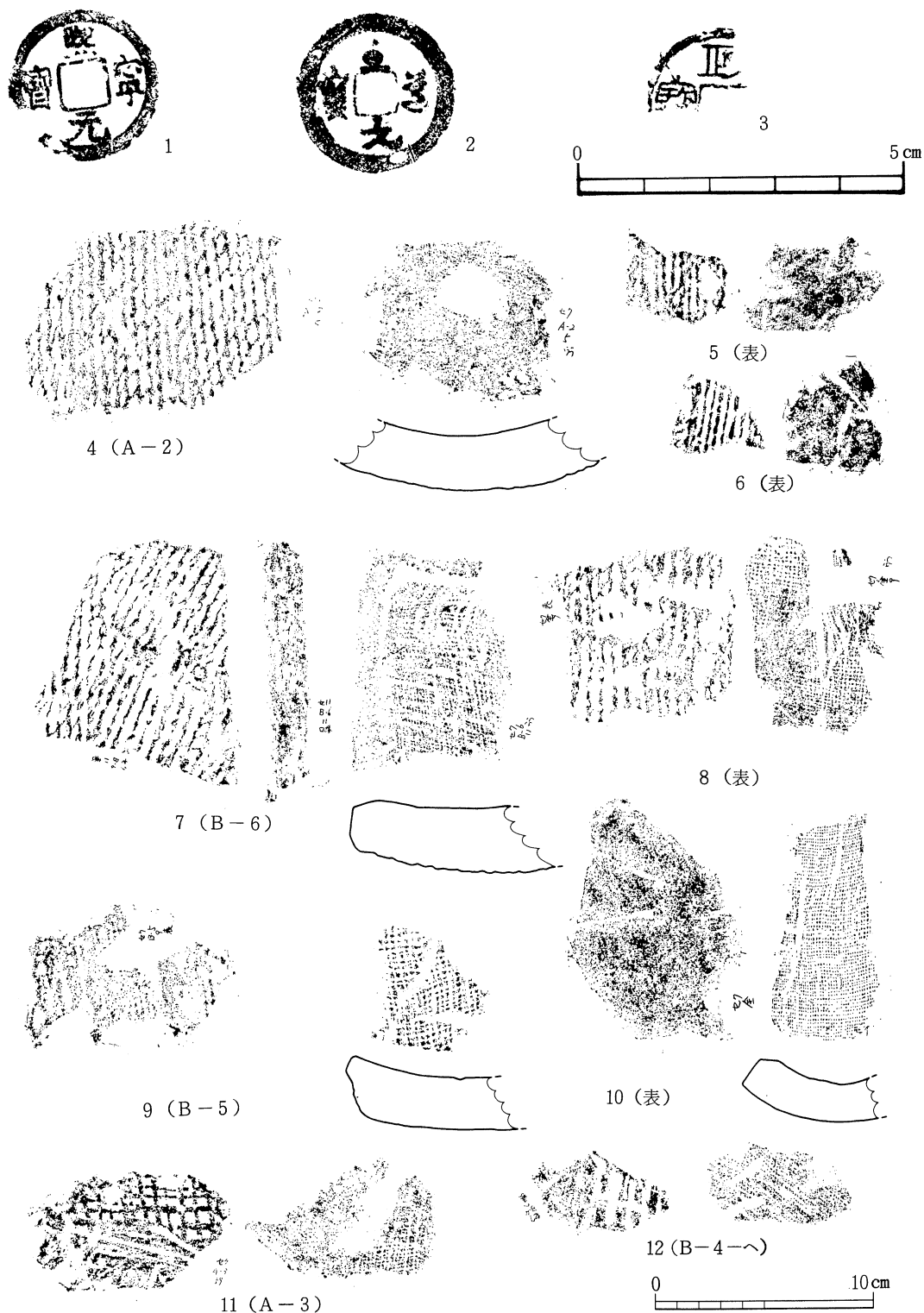


図34 遺構外出土遺物〔Ⅳ〕

24・25についても、同様の理由から、永田・不入窯の製品と考えられる。⁽²¹⁾

第32図に掲げた高台付坏・皿類、蓋類、鉢類、瓶類については、4に掲げた高台付坏が井戸跡〔Ⅲ〕層群出土のもの（第16図-14）と同類であり8世紀初頭に比定され⁽²²⁾、蓋類についても8世紀代の所産と考えられるのに対し、⁽²³⁾他は9世紀後半代～10世紀初頭のものと思われる。⁽²⁴⁾

第32図25は、須恵器高坏の脚部である。長脚でスカシのないものである。7世紀代の所産と考えられる。

26・27は須恵器の甕類である。共伴物が不明なため年代観は与え難い。しかし、26については、頸部に断面形略三角形の凸帯が廻っており、胎土・製作上の技法（体部内面の当て具痕）などから、湖西窯の製品と考えられる。⁽²⁵⁾

第33図2は台付甕であり、台部端部に横ナデが施されている点で〔Ⅰ〕類にみられた第33図3よりも前出的である。⁽²⁶⁾8世紀前半代のものと考えられる。

第33図1は、所謂土師質土器高台付碗であり、10世紀代初頭に比定されるものと思われる。⁽²⁷⁾

第38図1は、陰刻花文を施文した緑釉陶器皿の小片である。花文は、口縁部上端に花卉を下に向けて描いた、一重花卉の反花文である。小片のため、花卉の数や芯の形態などについては不明であるが、花卉の輪郭線が接続しておらず、反花も口縁部に密接した形で施文されていないことから、三弁の反花文を数ヶ所に点在させて描いたものであると考えられる。花文の類例は、熊ノ前第2号窯出土のものに認められており、⁽²⁸⁾K-90号窯式に比定される。⁽²⁹⁾

第33図4、5に掲げたものは、土師器高坏である。5は内面に黒色処理が施されている。

以下第34図12までの〔Ⅱ〕類に含まれる遺構外出土遺物については、形態的な変化による編年的な位置付けが与え難い。しかし、基本的には、上記遺物群によって示し得る年代観の範疇から大きく逸脱するものは認められない。

以上のことから見て〔Ⅱ〕類とした遺構外出土遺物は、7世紀代前半を上限として、8世紀代と9世紀代後半から10世紀初頭にかけての時期との二時期に分類し得ることがわかる。

このことは〔Ⅰ〕類とした遺物群が〔Ⅱ〕類と同様に7世紀代前半を上限としながらも、8世紀代に連続せず、また〔Ⅱ〕類が10世紀初頭を下限とするのに対して〔Ⅰ〕類は中・近世まで続くという対象的な動きを示すものであり、B-4区以東に観られた地形的な落ち込みの性格を考える上で、興味の持たれるところである。

〔Ⅲ〕池ノ谷遺跡出土の縄文時代遺物

池ノ谷遺跡は、前述してきた様に遺構・遺物の状況から平安時代に位置づけられる遺跡として捉えることが出来る。しかし、発掘調査区域内から散在的ではあるが、縄文時代の土器・石器類が検出されているため、本項では、縄文時代の所産として把握される土器・石器類を第35～37図として纏めた。尚、この図に掲載した遺物が全てではないが、これらにより大凡の遺物

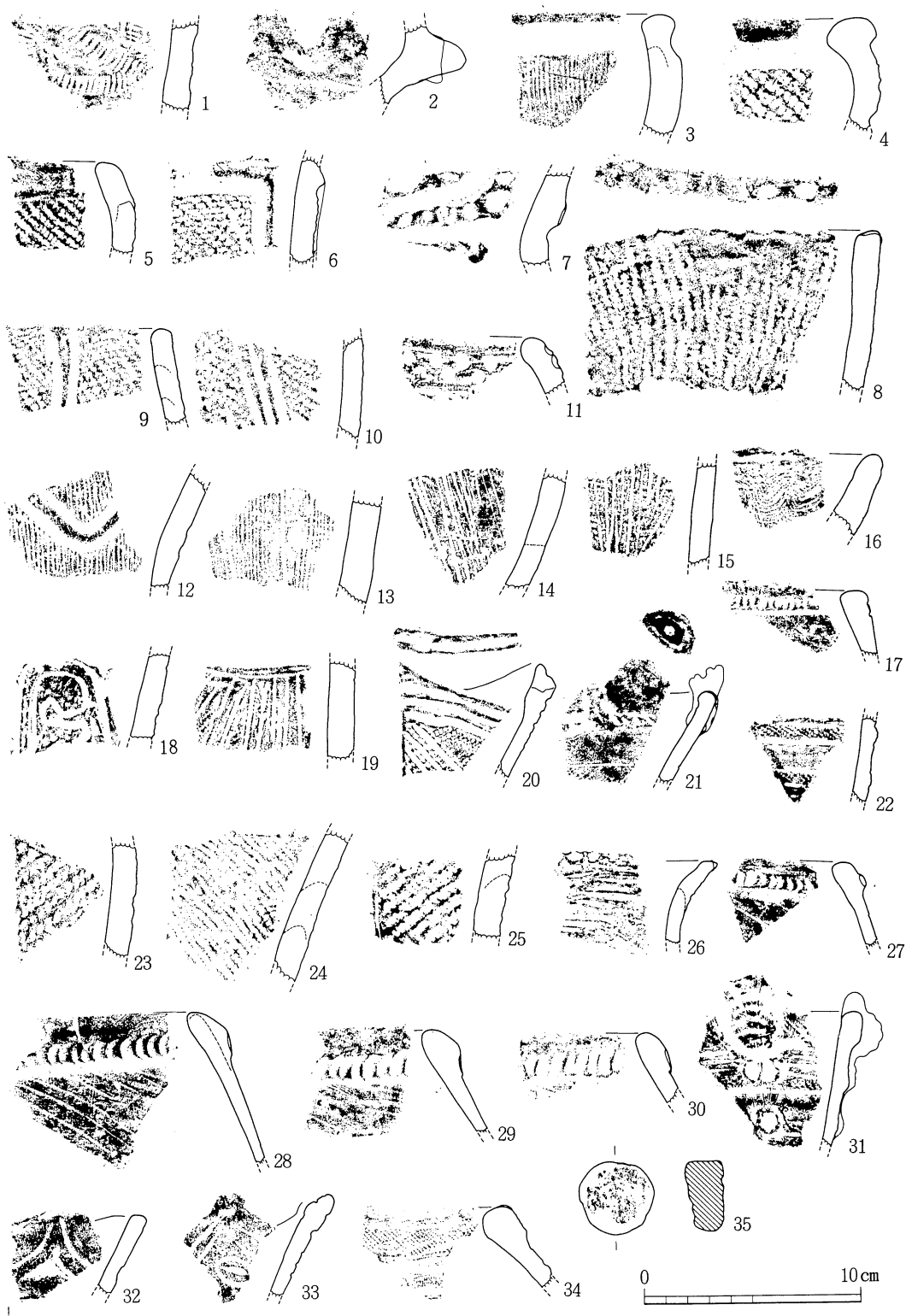


图35 遺構外出土遺物〔V〕

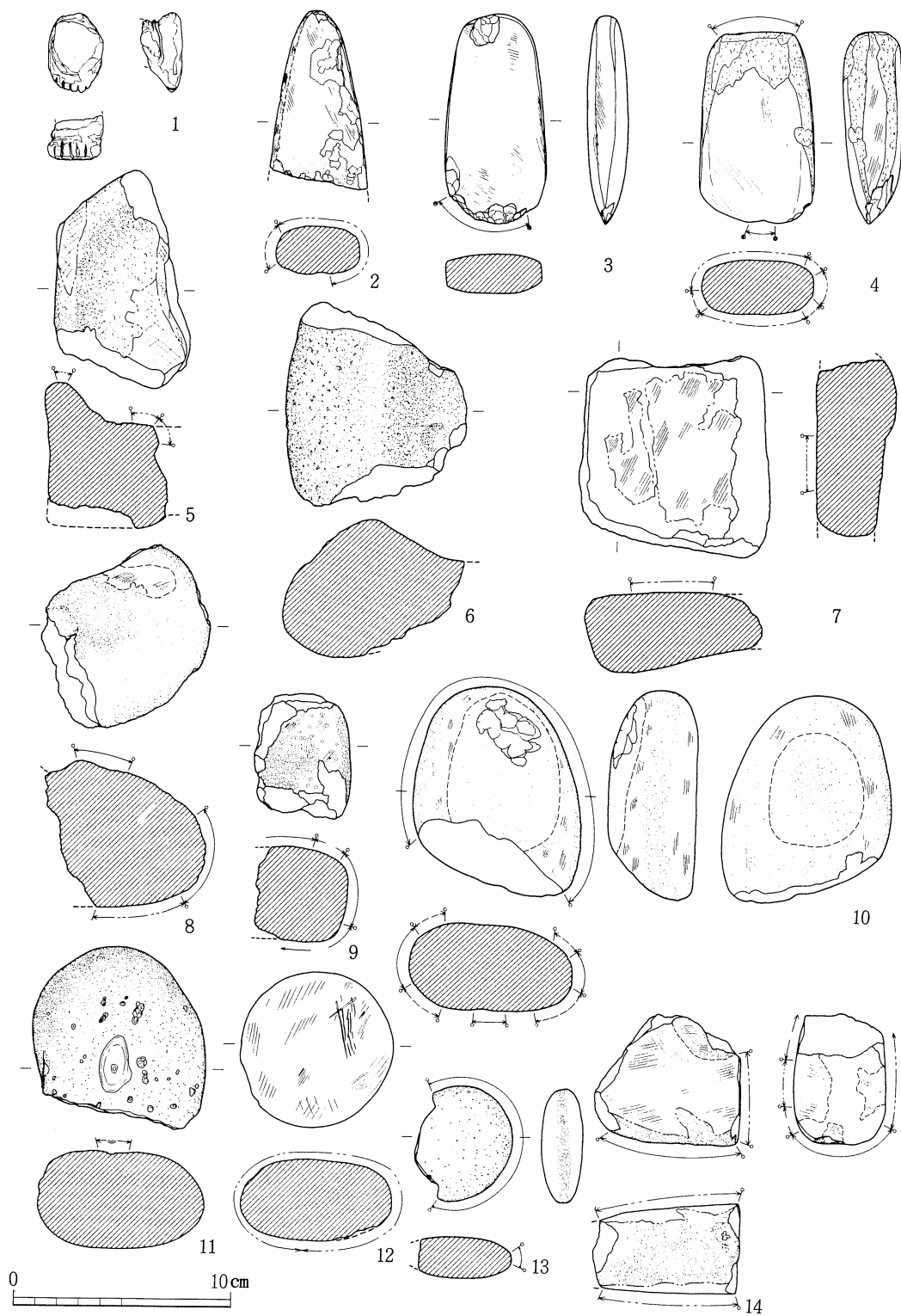


图36 遺構外出土遺物〔Ⅵ〕

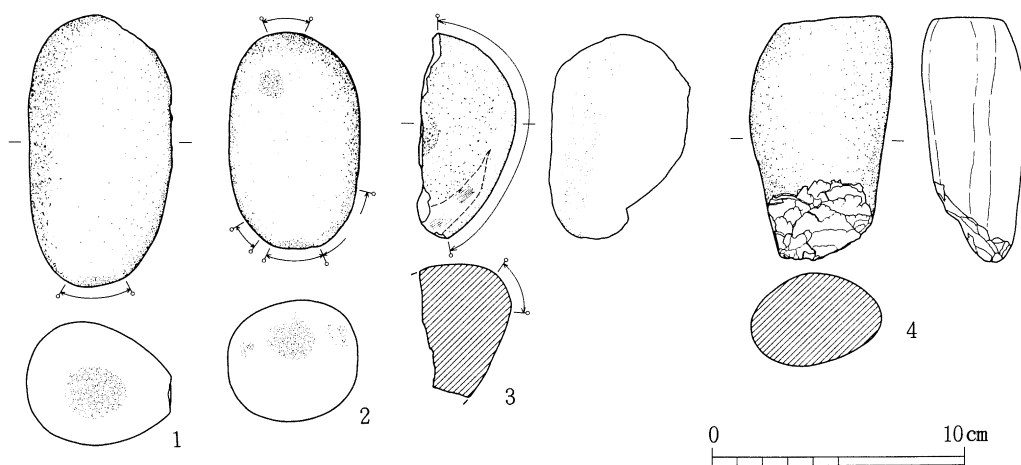


図37 遺構外出土遺物〔Ⅶ〕

相は捉えることが出来るものと思われる。

土器は、第35図に見る如く、中期～晩期中葉の時期として位置づけられる。中期では、1・2とした勝坂式期及び3～15とした加曽利E式期の範疇として把握される土器片を見ることが出来るが、一見しても明らかな様に、中期においては、加曽利E式期が主体となっている。16～30は、後期に位置づけられ、堀之内Ⅰ式～安行Ⅱ式期の土器がある。これらの中では、25として挙げた土器が弥生時代の土器の如く見受けられるが、これは加曽利B式期の粗製土器口縁部である。又、31～34は晩期中葉の安行Ⅲb式・姥山Ⅲ式の口縁部破片である。

土製品には、土器片を再利用した小円板（第35図35）と、土偶足部破片（第36図1）がある。

石器には、第36図2～第37図を見ることが出来る。これらには、大別して磨製石斧（2～4）、石皿（5～7）、磨石及び敲石として捉えられる3つの種類があるが、日常的な石器のみである。これら縄文時代の遺物相を見ると、後述する福増古墳検出の縄文時代遺物とは、若干趣を異にする様に思われる。池ノ谷遺跡では、日常的な石器としての石皿・磨石類が多出したのに比べ、福増古墳では、早期から晩期の土器は見られるが、石器にあっては、日常的な石器類は1点も検出されず、狩猟具としての石鏃が4点出土したのみであった。これら石器類の様相の相違は何に起因したものであろうか、興味の持たれる所である。この点に関しては、まとめの項で再考されるものと思われる。

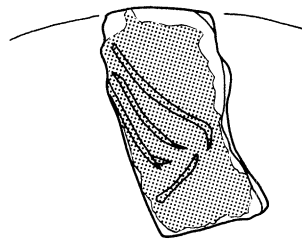


図38 遺構外出土遺物〔Ⅶ〕

（実大）

註

- (1) 半田堅三氏の御教示による。
- (2) 〔I〕類とした遺構外出土遺物の出土状況は、報告に述べたとおりであった。このうち、分布について再度触れると、上層を耕作によって攪乱されているものの、遺構周辺に集中することが指摘できる。このことは、調査区域内の遺物が、層位的な上下の移動を繰り返していても、面的には埋没後の移動が少なかったことを意味しているものと解される。従って〔I〕類とした遺構外出土遺物は、遺構の時期を含めた遺跡の性格を或る程度反映しているものと考えている。
- (3) 体部から口縁部にかけて、約 $\frac{1}{2}$ が遺存しており、外面には口縁部直下まで横方向のヘラケズリを施しており、器高が低く体部は直線的にたちあがっている。内面には、丁寧なヘラミガキが施されており、暗文は認められない。
- (4) 高台坏には、第32図5に掲げたものの様にやや先行的形態を有するものも認められる。第32図15は、湖西窯の製品と思われる。斉藤孝正氏に観ていただいた結果、第32図16に掲げた緑釉陶器片は、K-90号窯式で篠岡の製品、19に掲げた灰釉陶器は、K-90号窯式で東濃系窯の製品との所見をいただいている。
- (5) 台付甕は、8世紀前半代から、中葉以降を中心として9世紀代初頭まで観られるようであり、前出のものには台部端部に横ナデが施されるようである。池ノ谷遺跡出土のものは、表面が内・外面共に炭黒色化しており技法上の特徴を観察しにくいものの、横ナデは認められない。
佐久間豊・豊巻幸正・笹生衛（1983）「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』
- (6) 倉田芳郎、松井崇宗他（1978）『千葉南総中学遺跡』
- (7) 鈴木英啓（1984）『石川城郭跡』（市原市文化財センター調査報告書第2集）
- (8) 前掲書(7)に同じ
石川城郭跡出土のものの年代観については「共伴する永楽通宝の公的な通用時期」を根拠として、16世紀後半としている。池ノ谷遺跡出土のものについては、共伴遺物が不明なことから、直ちに石川城郭跡出土のものと同様には扱えない。しかし、調査区域内より出土した古銭が「熙寧元宝」2点（No.7 遺構内およびA-4区）「紹聖元宝」1点（No.7 遺構内）「皇宋通宝」1点（No.7 遺構内）「至道元宝」1点（B-1区）「政和通宝」1点（B-4区）の6点でいずれも渡来銭（北宋銭）であり、寛永通宝は観られなかった。
- (9) 日本貨幣商協同組合（1984）『日本貨幣型録 1984年版』
- (10) 佐久間豊・豊巻幸正・笹生衛（1983）「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』
- (11) 国立歴史民族博物館助教授平川南氏の御教示による。
- (12) 永吉台遺跡は、君津郡市文化財センターによって調査が行なわれた。墨書土器については、豊巻幸正氏の御好意によって実見させていただいた。

- (13) 高橋健一（1979）「第4章 国分期の土器について」『江原台』
- (14) 平川南氏の御教示による。尚『江原台』についても平川南氏の御教示によった。
- (15) 浜名徳永（1977）「Ⅳ 出土墨書の集成と考察」『山田水呑遺跡』
- (16) 平川南氏の御教示による。
- (17) 第31図21は底部全面および体部下端回転ヘラケズリ整形、22は、回転系切り離し底部外周囲回転ヘラケズリ整形、23は、底部全面回転ヘラケズリ整形を施している。
- (18) 野村幸希・松原典明（1984）「南河原坂第4遺跡調査概要」
- (19) 現地踏査時の表採資料等との比較による。
- (20) 大川 清（1976）「千葉県市原市・永田，不入須恵窯跡」
山口直樹（1985）「永田，不入窯跡」（市原市文化財センター調査報告書 第7集）
- (21) 前掲書20に同じ
- (22) 川江秀孝（1980）「第2章 墨書土器の形態分類」『伊場遺跡遺物編2』
- (23) 11に掲げた様な低い擬宝珠状を呈するつまみは、類似が千葉市大宮町西屋敷遺跡の60号住居址にみられており、倉田義広氏の編年によって「Ⅱ期」（8世紀第1四半期後半を中心とする時期に比定されている。端部の身受け部分についても、カエリが無くほぼ直角に折り曲げられており、8世紀代の中で納まり得るものと考えられる。
倉田義広（1983）「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』
- (24) 高台の形態・つくりは、第32図6に掲げたものの様に、端部を強く外反させた接地面の広いものと、10に掲げた三ヶ月高台の様に接地面の狭いものがある。
20に掲げた灰釉陶器皿は、内面を刷毛によって施釉したもので、重ね焼による高台部の付着痕が認められる。齊藤孝正氏からK-90号窯式に比定される光ヶ丘の製品との所見をいただいた。尚、18に掲げた瓶類の口縁部片は、東濃系の製品とのことである。
池ノ谷遺跡より出土した灰釉陶器片は、小・細片13点であったが、光ヶ丘の製品は第32図20のもののみであった。他については、東濃系とのことであった。
23・24に掲げた鉢類は、底部が欠損しているため、十分な観察結果とは言えない。（高台付坏か）しかし、口縁端部を外に強く引き出すものは、K-14号窯式を初源としている。（齊藤孝正氏 1984年1月22日歴史考古学セミナー講演内容より）従って、23、24についてもK-14号窯式併行期を上限とし、相伴する遺物にK-90号窯式のものが観られることから、10世紀代初頭と考えておきたい。
- (25) 後藤建一氏の御教示による。
- (26) 前掲書(5)に同じ。
- (27) 前掲書(5)に同じ。
- (28) 吉田恵二（1983）「陰刻花文私考」『日本史学論集』上巻
- (29) 齊藤孝正氏の御教示による。

Ⅲ ま と め

今回の調査によって検出された遺構は、井戸跡 1 基、溝状遺構 10 条、土坑 7 遺構、小ピット 49 ヶ所、堰跡 1 基の計 68 遺構であり、他に B-4 区以東の地形的な落ち込みから多量の包含遺物を得た。

各遺構についての所見は、本文事実報告の中で触れたとおりであるが、遺物を伴う遺構が少なく、遺跡の性格についても十分に捉えることができなかった。

従って、本章では、各遺物の所見を総括すると共に、不十分な点を加筆整理して、今後に備えるものとしておきたい。

池ノ谷遺跡の時期と性格について

池ノ谷遺跡出土の遺物は、縄文時代中期（加曽利 E 式期主体）のものから、16 世紀～17 世紀に比定されるもの（熙寧元宝などの古銭やかかわらけなど）までが含まれている。しかし、これらは必ずしも連続しておらず、下記の 5 時期に分けることができる。

〔第 1 期〕縄文時代中期（勝坂式期・加曽利 E 式期）から晩期中葉（安行Ⅲ b 式・姥山Ⅲ式）

〔第 2 期〕7 世紀前半代に比定されるもの

〔第 3 期〕8 世紀後半代から 9 世紀初頭を中心とした時期に比定されるもの

〔第 4 期〕9 世紀後半代から 10 世紀初頭に比定されるもの

〔第 5 期〕中・近世に比定されるもの

〔第 1 期〕とした縄文時代の遺物は、調査区域全面にわたって散布していた。包含層は、「7, 遺構外出土遺物」で述べた〔Ⅰ〕類に属している。〔Ⅰ〕類とした遺物群については、第 2 期以降の遺物で、遺構周辺に集中している傾向が認められている。これは、本来、遺構履土中に包含していた遺物が、爾後の攪乱によって拡散した結果によるものと考えられる。換言するならば、第 2 期以後の遺物については、埋没後の面的な移動巾が小さいことを示唆しているものと思われる。もし仮に、第 1 期とした縄文時代の遺物についても、同様に面的な移動巾が小さいものと考えられるならば、これらは池ノ谷遺跡内において使用されたものと考えることができる。池ノ谷遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、台地上に福増遺跡と山倉天王貝塚⁽¹⁾が知られている。殊に、山倉天王貝塚は、中期～晩期の馬蹄形貝塚で（図 5）周辺に小規模の地点貝塚をも形成している。池ノ谷遺跡の立地が「Ⅱ、遺跡の位置と地理的環境」で述べたように、養老川に合流する小河川に面していたとするならば、台地上の遺跡と生業の場とを結ぶルート上に位置していた可能性が考えられ、興味の持たれるところである。

石器類については、報告者の指摘にもあるとおり、福増遺跡と池ノ谷遺跡とでは、対照的な様相を示している。

即ち、池ノ谷遺跡では石皿・磨石・敲石など日用的石器が多出しているのに対して、福増遺跡では石鏃（中期的特徴のもの1点、後・晩期的特徴のもの4点）が古墳旧表土層下の包含層より出土している。

これら石器類の違い（池ノ谷のものは、調理・加工等に使用する日用品、福増のものは、食料獲得のための生業品）が何によって起因したものであるかは、狭隘なる調査区の比較のみでは知ることができない。しかし、その一方で「比較不能」として片付けてしまうことも適当なこととは思われない。以下、遺跡間の立地に視点を絞って一つの仮説を提示しておきたい。即ち池ノ谷遺跡における石器類の傾向を、先に挙げた小河川との関係で捉えて良いものとするならば、山倉天王貝塚から福増遺跡を含む広範囲が、「縄文時代の人々によって生活の場として活用されていた⁽³⁾」とする報告者の指摘を、池ノ谷遺跡をも含む地域に拡大解釈することによって、先に指摘された相違に対して、ひとつの仮説を立てることが可能かと思う。

福増遺跡からは、墳丘盛土内から早期～晩期終末期に位置付けられる土器が出土している。殊に、早期および晩期終末期のものについては、全体の形状を知り得る様な資料も含まれている。墳丘盛土に利用された客土の量および搬出地は不明であるが、古墳群東南部に於いて既に知られている福増遺跡（縄文時代遺物散布地）の範囲が、福増3号墳の立地する谷頭部にまで延びていることは想像される。

他方、縄文晩期に於ける食生活の一端を、国分寺台に所在した西広貝塚の調査結果から垣間見ると、貝類⁽²⁾については、中～大形ハマグリを主体として少量づつ採取していたものと思われる食料としての依存度が後期に比べ著しく低下している。これに対して、貝層直上あるいは貝層中より出土する獣骨の量は増加している。このことは、動物性蛋白質の摂取対象の比重が、晩期になると「貝類」から「獣類」へ移っていることを示唆しているものと考えられる。

即ち、周囲に縄文時代の遺物散布地を有しながらも、日用的石器が見られなかった福増遺跡の様相は、西広貝塚の例に観た「獣類への依存度の高さ」として理解することができる。

依存度の高いものに対して、社会的な規制・補護が強くなることは、諸々の研究によって知られているところである。

このことから当地域（山倉天王貝塚・福増遺跡・池ノ谷遺跡）を活動の範囲（生活圏）としていた人々も、「水場」（福増遺跡の眼下に所在する猿が谷の湧水地）に通う動物達の生活圏を補護・管理し、自らは狩猟対象を確保するために、社会的規制において福増遺跡を狩猟地区として生活の場から切り離していたものと考えられないであろうか。

同様に、池ノ谷遺跡は、先に挙げた生業地（漁撈）へのルート上であると同時に、日用的石器を使用する様な作業空間（キャンプサイトの機能を有する場？）として捉えることはできないであろうか。

現実には、福増遺跡の縄文時代遺物散布地も、山倉天王貝塚も未調査であり、その内容が明らかとはなっていない。従って、今後の資料の増加・収集を待った上で、他地域の遺跡に於ける成果との比較の中で検証していかなければならない課題である。

〔第2期〕とした遺物は、遺構の内・外より若干量ではあるが出土している。遺構としては、明瞭なかたちでこの時期のものとするのできるものは見られないが、福増遺跡の調査によって、少なくとも6世紀末～7世紀初頭には、福増3号墳を築造していることが明らかとなっている。今後、資料の増加を待って、両遺跡の比較・検討を加えたい。

〔第3期〕とした遺物は、遺構外出土遺物〔Ⅱ〕類としたもので、B-4区以東の地形的な落ち込みから多量に出土している。この地形的な落ち込みは、池ノ谷から養老川へ至る小河川の一部と考えられるものであるが、部分的な調査のうえ、報告にも述べたとおり十分な調査が行なえていないことから、断言することができない。

包含遺物の時期的な上限についても、最下層まで調査しておらず知り得ない。しかし、下限については、第3期と第4期との間に断絶のあることは明らかであり、遺跡もこの間に空白の期間があったことは推測される。

この地形的な落ち込みは、第3期と第4期との空白期間中に埋没し、第4期には湿地化していたことが、第4期遺物の出土層位から知られる。

第3期の遺物は、ややグライ化した山砂の流入土層下の泥炭質土中に散逸的に包含していたもので、流れ込みによる堆積と考えられる。取り上げてきた遺物のみによる傾向を見ると、遺存度の高い小型のものがB-6区に多く認められ、B-4区には甕類の破片が集中していた。

遺物としては、「□木家」と書かれた墨書土器が出土しており、報告に述べたとおりであって、興味を持たれるところであるが、それと同時に、第31図21～23に掲げた様に、永田・不入窯の製品と考えられるものと、石川窯の製品と考えられるものに加えて、千葉市域おそらくは南河原坂第4遺跡の製品と思われるものが含まれており注目される。

調査区域内からは、〔第3期〕に比定し得る遺構は検出されていない。しかし〔第2期〕のものとは対象的に多量の遺物が出土していることから考えて、調査区域北側の平坦部に、第3期の遺跡が存在するものと推定することができるかと思う。

尚、図示し得なかった小片中に、斜格子状暗文を有する坏片が一点確認されている。

〔第4期〕とした遺物は、調査区域全面より出土しており、B-1区より検出された井戸の使用された時期である。この時期の遺物群中には、灰釉陶器片13点、緑釉陶器片3点が含まれており、陰刻花文を施すものの観られたことは、報告のとおりである。

この時期に於ける池ノ谷遺跡の様相を、井戸跡の調査結果から観ると、以下の様なことが推測される。

池ノ谷遺跡の井戸跡は、井戸枠を有しておらず、井戸本体痕には作り替えも認められなかった。従って、井戸そのものの使用し得る期間は、井戸の設置時期から自然埋没するまでの短期間に限定することができる。層的には、本体痕とその直上に堆積した〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕層群がこれに当たる。〔Ⅰ〕層群中のa～gとした堆積は、下層と同様であったと思われる自然堆積層を再度掘り下げたものと思われ、a層からヒョウタンが出土している。井戸跡からヒョウタンの出土する例は、各地に於いて知られている様であり、一説に「雨乞い」を意図するものであるとされている。であるとするならば、井戸本体痕内の自然堆積層が上層まで達することによって、井戸が機能しなくなったか、或いは、この時期に天候その他の要因によって渇水状態となった為に、「雨乞い」の祭りを行なったものと考えられる。

〔Ⅱ〕層群の堆積を観る限り井戸はその後にも機能していたものと思われる。しかし〔Ⅲ〕層群最下層に観られた坏類の出土状況は、本井戸跡の意図的な廃棄を示唆しており、〔Ⅲ〕層群は土器捨て場の様相を呈したものとなっている。

即ち、池ノ谷遺跡の井戸は「雨乞い」(?)を行なってまで、その機能を保持させ乍らも、短命のうちに、意識的に廃棄されたものと考えられる。

換言するならば、短命的な強い目的意識のもとに、本遺構が設置されたものと見る事ができないであろうか。出土遺物に古鍛冶的色彩が強く顕われていることも、同様の結果を示唆しているものと思われ、第4期における池ノ谷遺跡の性格・様相を表象し得る結果と思われる。

〔第5期〕の遺物は、溝状遺構(A類)および堰跡を中心として、若干出土している。出土した遺物は、甕類および磁器の碗類片が殆んどであり、他に古銭6点、内耳土器片2点、磁器製の輪差し一点であった。溝状遺構を主体とした時期と思われるが、調査区域内のみでは、その用途や関連を十分に把握することができなかった。今後、資料の増加、周辺地域の調査結果等を待って検討を加えるべきものと思う。

特殊遺物について

本項では、調査区域内に散逸的に観られた鉄滓、鉄製品、砧石、馬の歯について簡単に触れておきたい。

鉄滓、鉄製品：鉄滓は、井戸跡及び溝状遺構出土のものを含めて、計20点が出土しており、鉄製品はB-6区より1点出土している。(図版31)

グリッド毎の分布は、B-1区(7点) A-3区(1点) A-4区(2点、ただし確認調査時のT-4出土の1点を含む) A-5区(1点) B-5区(2点) B-6区(5点、ただし鉄製品1点を含む) 表採(3点)であった。

これらを見ると、B-1区出土のものを除き、第3区以東のA区とB-5区以東の遺構外出土遺物〔Ⅱ〕類とに偏向していることがわかる。殊に、B-6区からは4点の鉄滓と1点の鉄

製品が出土しており、散布頻度の高さを示している。他方、本遺跡出土の鉄滓については、井戸跡より出土した塊形滓が轆の羽口・砧石と共伴することや、No.5 遺構とした溝状遺構から鉄床石が出土する等によって10世紀初頭前後の古鍛冶と結びつけることができる。

以上のことから、調査区域北側台地寄りに、古鍛冶跡の所在する可能性があるものと考え。

砥石：砥石は、遺構内出土のものを含めて、計32点が出土している。このうち図示したものは、図18-8、図23、図33-17~20であり、他は石材、磨耗状態などから砥石と判断した。

グリッド毎の分布は、B-1区(7点) A-3区(6点) A-4区(4点) B-4区(4点) A-5区(1点) B-5区(4点) B-6区(1点) 表採(5点)であった。

これらを見ると、B-1区出土のものを除き、A-3区および第4区以東に分布し、比較的遺構密度の高いB-3区には観られないことが指摘できる。殊に、A-3区以東では、A区の頻度が高く、鉄滓と同様の傾向を示している。

馬の歯：馬の歯については、確認調査の時点でB-1区より出土していたため、その存在が知られていた。しかし、調査地が台地上の馬頭観音に至る「馬車道」にあたっていることから、時期的に新しいものとして考え、グリッド毎のみの記録によって取り上げてきた。

グリッド毎の分布は、B-1区(5本) A-3区(1本) B-3区(1本) B-4区(1本) B-5区(10本、うちB-5サ1本、B-5チ1本、B-5ロ6本、その他2本) B-6区(6本) 表採(2本) 計26本であった。このうち、遺存度の良いもののみを図版34に掲載した。

これらを見ると、B-5区以東の遺構外出土遺物〔Ⅱ〕類とB-1区に極端に偏向していることが知られる。遺構外出土遺物〔Ⅱ〕類以外には、共伴する遺物が観られないことから、断言することはできないが、A区に分布する頻度の少なさを除けば、鉄滓、砥石と類似した分布と言える。従って、馬の歯の埋没時期については、必ずしも新しいものとは言えず、調査の未熟さと、今後の再検討の必要性を痛感している。

池の谷遺跡の広がりの特徴

開発に伴う調査であることから、遺跡の部分発掘であることは言うまでもない。従って、本項では、まとめの最後として、池ノ谷遺跡の広がりについて触れておきたい。

調査当初、A-1区、A-2区に遺構が検出されていないこと、B-1区に井戸が検出されたこと、調査区域南側の低台地上に鬼高期以降の遺物散布地が周知されていること等から考えて、遺跡の中心を調査区域の南側に想定していた。

しかし、先述の様に、池ノ谷遺跡の主体をなす時期は、第3期および第4期に求められ、第3期については遺構外出土遺物〔Ⅱ〕類の出土状態から、また、第4期については鉄滓・鉄製品および砥石の分布状況から、調査区域の北側へ延びる可能性のあることが明らかとなった。

調査成果から窺う限り、池ノ谷遺跡は、この2時期に単発的な営みをもつことを以って、そ

の特徴とすることができる。

この特徴は、調査区の北側に広がる微高地上に展開する遺跡が、時期的な限定の中で拡大あるいは移動したための現象として捉えることもできるが、小規模遺跡が時代的な要請の中で不連続に営まれたものとして捉えることもできるかと思う。

註

- (1) 米田耕之助（1979）「養老川流域の縄文時代遺跡(2)」『伊知波良』2
- (2) 樋泉岳二（1983）「晩期貝層の形成と構造」『西広貝塚第4次調査』（上総国分寺台発掘調査概報）
- (3) 福増3号墳出土遺物の中の「墳丘盛土内及び墳丘下の縄文土器」の項を参照されたい。
- (4) 池ノ谷遺跡の広がりを考える上では、No.48遺構としたピットの存在も十分に考慮しなければならないものと思う。

即ち、本遺構は、断面観察の結果から掘立柱建物の柱穴痕である可能性が考えられる。

従って、今後周辺地域の調査を実施する際には、この点についても注意を要するものと思う。

福 增 遺 跡

I 福増遺跡周辺の歴史的環境

福増遺跡周辺の地理的景観および遺跡の分布については、前述「II. 遺跡の位置と地理的環境」「I. 池ノ谷遺跡周辺の歴史的環境」に重複するため、本項では福増古墳群に焦点を絞って概略を述べておきたい。

養老川下流域の北岸台地縁辺には、諏訪台古墳群・東間部多古墳群・持塚古墳群・西広古墳群・山倉古墳群などの古墳群が養老川上流に向かって順に営まれている⁽¹⁾。（図5）

今回調査を行なった福増遺跡（含む 古墳一基）は、これら連続する台地縁辺の古墳群の最南端に位置し、南へやや離れて有木古墳群が所在している。低地では、福増古墳群の前面に前方後円墳二基・円墳一基からなる海士古墳群が所在し、有木古墳群では学校裏塚（前方後円墳）を中心として、またやや南に離れた武士では鍋塚（円墳）を中心とした古墳群が営まれている。

しかし、群単位に眺めるならば海士古墳群以南はやや散在的であり、諏訪台古墳群から福増古墳群に至る台地縁辺の古墳群とは必ずしも連続しているとは言えない。（cf. 図－5）

福増古墳群は、中村恵次氏等によって昭和42年に調査が行なわれており、福増1号墳および同2号墳の内容が明らかにされている⁽²⁾。当時の分布調査では、五基の古墳が確認されており、今回調査の対象となった古墳（調査時No.セー8-006号遺構）は、3号墳にあたる。（今後の研究資料としての混乱を避けるため、本報告書でも福増3号墳と呼称して名称の統一を計っておきたい。）尚、昭和42年以後の市原市教育委員会などによる分布調査によって、現在では福増古墳群内に十基の円墳が確認されている。（図39）

昭和42年に調査された福増1号墳および同2号墳は、古墳群の南端に位置し、E-10 - Nで東西に並んでいる。

報告によれば、1号墳は墳丘径約15m、2号墳は墳丘径約20mの円墳（1号墳については、前方後円墳の可能性も考えられている）で、主体部がいずれも凝灰砂岩切石積による横穴式石室構造であった。石室内からは、鉄鏃（1号墳）、刀子、切子玉、棗玉、耳環（2号墳）が出土しており、2号墳前庭部から「墓前祭祀における供献具⁽³⁾」と考えられる須恵器の平瓶・広口壺が出土している。

今回調査を実施した福増3号墳は、1号墳の西南西約140mのところに位置し、谷あいの間隙を縫って、養老川流域および対岸の姉崎地区を眺望する地に立地している。

尚、調査は、開発に伴う緊急調査であったため、開発区域外の墳丘北辺部については、未調

査のまま遺存している。

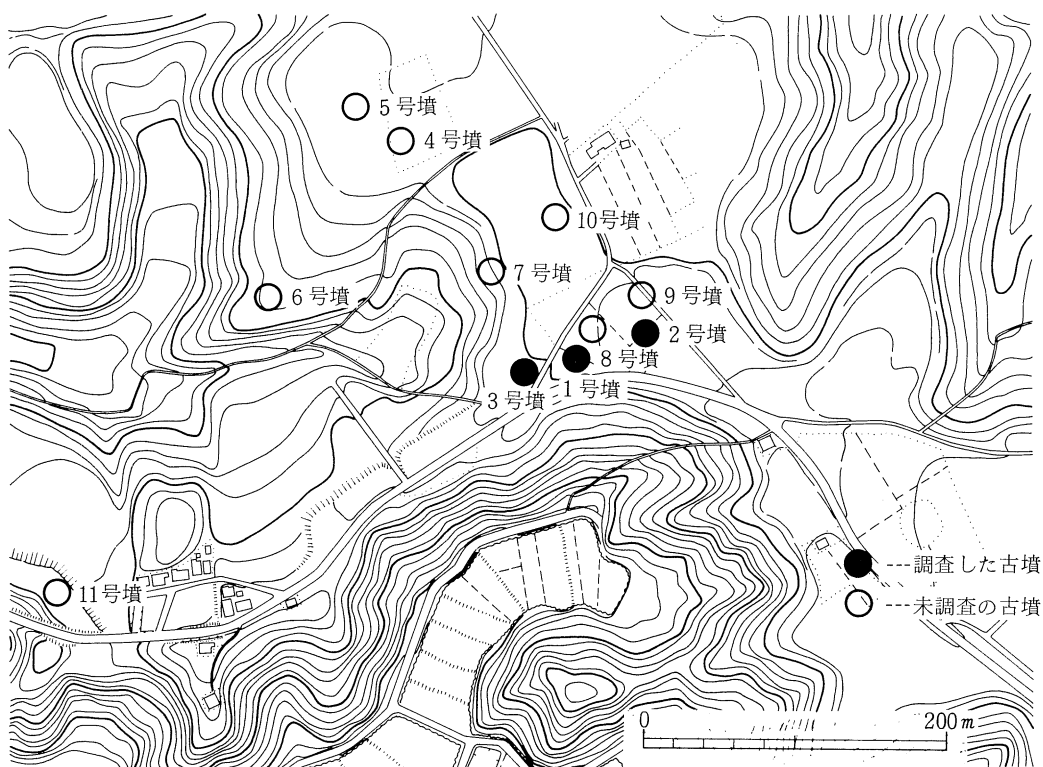


図39 福増古墳群古墳分布図

註

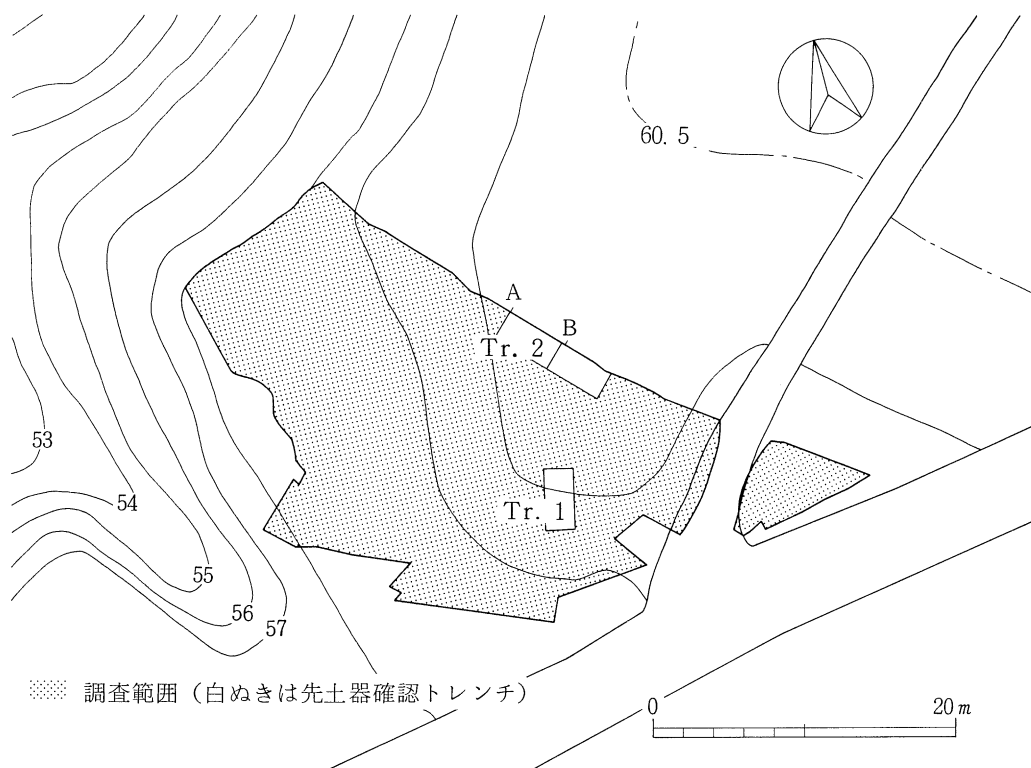
- (1) 諏訪台古墳群・東間部多古墳群・持塚古墳群・山倉古墳群については、国分寺台遺跡調査会によって調査が進められており、報告書・概報・概要などが出されている。
- (2) 中村恵次 他「福増古墳群」『市原市周辺地域の調査』市原市教育委員会（1967）

Ⅱ 基本層序

福増遺跡の先土器時代確認トレンチの配置と層序は、第40図に示したとおりである。即ち、上層現表土面より、福増三号墳墳丘盛土層群→古墳時代旧表土層→縄文時代遺物包含層→明褐色ソフトローム層→褐色ハードローム→立川ローム第一黒色帯相当層→明褐色ローム→立川ローム第二黒色帯相当層→暗褐色ローム→明褐色ロームと経過して、武蔵野ロームに至っている。

このうち、立川ローム第一黒色帯相当層直下の明褐色ローム層については、所謂始良丹沢パミス含有層に比定されるものと思われるが、肉眼識別では観察するにはおよんでいない。

また、図中第8層の落ち込みについては、調査区域の端部にあたることから、面的な確認を実施するには至っていない。尚、先述のとおりV層より黒曜石のチップが一点検出されている。



土 層 説 明

1. 表土層 暗褐色土
2. 福増3号墳盛土
3. 旧表土黒色土、古墳時代
4. 包含層 褐色土と茶褐色土とのハンテン
5. 黒褐色土
6. しまりのない灰褐色土
7. 暗褐色土
8. しまりのない暗褐色土
- Ⅲ-1. 明褐色ローム軟質いわゆるソフトローム
- Ⅲ-2. 明褐色ソフトローム
- Ⅳ-a 褐色ローム 硬質波状帯直下でもろい
- Ⅳ-b 褐色ローム 硬質
- V 暗黄褐色ローム 硬質 赤色・黒色スコリア粒子を含む BB I
- Ⅵ 明黄褐色ローム 硬質
- Ⅶ-a 褐色ローム 硬質 多量の赤色・黒色スコリア粒子を含む BB IIa
- Ⅶ-c 暗褐色ローム 硬質
- Ⅷ 暗茶褐色ローム 硬質 少量の黒色・赤色スコリア粒子を含む

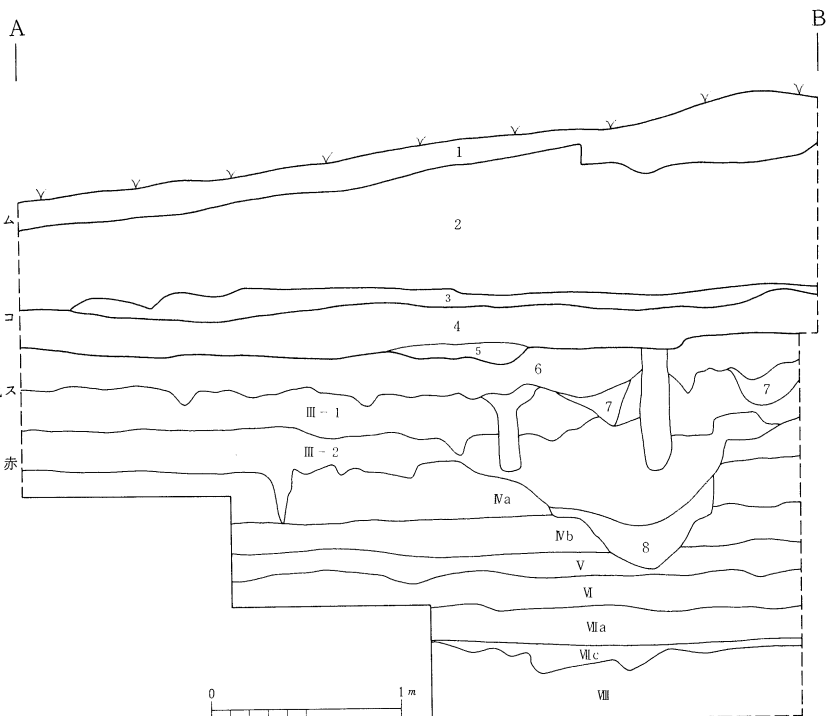


図40 福増遺跡トレンチ配置および基本層序図

Ⅲ 遺 構 と 遺 物

1. 遺構の種類と分布 (図41)

調査区域内より検出された遺構は、古墳1基（福増3号墳）、道路状遺構4条、土坑2遺構、溝状遺構1条の計8遺構であった。

福増3号墳は、A区のほぼ中央に位置し、今回の調査の主体を占めている。墳丘中心部より北東側の一部が調査区域外へ延びており、未調査のまま遺存している。

道路状遺構は、No.1、No.2遺構が福増3号墳の西側墳丘裾部から周溝にかけて重複しながら南北に通っており、No.3遺構が同墳南側の周溝と一部重複しながら東西に通っている。また、No.4遺構は、墳丘のほぼ中央にあたる位置で、旧表土下において検出されている。No.1遺構～No.3遺構は、周溝覆土との切り合い関係から福増3号墳構築後のものであることが確認されており、殊にNo.3遺構については、県道犬成・海士有木線建設工事の際の埋め土が覆土下層において確認されている。

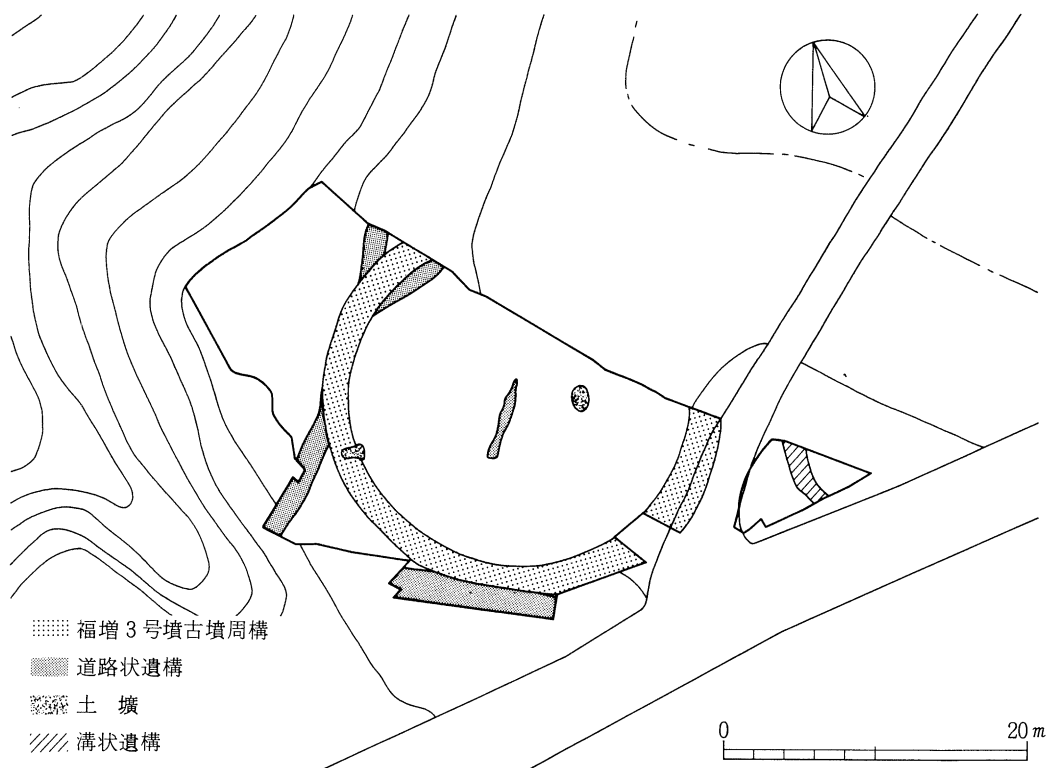


図41 調査範囲内遺構配置図

土坑は、No.5 遺構が福増 3 号墳丘中心部よりやや東側から、またNo.6 遺構が同墳周溝の内径にかかった状態で墳丘西側から検出されている。No.5 遺構は、覆土に墳丘下の旧表土層が確認されていないことから不明であるが、No.6 遺構については、覆土最上層に古墳構築時の旧表土層が確認されることから下層遺構であることが確認されている。

溝状遺構は、B 区において検出されている。

2. 福増 3 号墳（図42～図48）

a. 調査時の現状（図42）

確認調査時の地形測量の結果、墳頂部に一辺 8 m 強の方形を呈する緩傾斜面が観られた。他方、推定周溝線は、墳丘南辺から西へ向かって緩やかに弧を描きながら北上していたが、北辺では、西へ流れて墳丘を取り囲む様には観られなかった。トレンチによる二方向からの周溝部確認によって、墳丘の形態を方墳とする様な誤認は免れたが、以上の観察結果から、前方後円墳の可能性を含んだ状態で本調査に入った。墳丘の平面形態は、後世のカットによって変形しているものと予測された。

b. 調査区設定の方法（図43）

調査の方法については、既に述べたとおりであるが、福増 3 号墳の調査区設定の方法につい

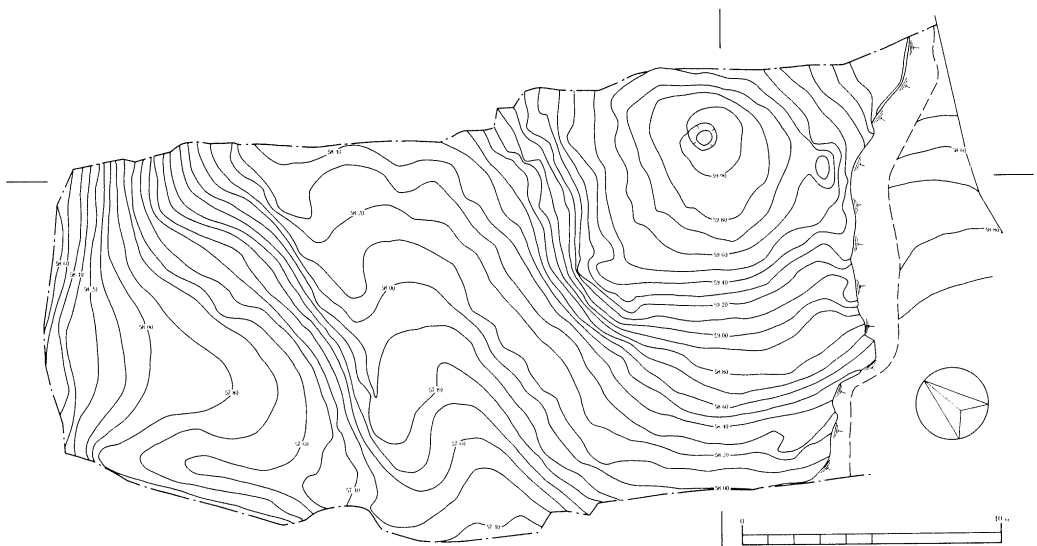


図42 A 区地形測量図

ては、古墳の一般的な調査方法に比べやや変則的であるので、改めて明記しておきたい。

福増遺跡の調査は、任意座標による工事用センターラインを基準としている。この工事用センターラインは、N-41°-Eであった。墳丘の土層観察用のベルトは、推定墳頂部を通して工事用センターラインに平行となる軸を中心とし、これに直交する軸と両軸に45°で交わる補足用の軸とに設定した。調査区の名称は、北側から左回りにA～Fとしたが、本来区分すべき中軸線より北側の補足軸については、調査区の面積が狭隘なため割愛した。従って、調査の方法は、八分割法を基本としながらも、実際には変則的な六分割によって実施している。

c. 墳丘の構造 (図44)

墳丘の構造については、先に述べた土層観察用のベルトによる断面観察の所見による。

墳丘は、裾部のほとんどが道路状遺構その他のカットなどによってかなり崩壊しており、特に周溝との関係を捉えることは、非常に困難な状況であった。しかし、墳丘中央部における築造工程については、或る程度の範囲に於いて看取し得たかと思う。

墳丘は、福増1号墳寄りのやや高い面のみ削平して平坦部を作り出し、他は、旧表土層である黒色土層上面に直接盛土して築いている。

旧表土上面は、北へ僅かに傾斜しているが、ほぼ平坦である。厚さは、10cm前後で一定しており、若干のしまりが感じられる。築造に先立って踏み固められた可能性もあるが、確証は得られていない。

現存した盛土は、中心軸で12.5m、直交軸で中心点から8.7mにわたり、厚さは最高1.2mで、暗褐色土・ロームブロックと暗褐色土・褐色土などによって、周囲より中央部に向かって積み上げている。

墳丘の築造工程は大きく2段階に分けることができる。すなわち、第1段階では墳丘中心点より東南よりに核となる部分を築き、第2段階において墳丘を整えている。

第1段階で形成された核の形状は、中心軸断面形では、推定される古墳中心点よりやや東南よりを中心として、盛土範囲内の端部よりほぼ $\frac{1}{2}$ のところから、旧表土面直上より急傾斜で盛り上げている。これは、直交軸の断面形からも同様の傾向が観察される。黒色土の旧表土上に盛り上げられた土は、ほとんどが同様の土層状態を示している。即ち、主体となるのが茶褐色土でありロームブロック、ローム粒の混入土などの比率によって分層されるものである。従って細かな層序区分が不可能なものであった。盛土の状況は、総じてしまりのないもので、軟弱なものであった。核の本体をなす中央部分の規模は中心軸長7.0m直交軸長7.0程度、高さ1.0m頂に径約5mの平坦部をもつ円形であったものと推定される。

第2段階の盛土は、第1段階の構築後に行われている。墳丘裾部を道路状遺構その他で切られているため詳細には掴み得なかったが、推定中心点よりやや東南よりに築かれた円形である

核本体の周囲を盛り足し、墳丘を古墳当初の設計規模に仕上げるためのものと思われる。盛土が核の周囲に及んで均一的に足されたかどうかは不明であるが、中心軸断面の土層観察によれば、下層にロームブロックと暗褐色土の混合土を、上層はロームブロックを殆ど含まない暗褐色土および茶褐色土を主に盛っている。この盛土は核本体の傾斜に比較して、水平に近い緩い傾斜で墳頂部に向かって積まれている。

第1段階から第2段階までの間には時間の経過を示すものは窺われず、一連の工程と考えられる。

d. 周溝（図43・44）

周溝はローム層上面で検出したが、福増3号墳東部が調査区域外であること、移設の困難な電柱が周溝の一部にかかっていることなどの理由から、全周にわたって調査することはできなかった。断面形は一定しておらず、南側では齊った幅の狭い逆台形であるのに対して、北側では幅の狭いほぼ逆台形を呈している。周溝の復元値は、確認面内側の径22m前後、内面下端径23m前後と、いずれも一定しておらず、幅も溝底で1.4m前後と一定していない。特に南では、1.2m弱と狭く、東南は1.7mである。確認面から溝底までの深さは、北東が80cm前後、南が60cm前後と南の方がやや浅くなる傾向にある。溝底面には、南側の溝底幅が一番狭かったところに10cm～20cm程度の段が一段観られる。この段を境として、断面形態が平底から丸底状に若干変化している。周溝開鑿時における作業単位を複数と捉えた場合の区分点にあたるものと考えられないであろうか。

溝底レベルは、北～北東が高く西南が低い。

周溝内堆積土は、溝底直上に明褐色土・茶褐色土を含むローム土が堆積しており、その上に暗褐色土・黒褐色土などのレンズ状堆積が観られた。最下層の堆積厚は、場所によって多少異なるものの10cm前後であり、周溝開鑿直後の堆積と思われる。上層は爾後の自然堆積土であろう。

e. 内部施設

表土層除去後の墳丘コンター実測後、土層観察用のベルトを残して内部施設の検出に努めたが、調査時において内部施設の存在を確認することはできなかった。

f. 周溝内土器の出土状態

周溝堆積土中には、上層に多数の縄文土器および奈良・平安時代以降と思われる土師器片数点が含まれていた。このうち、縄文土器については、墳丘盛土内からも同様の資料が得られていることから、墳丘よりの崩壊流入物と考えられる。出土地点は、A～Fまで均一的であり、接合するものが少ない。

これらの混入物とは別に、C区周溝内より須恵器有蓋高坏の一群が出土している。出土層位

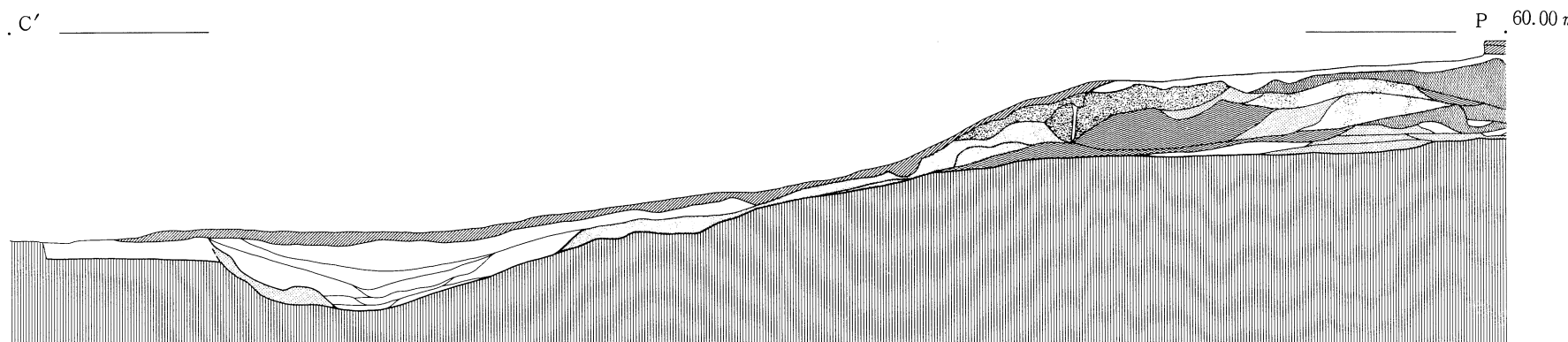
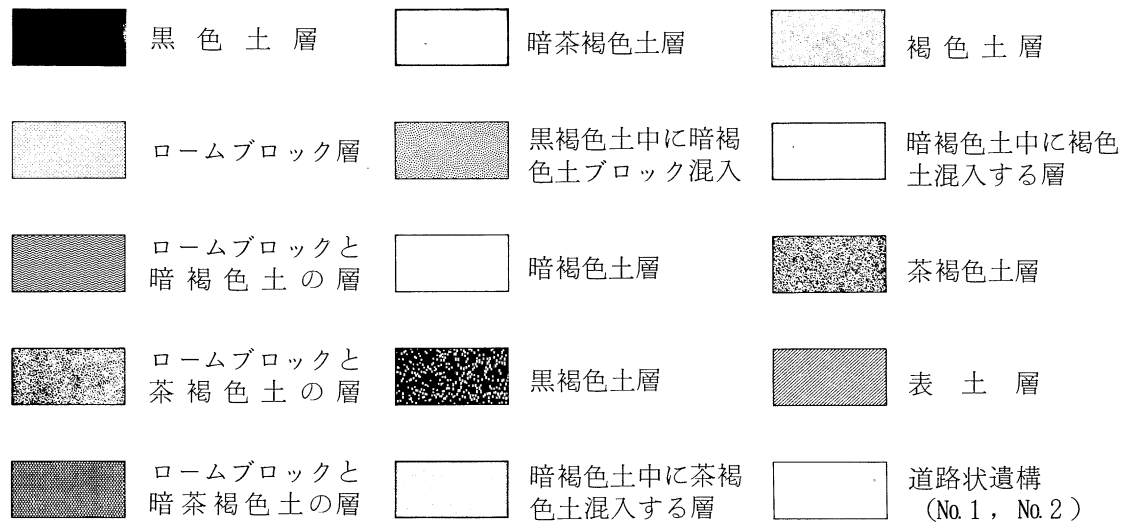
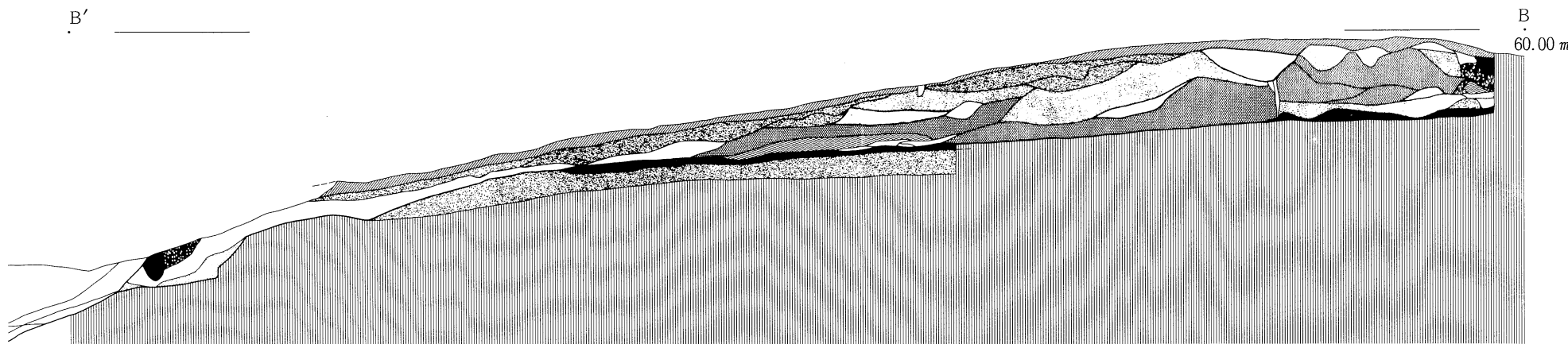
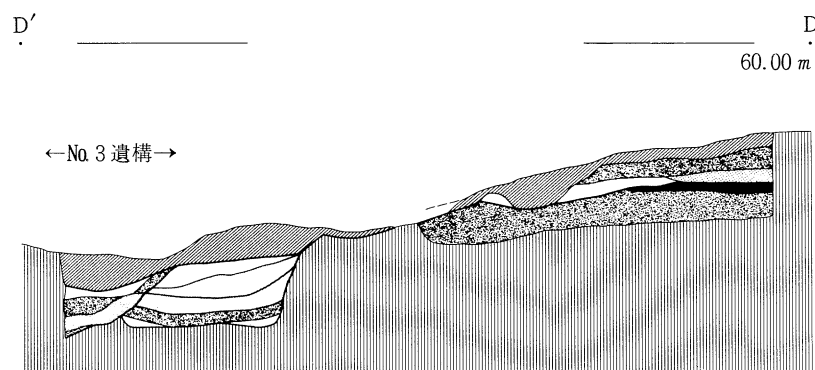
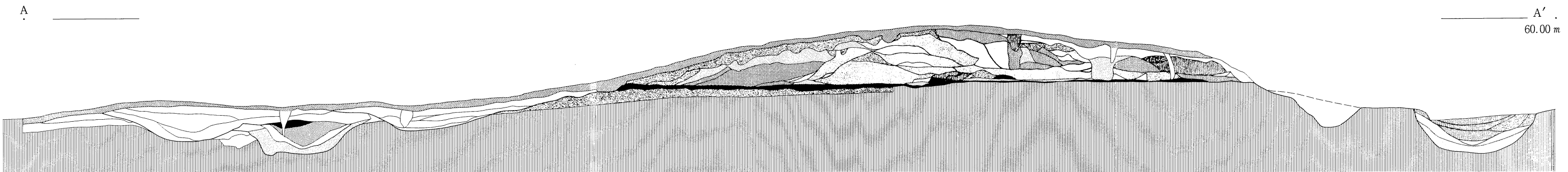


図44 古 墳 断 面 図

が周溝底より高く、間層に斑点上の褐色土を含む黒褐色土の堆積が観られた。器種は、有蓋高坏に限られているが、細片化したものも多く復元率は悪い。しかし、比較的遺存度の良い高坏が口縁部を斜め下方に向けて、周溝内径寄りの上記堆積土中にのめり込む様にして出土していることから、墳丘ないしはテラスからの落下物と考えられる。

さらに、これら有蓋高坏群の出土状態には、C区（墳丘東～東南側）という平面的な限定が与えられており、そこにひとつの特殊性が仮説される。

即ち、C区は、池ノ谷・猿が谷の谷頭部に面しており、福増古墳群の被葬者達の生産基盤と考えられる海士有木の微高地および養老川沖積地を眺望し得る「場」にあたっているのではないかと⁽¹⁾言うことである。

古墳の築造に際して、立地や方位が強く意識されていることは周知されているところであり、近隣する東間部多古墳群内の一号墳に観られた周溝内祭祀の在り方は、ひとつの好例と考え⁽²⁾られる。

先に「池ノ谷遺跡の歴史的景観」で述べたように、海士有木の微高地には、鬼高期以降の遺物が広く散布しており、池ノ谷から猿ガ谷を経て福増遺跡の立地する六万部に至る谷あいには「馬車道」と呼ばれる古道の存在していたことも知られて⁽³⁾いる。また、調査終了後の現地踏査によって、猿ガ谷の谷頭部にあたる緩傾斜面に鬼高期の遺跡の存在が確認されている。

他方、調査の終了した現時点において（未調査区を除き）周溝内の他の調査区からは、福増3号墳に伴うと考えられる遺物が一点も出土してい⁽⁴⁾ない。

以上のことから推考した場合、C区は、集落から古墳群に至る墓参路に面した場所として、「意識された位置」（延いては、福増3号墳の祭祀的な「場」）にあたっているのではないかと仮説できないであろうか。

いずれも状況証拠のみで、東間部多一号墳周溝底出土土器のような証左は得られていない。しかし、「周溝内祭祀」や「墓前祭祀」の実態や「祭祀」そのものの性格的な相違を考えていく上で、祭祀的遺物の認められなかった古墳についても、その「場」を模索することは必ずしも無意味とは思われない。

厳密には、当該する有蓋高坏の出土状態からは、祭祀的性格を引き出し難く、福増3号墳に伴っているとする積極的な証左も得られていない。しかし、主体部の検出されていない現状にあつては、本古墳築造年代の下限資料として考えておきたい。

8. 出土遺物（図45～48）

福増3号墳より出土した遺物は、大別して以下のように分けられる。

- (1) 古墳に間接的ながらも、伴うものとして考えられる周溝内出土の須恵器有蓋高坏。
- (2) 古墳に伴うか否かは不明であるが、墳丘表土層内より出土した埴輪片。

- (3) 古墳に伴わない須恵器および土師器。
- (4) 古墳築造時に盛土に混入したと考えられる縄文土器（爾後、崩壊流土と共に周溝覆土に混入したものをも含む。）
- (5) 旧表土内出土の五領期の浅鉢および縄文土器。
- （尚、旧表土層内出土の縄文土器は、後・晩期のものであり、盛土内出土のものと重複することから、報告では一括して扱い、挿図の土器番号に○印を付けることで他のものと区分した。）

周溝内出土の須恵器有蓋高坏

C区周溝内より出土している。坏身部3個体、脚裾部2点、蓋3～4個体であった。脚裾部とした2点は、胎土および焼成が酷似することから坏身2～3と同一個体である可能性を有している。しかし9は、内面に灰をかぶっていることから、窯詰の段階で天地が逆転されていた可能性も有り必ずしも脚裾部とはいえない。

坏部・蓋部ともに、胎土・焼成・色調が酷似しており、坏受部にはいずれも、蓋口唇部の融着が認められる。同一の窯で焼成されたものであろう。

坏部は、受部径 122～（124）mm，口唇部径（100）～111mmで形態的な差は殆ど認められない。遺存率の高いもので器形の特徴を例示すると、身は右回転のロクロによって成形されており、内面中央に仕上げナデは認められない。たちあがりは短く直線的に内傾し、端部を丸く納めている。受部とたちあがりの境には、ヘラ状工具の先端部による鋭い沈線がめぐり、受部は短く丸みをもつ。底部外面は狭い範囲に回転ヘラケズリを施しているものと思われるが、脚部接合時のナデと焼成時の灰の融着とによって明瞭には観察されない。脚部は天地逆の状態、右回転のロクロによって成形されており、裾部より1.9cmのところに低い段を有している。

蓋は、口縁部径（116）～（122）mm，器高39～（43）mmを計る。法量的には、ややばらつきがみられるが、焼成時のゆがみ等に起因するものであって、形態的な差は認められない。天井部と体部との境に凹線状あるいは低い段を有しているが、天井部に施されている回転ヘラケズリの範囲は狭く、上半に満たない。坏身同様、内面には仕上げナデが認められない。口縁部内面に鈍い沈線がめぐり。

墳丘表土層内出土の埴輪片

墳丘表土層内のB区・D区・E区よりそれぞれ1点ずつ埴輪の小片が出土している。いずれも外面にタテハケ調整を施している。

外面全面にタテハケ調整を施しているもの（11，13）と、部分的に施されていないもの（12）とがあることから、必ずしも円筒埴輪のみとは言えない。

墳丘表土層および周溝内出土の須恵器と土師器

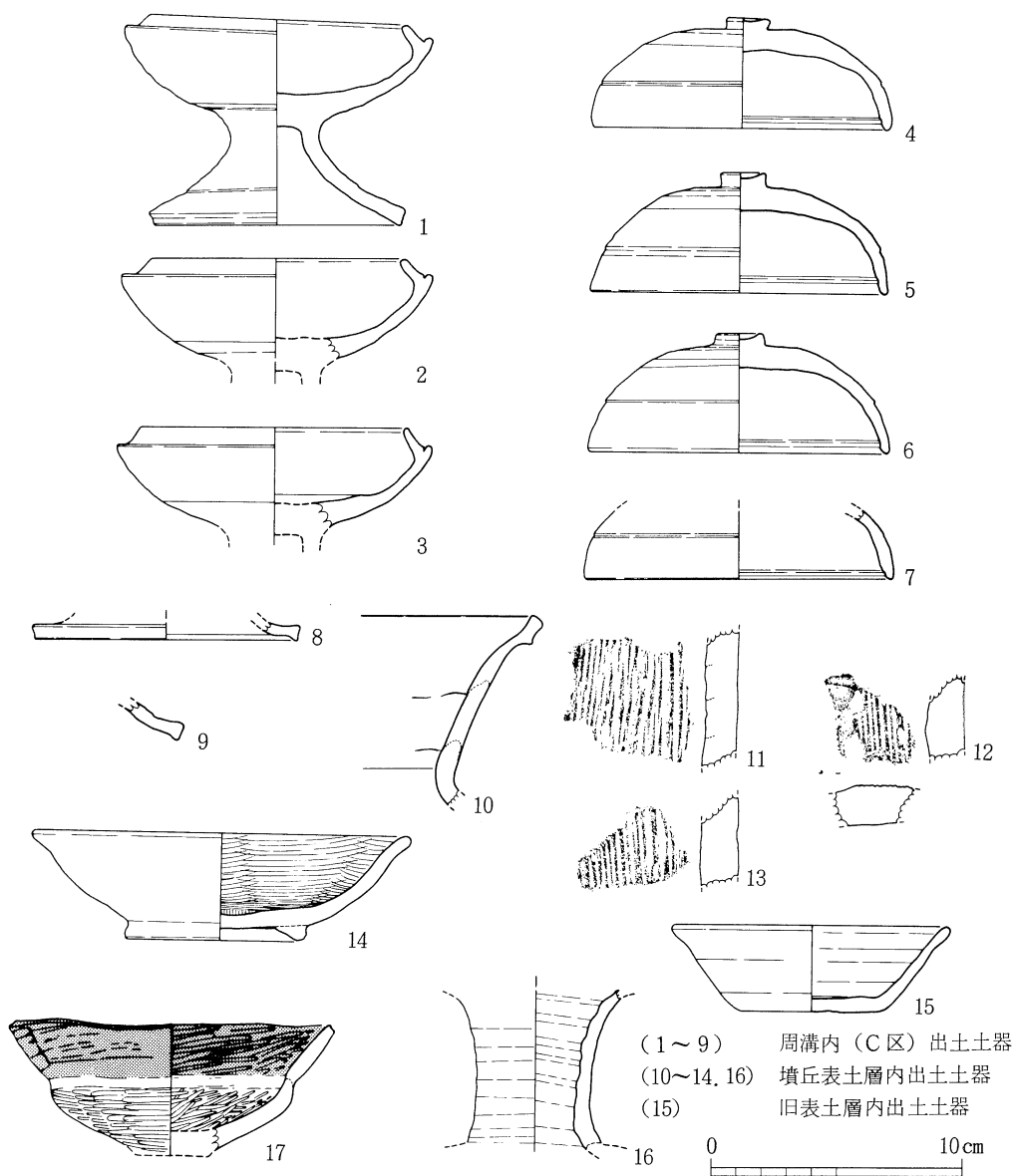


図45 福増3号墳出土遺物実測図

墳丘表土層および周溝内より出土した古墳に伴わない須恵器および土師器のうち、図示し得たものは10・14・15・16の4点にすぎなかった。

墳丘表土層F区より須恵器の甕の口縁部が一点出土している。残存率が低いため、口縁部径・頸部径ともに復元し得なかった。胎土には白色砂粒が稀に観察されるものの、殆ど混入物が認められない。焼成は極めて良好で、やや青味がかかった灰白色を呈している。形態的には直線的に延びた頸部から強く外反した突帯部が頸部と口縁部とを区画するもので、口縁部は、ロクロ回転を利用した強い押さえによって外方へ引き出している。口縁部断面形は、ほぼ長方形を

表 6 福 増 3 号 墳 出 土 遺 物 計 測 表

有蓋高坏（坏身）

（ ）は推定値 単位（mm）

No	計 測 値				遺 存 率	胎 土	焼 成	色 調	ロ ク ロ の 回 転 方 向	観 察 所 見
	受 部 径	口縁部径	坏 部 高	脚 部 径						
1	122	111	80～84	52.5	105.5	44.5	49.5	きわだつ隈り物なし	内面は淡雪灰色、外面は黒味をおびる（光沢あり）一部に灰をかぶり自然釉がかかる（火おもてか）	脚部を天地逆転させて成形している。坏底部外面は回転ヘラ削りか（脚 接合時のロク ロチタ等によって不明）
2	(124)	(100)	—	—	—	—	—	きわめて良好	内面は紫色がかつた灰色、外面は暗灰色～黒灰色。一部に灰をかぶる。光沢あり。	受部に蓋口唇部の附着している部分あり。（2、3同様）。蓋をかおせてセットで窯詰している。灰のかぶり方からみて姿勢は正位
3	(124)	(105)	—	—	—	—	—	きわめて良好	内面は茶色気味の暗灰色。外面は黒灰色で光沢がある。	脚部に浅い段を一段有している。（意図的なものか否か不明）

（ 蓋 ）

（ ）は推定値 単位（mm）

No	計			測			値	胎	土	焼	成	色	調	ロ ク ロ の 回 転 方 向	観 察 所 見
	口縁部径	つまみ部	全径	高	蓋部高	つまみ部高									
4	(116)	17	43.5	39	4.5	天井部全存 口縁部弱	きわだつ履り物なし			きわめて良好		内面は青味をおびた暗灰色。外面は片削が光沢のある黒灰色で口縁部の一部に灰をかぶる。（火おもてか）		天井部のヘラケズリからみてR	天井部上半を回転ヘラケズリによって整形したのちにつまみを貼付しナデを施している。口縁部内面に弱い凹線がみられる。天井部と口縁部を凹線で区劃する。
5	(117)	18	48	42	6	天井部全存 口縁部中強	4 と 同 じ			きわめて良好		内面は青味をおびた暗灰色。外面は暗灰色～黒灰色		”	天井部上半を回転ヘラケズリによって整形したのちにつまみを貼付し、ナデを施している。口縁部内面に弱い凹線がみられる。天井部を凹線で区劃する。
6	(120)	20	(48)	(43)	5	天井部中強 口縁部は直接しない	4 と 同 じ			きわめて良好		外面 一方向に灰をかぶりその周囲は光沢のある黒灰色を呈している。他は4と同様。		”	天井部上半を回転ヘラケズリによって整形したのちにつまみを貼付しナデを施している。口縁部内面に弱い凹線がみられる。天井部と口縁部を低い段で区劃する。
7	(122)	—	—	—	—	小 片	4 と 同 じ			きわめて良好		内面は青葉気味の暗灰色。外面は暗灰色		—	口縁部内面に弱い凹線がみられる。天井部と口縁部とを弱い凹線で区劃する。

（ 脚 唇 部 ）

（ ）は推定値 単位（mm）

No	計 測 値		遺 存 率	胎 土	焼 成	色 調	観 察 所 見
	脚唇部径	全 高					
8	(104)	1/2 以下	きわだつ隈り物なし	—	きわめて良好	外面は黒灰色で光沢がある。	No.2 あるいはNo.3 の脚唇部と考えられる。
9	—	小 片	—	—	—	内面に灰をかぶっており、黒灰色で光沢がある。	外面に浅い段を一段有している。内面に灰をかぶることから窯詰の段階で、天地逆の可能性がある。

呈している。全体的に、造りが丁寧でシャープさが感じられる。口縁部のみが単独で出土していることから、時期的な判断は困難であるが、形態的に類似したものが市内の永田窯から出土⁽⁵⁾している。しかし、胎土・焼成に若干の相違が認められ、造りも永田窯の製品の方がややシャープさに欠けている。他方、形態的な系譜からみると、静岡県袋井市岡崎の衛門坂古窯の製品に類例を見出すことができる。⁽⁶⁾比較資料が不十分なため詳細な検討は加えられないが、東海系の製品と考えられる。

須恵器甕の口縁部と同様、墳丘表土層F区より、長頸瓶の頸部が出土している。(第45図16) 外径65mm～46mm、内径58mm～36mm、残存部高64.5mmを測る。胎土には特に目立つ様な大きさ目の砂粒などは含まれておらず、焼成は極めて良好である。色調は茶灰褐色を呈しており、外面の一部に自然釉の吹き出しが観られる。また、内面や肩部寄りの頸部付根には、灰のかぶりが観察される。内面には、極めて明瞭なロクロ目による凹凸が観られ、内外面ともに、強く斜向するしぼり目状のしわが看取される。頸部と胴部との接合技法については、胴部が全く遺存していないことから不明瞭とならざるを得ないが、破口が剝離状を呈していることから、二段構成⁽⁷⁾を用いたものと考えられる。胎土・焼成・色調などの特徴から、猿投産の製品と考えられる。また、年代観については、頸部のみの資料であることから不明瞭とならざるを得ないものの、法量および形態からみると、猿投窯の編年で折戸10号(0-10)窯式以降に観られる比較的短い頸部の長頸瓶に比定される。また、内外面に看取された、しぼり目状のしわについては、岩崎25号窯式から折戸10号窯式の製品で知られている。従って、福増遺跡出土の長頸瓶⁽⁹⁾については、折戸10号窯式に前後する時期と考えられる。

周溝上層のD区より、内面に黒色処理を施した土師器の高杯が出土している。(第45図14) 口縁部径151mm、全高43.5mm～40.5mm、高台端部高径73mm、高台部高約7mmを測る。胎土には砂粒をやや多く含み、焼成は甘い。外面は暗褐色～赤褐色を呈しており、ロクロによる成形後、体部下端に手持ちヘラケズリを施しているものと思われる。内面は、底部に一方向によるヘラミガキが施され、体部は不整の横ヘラミガキが口縁部まで施されている。形態および技法上の特徴からみて、前述池ノ谷遺跡No.1遺構出土のもの(第16図10)と、ほぼ同時期の所産と考えられる。

高台杯と同様、周溝上層より、小型の土師杯が出土している。(第45図16) 口縁部径111.5mm、底部径58mm、器高35mmを測る。胎土には白色微粒子を若干含み、焼成は良好で橙褐色を呈している。体部はやや外反ぎみに広がり、底部は回転糸切無調整である。

旧表土層内出土の浅鉢

墳丘下、旧表土層内(黒色土、F区)から五領期の浅鉢が一点出土している。口縁部径13.0cmを計る。底部が欠損しているため正確な器高は不明であるが、残存高5.0cm+ α である。体

部は外面に丁寧な横位のヘラミガキが施され、内面もやや不定方向であるがヘラミガキが施されている。口縁部と体部との接合部はややくびれ、ヘラケズリののちナデが施されている。口縁部は、直線的に開くもので、外面は横位の粗いヘラケズリ無調整であり、内面にはやや右上がりのヘラミガキがなされている。口唇部はヘラケズリによって整えられており、断面形方形を呈している。口縁部内外面には、わずかな塗朱の痕跡が観察される。

墳丘盛土内および墳丘下出土の縄文土器

古墳盛土内および墳丘下より縄文土器が多数検出されているが、それらの内、主なものを第46図～第48図に一括して掲載した。これらを瞥見すると早期から晩期終末期に至るまでの土器を見ることができる。

これらの内で、土器の形状を大凡把握することの出来るものに、第46図3、第48図12、13の3点の土器がある。第46図3は、外反する口縁を有する深鉢形土器で、表裏面共に貝殻条痕を見るが、貝殻条痕文は、表面が全面を充填するのに比べ、裏面は口縁部のみに施文され、それ以下には見る事が出来ない。

第48図12に示した土器は、全体の約半分ほどを欠損しているが、復元実測により全体の形状を良く窺うことが出来る。器高9～10cmを有する浅鉢形土器で、6cmほどの間隔で突出する波状口縁を有し、口唇直下には、表裏面共に幅1～1.5cmの横位の無文帯を有するため、図示する如く、口縁部が外反する形状を見せている。焼成も良く一見緻密な感じを与える反面、表面には文様はなく、伴出した他の土器に比べると、整形も荒く雑な作りとなっている。このことは本土器が単に形態面のみを必要とし、他の装飾的効果は余り必要とされなかった結果に依るものとして考えることも出来る。第48図13は、口縁および底部が欠損しているものの、本土器の特徴的部分である胴部については良く観察することの出来る土器である。胴部中央部で突出する稜線を見せ、その稜線上には4～5cm程の間隔を持って、瘤状小突起を貼付している。また、稜線下には、斜行する条痕文を見ることが出来る。

これら3点の他には、明確に土器形状を窺うことが出来る例は見られず、全て破片の状態で出土している。

第46図1～14は早期に位置づけられると思われる土器を纏めた。1・2は、同一個体と思われる破片で、赤褐色を呈し、砂粒の混入が多いためか全体的に粗雑な感じを受ける土器で、篋状工具による細かい沈線と、刺突により文様を構成しているもので、その文様等から、早期中葉の土器として把握されるものとする。4は、半截竹管による湾曲した数条の平行沈線と、垂下する微隆起帯を貼付することを特色とする土器で、裏面に貝殻条痕文が横位に充填され、胎土中には繊維の混入が顕著である。これらの特徴から本土器を野島式期の所産として捉えることができる。

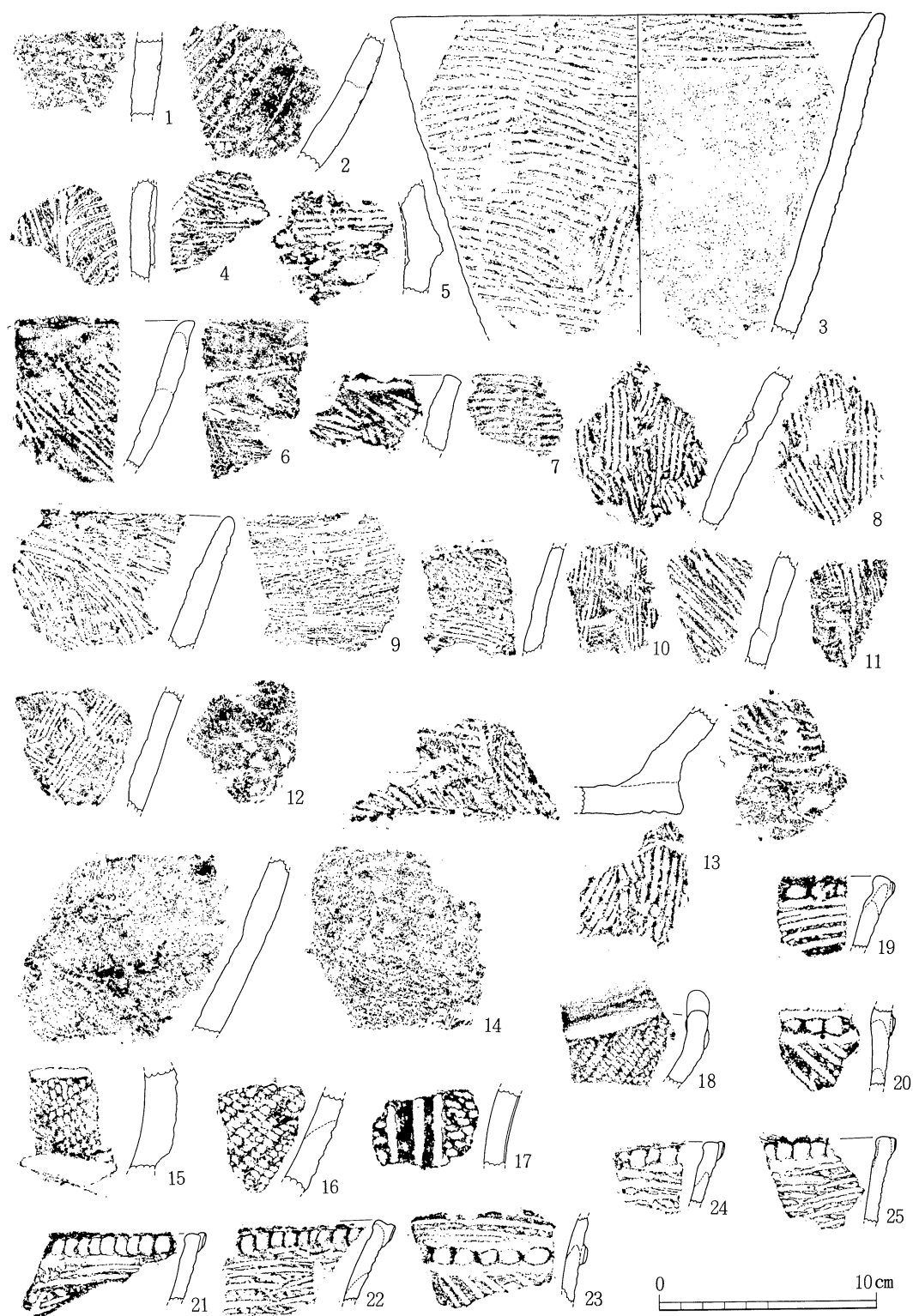


図46 縄文土器拓影図

5～13には、早期末葉の所謂貝殻条痕文土器の範疇として扱われる土器を掲げた。それぞれ胎土中には繊維を混入し、表裏面共に貝殻条痕文のみを施文することを特色とした土器で、広義の茅山式期の土器である。これらの貝殻条痕文土器のなかで、土器全体の形状を大凡知ることの出来る土器には3として前述した土器が挙げられる、14は、繊維を混入するが、条痕文は施していない土器である。器壁は厚く、雑な感じを受ける土器である。

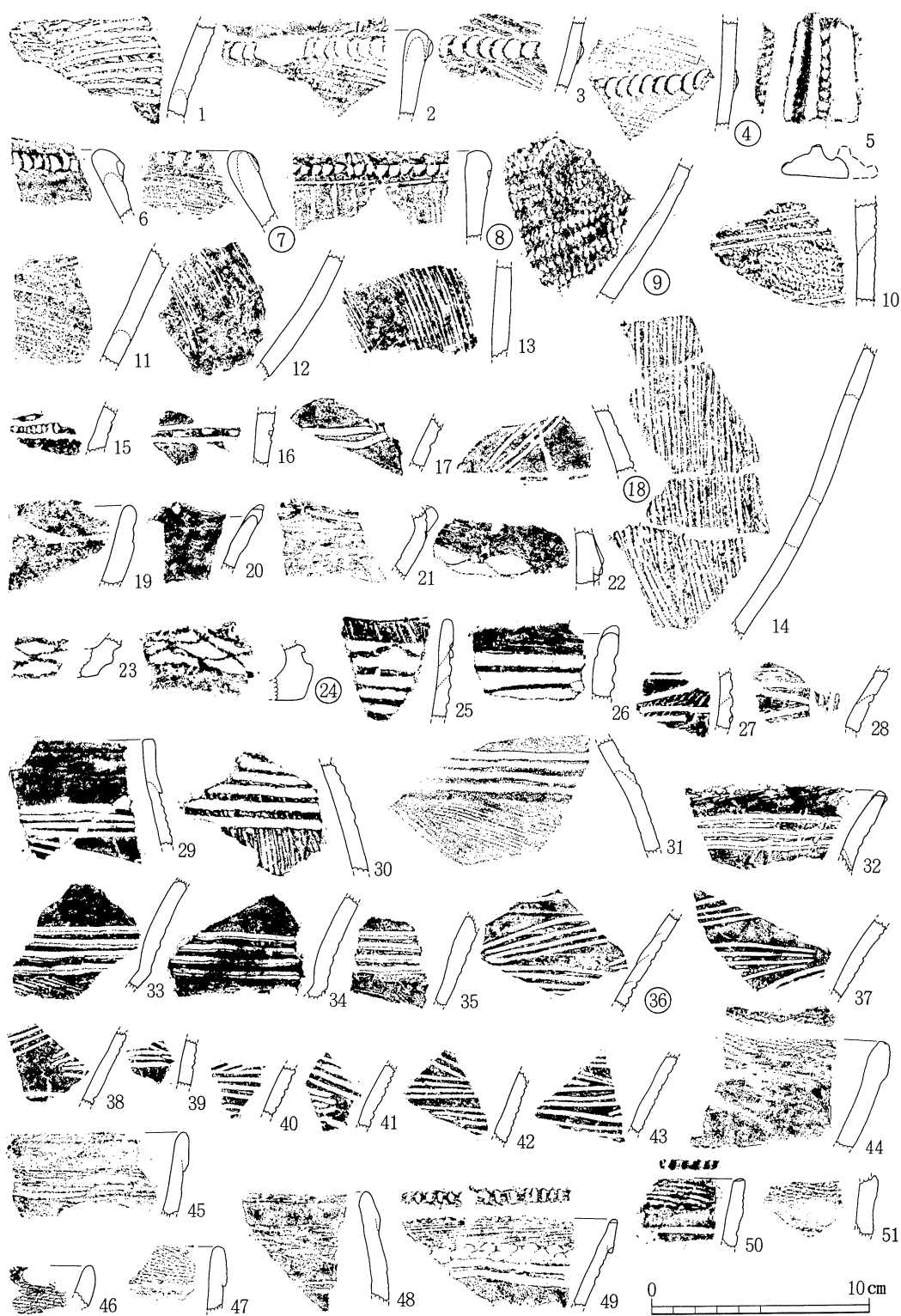
15～18としたのは、中期に位置づけられるものである。今回の調査によって検出された縄文土器の中では、中期土器の出土量は極めて少ない。共に加曽利E式期の土器として把握される。口縁部の形状を知ることの出来る例が一点(18)があるが、他は口縁～胴部の破片である。

19～第47図14は後期の土器と思われるものである。これらには、紐線文の貼付されることを特徴とする加曽利B式期の粗製深鉢形土器の破片を主体的に見ることが出来る。又、1点ではあるが、第47図5として載せた土器片が、日常什器とは異なる様相を見せている。帯状を呈し隆起帯上に連続的に刻目を有することを特色とするもので、加曽利B式期の釣手形土器の釣手部破片として捉えることが出来る。安行系の土器には、6～8が、その顕著な例として挙げられるが、他には出土量は少ない。

第47図15～21は、晚期中葉に位置づけられると思われるものを纏めた。これらは、篋状工具による沈線を主体的に施文したもので、一部刺突文も見ることが出来る。この時期の好例としては前述した第48図に12・13を挙げることが出来る。

第47図22以降は、晩期終末期の土器と思われるものを掲げてある。23・24は、大洞A式期の浮線網状文を施した土器で、共に底部破片である。浮線文の表現は荒く粗雑な感じを受ける。色調は白橙色を呈し、胎土中には微石の混入が目立つ。25・26は、太い沈線により文様を作り出すもので、共に口縁部の破片である。口唇部には一部波状に突出する部分を有するものである。27・28は沈線による変形工字文を施文するもので、沈線間を縄文で充填する部分も見られる。黒褐色を呈し、器壁は6～7mmと薄く、良く整形された土器である。

29～35は、横走る沈線を施文することを特色とする土器である。太く丸味を持つ沈線を施文したものと、半截竹管により施文したものがある。また、同じ様に、沈線を施文することによって文様を作り出すが、数条の平行沈線を横位・斜位に施すことによって器面を飾るもの(36～43)も見ることが出来る。32～35は、同一個体の破片と思われ、外反する口縁を有し、胴部中央部で一つの稜線を見せる浅鉢の形状を呈する土器で、稜線以下は細い櫛目状の条痕を斜位に施している。又、器面には部分的に炭化物の付着しているのを見ることが出来る。44～第47図11には、所謂粗製土器と言われている深鉢形土器の破片を纏めてある。これらには、口縁部を複合口縁状に作り出すもの(44～51)があるが、それらには、口唇部に刻目を有するもの(49・50)と刻目を伴わないものがある。



(※○印は古墳旧表土内出土土器)

図47 縄文土器拓影図

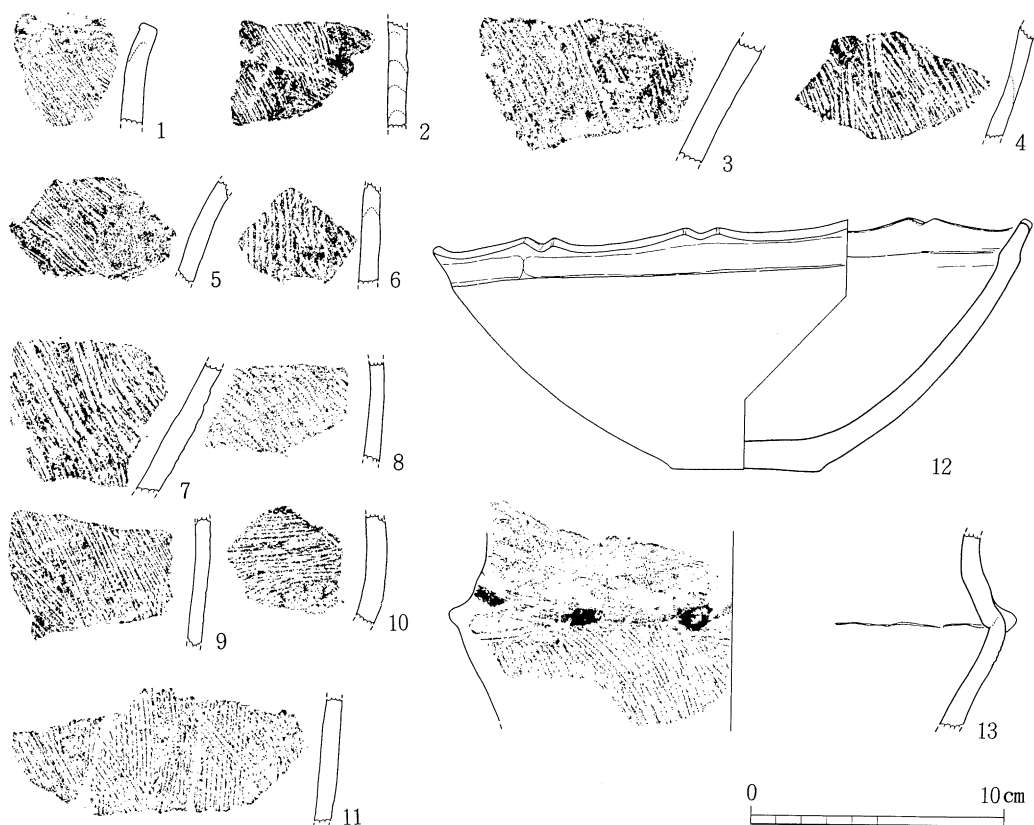


図48 縄文土器拓影図・実測図

これら粗製土器は器面に条痕を施すことが特色となっており、条痕文には、極めて細く櫛目状に見られるものと、幅も広く荒い感じのものの二通りがある。又、粗製土器の一部として扱った土器片の中には、第48図13に示した土器の様に、胴部以下に細い条痕文を施文する土器との明確な差が見られず、小破片に於いては、精製・粗製土器の区別は明瞭に行なうことが出来なかったが、今回の報告にあたっては、13以外の条痕文を有する晩期後半～終末の土器を粗製土器の範疇に属するものとして捉えておいた。

以上の様に、福増古墳の盛土および墳丘下から検出された縄文土器について簡単に見たが、これらの資料を見ると、前期の資料は見られないものの、早期から晩期終末に至る間の土器を見ることが出来る。今回の調査区に隣接する北側地域には中期～晩期に位置づけられる山倉天王貝塚と呼称されている大型貝塚が現存しており、山倉天王貝塚から当地をも含む広範囲が縄文時代の人々によって生活の場として活用されていたことが窺われる。又、今回検出された土器の中では、特に晩期終末期に位置づけられる例の多出が注目される。養老川下流域で、終末期の土器が検出されている遺跡には、管見に入っているものに西広貝塚、祇園原貝塚の例があるが、共に終末期土器の検出は、発掘面積の割には少量である。特に第46図下部に示した、太

い沈線を数条横位に施文する例、および半截竹管による数条の沈線を横・斜走する例は類似に乏しく、養老川下流域の晩期終末期の土器を考える上で、好資料を得ることが出来たと言っても過言ではないと思われる。

h. 福増3号墳の編年位置付け

今回調査を実施した福増3号墳からは、現在のところ内部施設が検出されていない。従ってここでは墳丘東～東北側の周溝覆土内より出土した一群の須恵器有蓋高杯をその拠点として、福増3号墳の編年の位置付けを考えておきたい。

周溝内出土の須恵器有蓋高杯は、計測値に小異が認められるものの、器形の特徴・胎土・焼成・色調が共に酷似することから、同一古窯からの一括供給品である可能性を有している。

器種構成が不明であることから、厳密な意味での年代観を与えることは困難であるが、坏身たちあがり端部の造り、器体の矮少化された法量、脚部の形態的な様相、蓋部の天井部と体部との間にみられる凹線状の区画などから、TK-43～TK-209号窯式平行の地方窯による製品と考えられる⁽¹⁰⁾。

この時期の類例を、福増古墳群に近隣する国分寺台の古墳群に求めるとすると、南向原古墳群の1号墳、2号墳を挙げることができる⁽¹¹⁾。いずれも蓋坏である。

報告によれば、南向原1号墳のものは、蓋が口径14cm、器高4.2cm、身が口径12cm、受部径14.5cm、器高4.1cm。2号墳のものは、周溝底出土の身が口径10.7～10.9cm、受部径12.7～12.9cm器高4.1cmであり、墓道出土のものは、蓋が口径12cm、器高4.6cm、身が口径9.6cm、受部径11.5cm、器高4.25cmである。福増3号墳のものは、計測値の単純な比較からみて南向原2号墳のものに近い。

さらに、南向原2号墳出土のものと福増3号墳出土のものを比較するならば、法量的には周溝底直上出土のものと近く、受部とたちあがりとの境に沈線の廻る点で類似している。

しかし、底部外面に施されたヘラケズリの範囲は、福増3号墳出土のものの方が狭く後出的な様相がみられる。他方、墓道出土のものと比較すると、福増3号墳出土のものの方が、法量的には一回り大きく、蓋の天井部と体部との間に凹線状の区割線を不明瞭ながら施している点で前出的といえる。報告の範囲内での机上による検討のうえ、蓋坏と有蓋高坏という器形的な相違も含まれることから、考察としては不十分とならざるを得ないが、以上の点から福増3号墳周溝内出土の有蓋高坏の一群を、形態的には南向原2号墳出土の周溝底出土蓋坏と墓道出土蓋坏の中間に位置付け、年代的には生産地の違い等を考慮して前者（周溝底出土蓋坏）に前後するものと考えておきたい。

南向原2号墳出土須恵器の年代観については、報告者の詳細な検討によって「一部古い要素が認められるがほぼ7世紀前半代の須恵器群であり、築造期を示す坏身が若干古い」とされて

いる。従って、本古墳周溝内出土の須恵器有蓋高坏についても、これにならって7世紀初頭と
考えておきたい。

6世紀前半代から7世紀前半代にかけての養老川流域における古墳の変遷については、既に
例示した国分寺台古墳群内の南向原古墳群の調査によって、或る程度明らかにされている⁽¹²⁾。

それによれば、「南向原古墳群は、Ⅰ期（墳頂部木棺直葬）Ⅱ期（墳丘裾木棺直葬）Ⅲ期（
横穴式石室）と内部施設からは3時期に区分できる」とされ、各期に6世紀前半代、6世紀後
半代、7世紀前半代の年代観が与えられている。

福増古墳群内における古墳相互の立地的関係を考慮した上で、この年代観を当てはめてみる
と、横穴式石室を内部施設とする1号墳および2号墳は、7世紀前半代にあてられ⁽¹³⁾、2号墳前
庭部より出土した「墓前祭祀」の須恵器群と出土状況を考慮した上で整合する。他方、福増古
墳群の生産基盤を、有木微高地前面の養老川流域として考えた場合、福増3号墳は、1・2号
墳よりも優位的な位置に立地していることが窺われ、横穴式石室を内部施設としない点で整合
し得ることがわかるのである。

次に、内部施設の推定から考えると、福増3号墳の墳丘構築工程は、2段階の作業工程を踏
んでおり、年代的な開きは想定されるものの、東間部多1号墳の墳丘構築工程を思わせる⁽¹⁴⁾。そ
の意味に於いては、福増3号墳の内部施設を墳頂部木棺直葬と考えることも可能である。しか
し、盛土の積み上げ方が、東関部多1号墳のものと比較して粗雑であり、内部施設の設置を想
定した「核」であるかどうか疑問が持たれること、墳丘裾部の変形が著しく推定復元を困難
としているものの、同規模円墳の墳丘高との比較からみて内部施設が検出されても良いと思わ
れるだけの遺存度であったこと、先に挙げた墳丘構築工程の一次工程が、内部施設の設置を意
図するものならば当然検出されている筈であること等から推考して、墳頂部木棺直葬の可能性
は低いものと考えられるのである。

従って、福増3号墳の内部施設は、墳丘裾木棺直葬である可能性が高い。翻って、周溝内出
土の有蓋高坏の年代観の根拠とした、南向原2号墳の内部施設をみると、横穴式石室が導入さ
れており⁽¹⁵⁾、有蓋高坏の出土状況を考慮すると、福増3号墳は南向原2号墳に先行するものと考
えられ、内部施設における年代観とも一致することになる。

以上のことから、福増3号墳は、福増1・2号墳に先行して、横穴式石室導入直前に築造さ
れたものと考えられ、国分寺台古墳群との関係では、南向原2号墳と南向原1号墳との間に位
置付けられるものと考えられる。年代観は、6世紀代末と考えておきたい。

尚、内部施設については、未調査区域の調査を待つて、再度検討を加えるべきものと思う。

註

- (1) 「場」については、東間部多1号墳周溝内土器に関する宮本敬一氏の指摘を参考とさせていただいた。
報告によれば、東間部多1号墳の周溝底直上より出土した土器の一群は、東南から南西にかけてまとまっており、養老川沖積地を指向しているとのことである。宮本敬一・田中新史（1974）「第3章 東間部多古墳群 第1節古墳の調査 II 1号墳」『東間部多古墳群—上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ—』
- (2) 前掲書(1)に同じ
- (3) この古道が、古代まで遡り得るかどうかは、確証がない。
- (4) 報告にも述べたとおり、墳丘裾部は道路状遺構などによってかなり変形されている。従って、地区的な限定そのものにも問題は残っている。しかし、E区～F区については周溝覆土が良好な状態で遺存しているにもかかわらず、ここからは資料が得られていない。尚E区～F区が福増1号墳に面した側にあたることにも付言しておく。
- (5) 昭和59年度に調査された永田窯の11Bトレンチ内IV層より出土している。実見の上比較。
山口直樹（1985）『永田・不入窯』（市原市文化財センター調査報告第7集）
- (6) 山村宏・向坂鋼二・平野和男（1966）「遠江地方古窯跡出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯跡調査報告書』、向坂鋼二（1985）『伊場遺跡を中心とした歴史時代土器の諸問題』第10回歴史考古学セミナー資料
- (7) 宮本敬一氏の御教示による。
- (8) 檜崎彰一（1983）「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告書（Ⅲ）』
- (9) 形態的には、K-90号窯式を下限とするものと思われる。従って、0-10号窯式をひとつの起点としてしばらくがいつ頃まで存続するかが問題になるかと思う。
- (10) 田辺昭三（1981）「第三章 須恵器生産の展開」『須恵器大成』他
- (11) 田中新史（1976）「第一章 南向原古墳群の調査」『南向原—上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ—』
- (12) 前掲書11より
- (13) 中村恵次他（1967）「福増古墳群」『市原市周辺地域の調査』
- (14) 前掲書(1)に同じ
- (15) 前掲書11に同じ

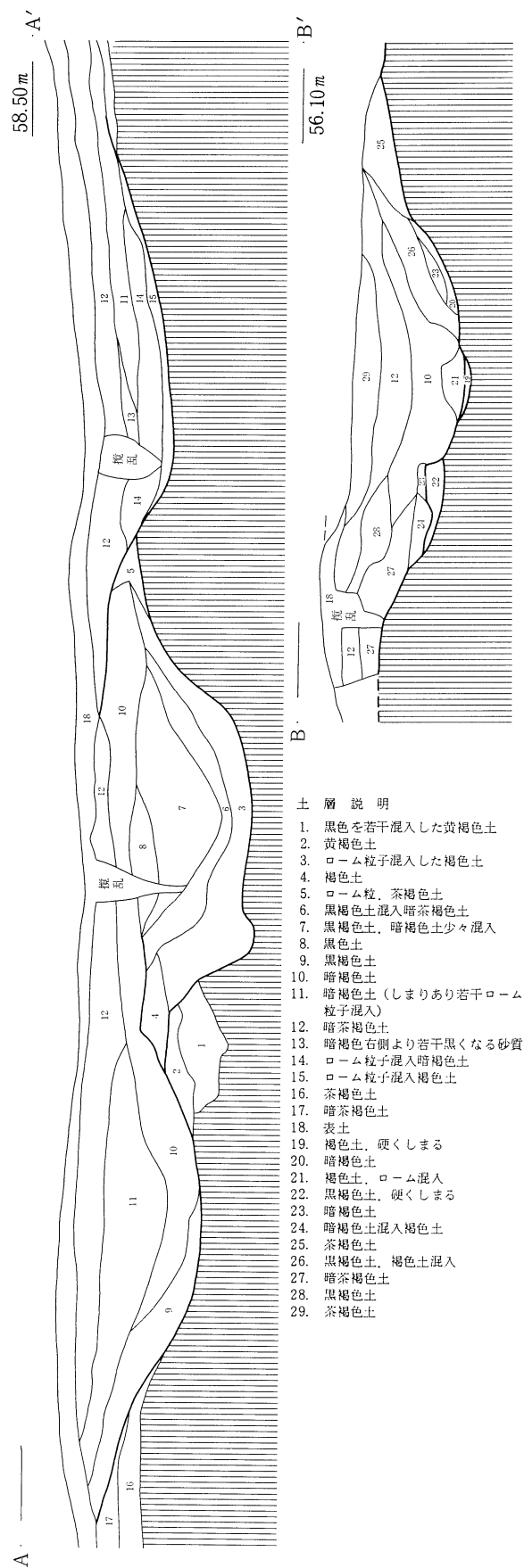
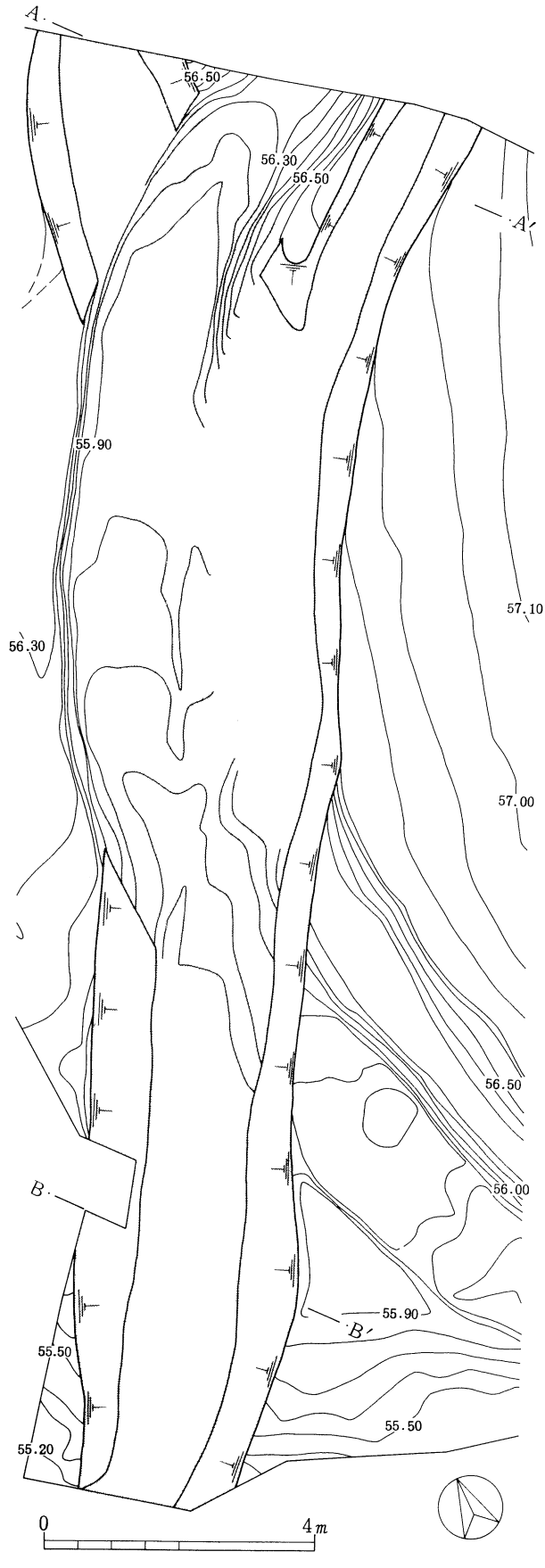


図49 No. 1・No. 2 遺構（道路状遺構）実測図

3. 道路状遺構 (No. 1 遺構～No. 4 遺構)

今回の調査区域内より検出された道路状遺構は、No. 1 遺構からNo. 4 遺構までの 4 遺構であった。各遺構の分布は、前述のとおりである。

No. 1 遺構・No. 2 遺構

No. 1 遺構およびNo. 2 遺構は、福増 3 号墳の西側を、一部周溝と重複し乍ら、台地の縁辺に添って南北に走っている。両端は共に調査区域外へ延びている。

No. 1 遺構は、遺構底部巾約67cm、軸長 8 m80cmを計り、断面形態は巾の広い丸底状を呈している。表土からの深さは、70 ～90cmであった。

No. 2 遺構は、No. 1 遺構の北半で北東に枝分かれしている。遺構底部巾約32cm、軸長約 1 m80cmを計る。No. 1 遺構とNo. 2 遺構との切り合い関係は確認できなかったが、覆土や遺構底の高さに相違が認められておらず、併存していたものと考えられる。

No. 3 遺構

No. 3 遺構は、福増 3 号墳の西側を、周溝外径寄りで重複し乍ら東へ延びる道路状遺構である。断面形態は、No. 1 遺構・No. 2 遺構と類似しているものと思われるが、遺構の長軸に対して西半部が未調査のため明らかではない。覆土下半は、No. 1 遺構と類似した堆積であった。しかし、上半には、現県道建設時の石滓及び埋め土が観察されている。遺構の位置と長軸の方向から考

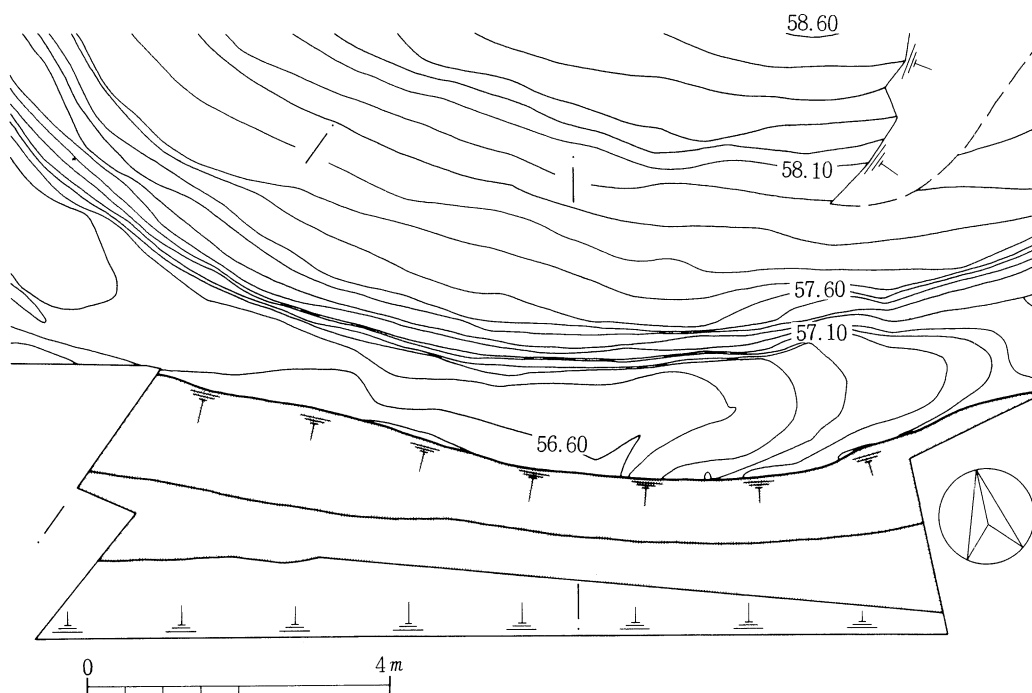


図50 No. 3 遺構 (道路状遺構) 実測図

えて、No.1 遺構と関連するものと思われる。即ち、池ノ谷・猿ガ谷の谷あいから台地にあがっていた小径（池ノ谷遺跡の報告で述べた「馬車道」あるいは「馬車道」から分かれた小径）が本遺跡に至って分岐し、一方が台地縁辺に添い（No.1 遺構）他方が犬成へ抜ける道（現在の県道犬成・海士有木線）に合流していた（No.3 遺構）ものと思われる。

No.4 遺構

No.4 遺構は、福増3号墳墳丘中央部の、旧表土層下より検出された道路状遺構である。遺構底面巾80cm～1 m10cmを計る。確認面から遺構底面までの深さが10cm未満と浅く、両端に連続する面を追うことはできなかった。遺構底面には、僅か乍ら硬化した面が確認されている。

断面形は隅丸の平底状を呈しており、覆土にはローム粒子の混入が認められるものの、暗褐色土ないしは黒褐色土の単一層であり、旧表土が前面を覆土していた。

遺構面からは、遺物の検出が全く認められなかった。

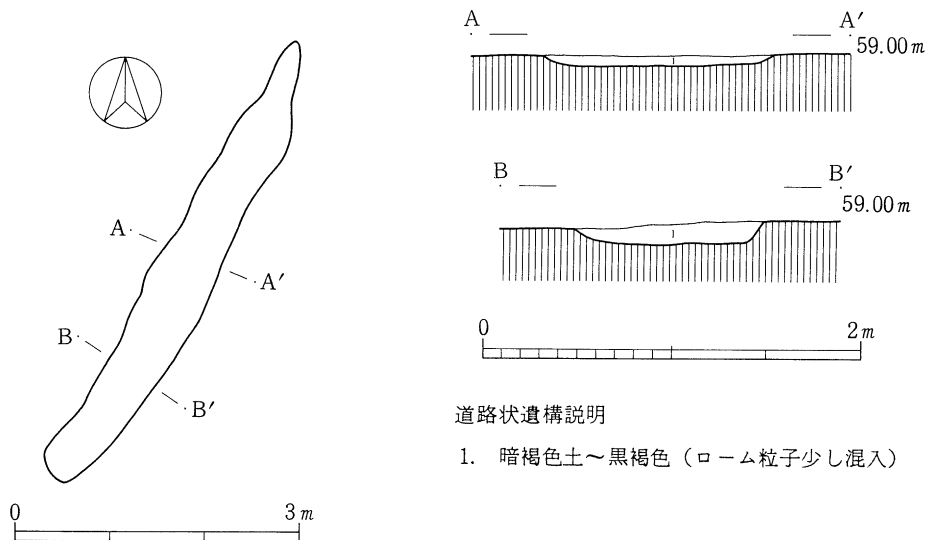


図51 No.4 遺構（道路状遺構）実測図

4. 土坑状遺構（No.5 遺構・No.6 遺構）

今回の調査によって検出された土坑は、No.5 遺構とNo.6 遺構との2遺構であった。

No.5 遺構

福増3号墳F区墳丘下に検出された土坑である。平面形態は、楕円形を呈しており、長軸長2 m52cm、短軸長2 m20cmを測る。確認面からの深さは、80cm～85cm前後であり、断面形態は隅丸の箱型を呈している。遺構のプラン確認面は、古墳旧表土除去後に検出されているが、覆土上層にロームブロックの混入と、旧表土層に類似する土層の堆積が認められたことから、調

査当初は変則的な主体部の可能性も考慮しつつ精査して遺構および遺物の検出に努めた。

この結果、旧表土との関係は捉えられなかったものの、古墳に伴わない土坑であることが判明した。遺構内からは、遺物の出土を見ておらず、従って遺構の時期及び性格は不明である。

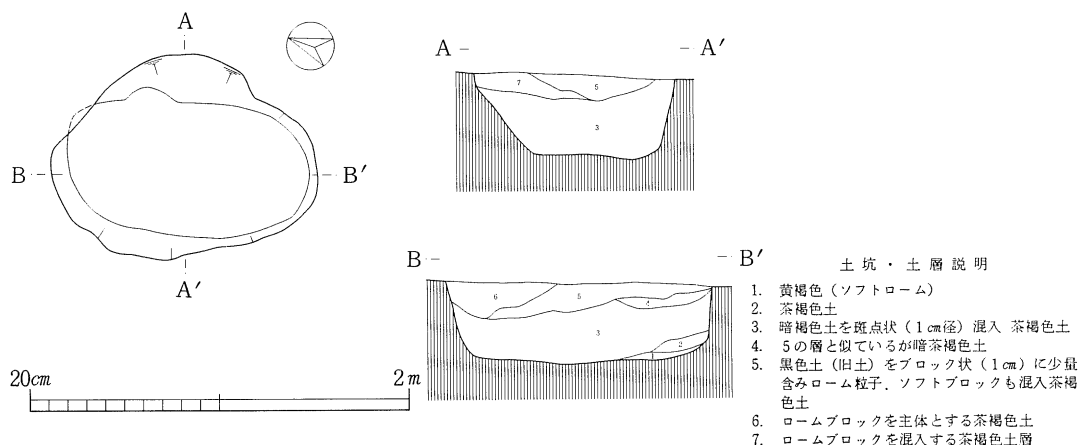


図52 No. 5 遺構（土坑）実測図

No.6 遺構

福増3号墳C区周溝内径寄りに検出された土坑である。遺構の大半が周溝開鑿時に削除されているため旧態を知り得ないが、遺存する遺構底部の形状がら楕円形を呈していたものと推測される。計測値は、遺構底部長軸長1m40cm、短軸長44cm、確認面からの深さ1m28cmを測る。

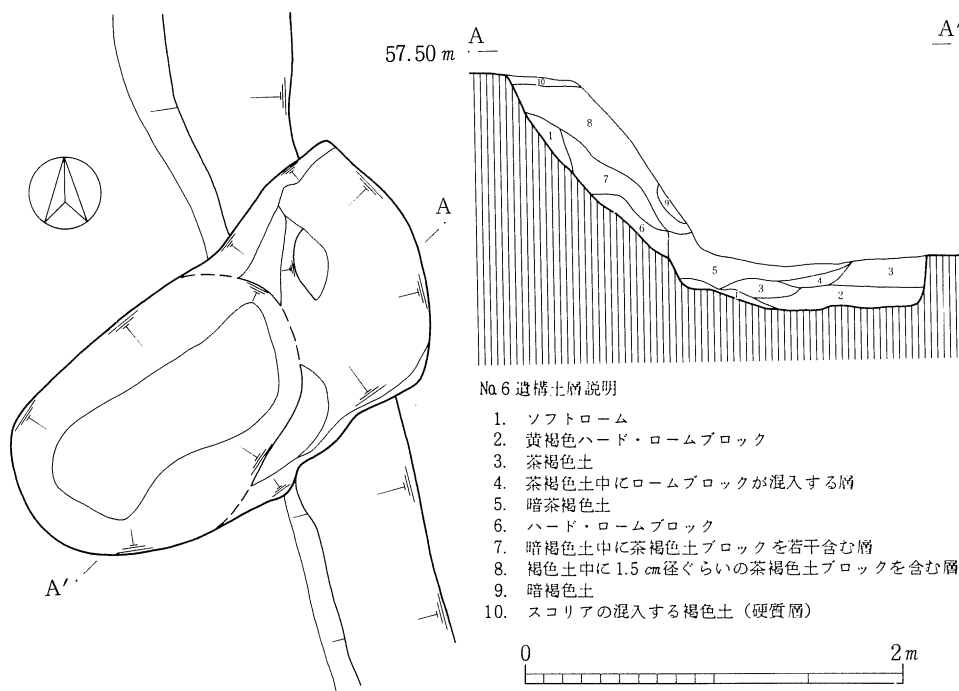


図53 No. 6 遺構（土坑）実測図

遺構内からは、遺物が出土しておらず、焼土等の存在も確認されていないが、時期・性格とともに不明であるが、覆土上層に古墳旧表土層の堆積が確認されており、古墳との新旧関係は明確である。

5. 溝状遺構 (No. 7 遺構)

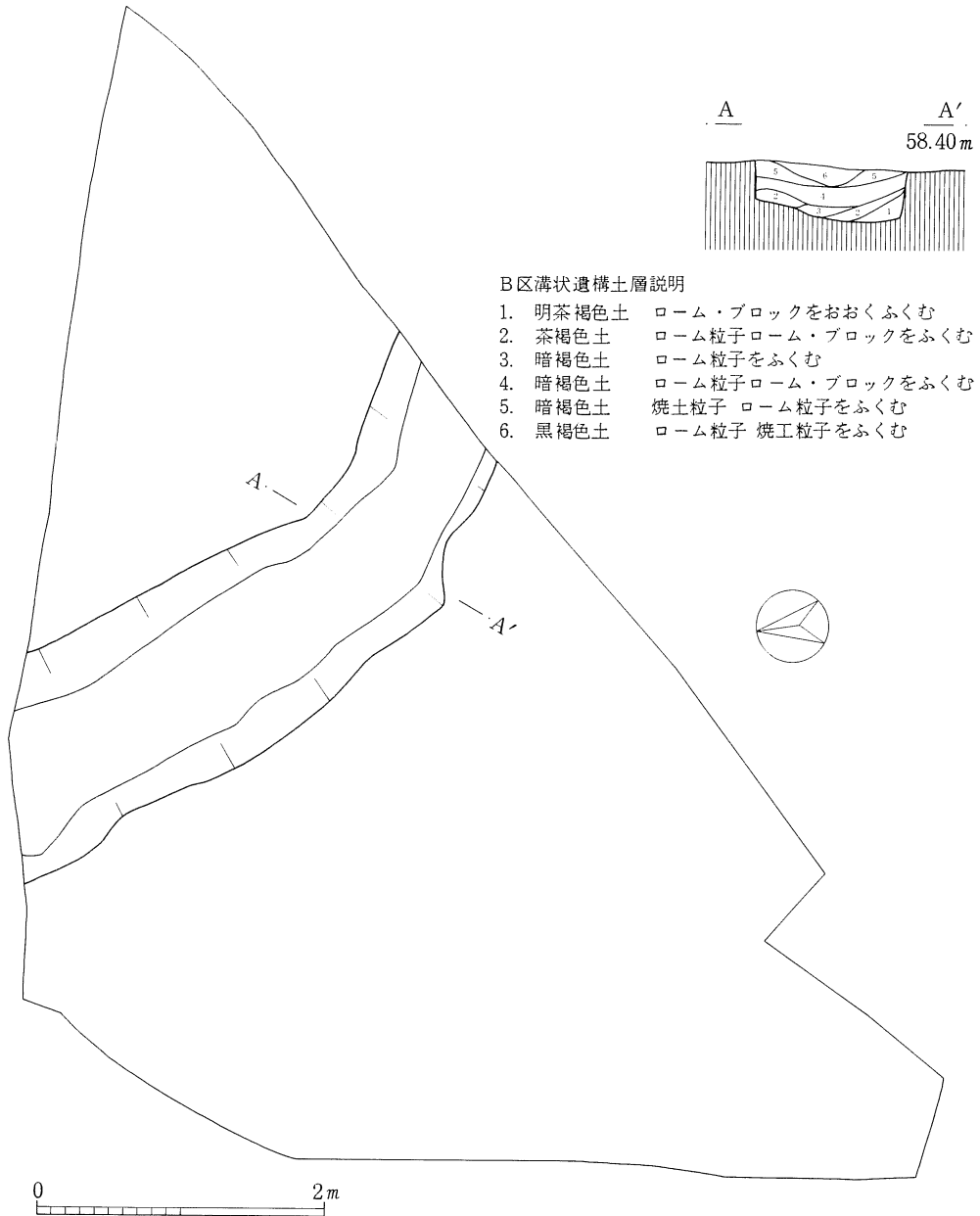


図54 福増遺跡B区溝状遺構実測図

B区のはば中央に位置し、東南から北へ向かって弧を描き乍ら北西へ走行する溝状遺構である。確認面における遺構上面の巾は1 m～1 m40cm、長軸長4 m38cmであった。遺構の壁面は直線的に掘り込まれており、底面は平底状を呈している。遺構確認面から底面までの深さは28cm～33cmを計り、断面形態はほぼ長方形を呈している覆土中よりロクロの使用が認められる土師器細片等が出土しているが、図示し得るものは認められていない。

6. 福増遺跡出土の石鏃（図55）

福増遺跡からは、古墳時代の旧表土層下にあたる縄文時代の遺物包含層から5点の石鏃が出土している。材質は、第55図1～3が黒曜石であり、4はメノウ、5はチャートである。形態的には、凹基有茎鏃、凹基無茎鏃、2タイプが含まれている。

凹基有茎鏃は、茎が短かく基部の両端より突出しないもので、抉入も比較的に浅い。(3)

凹基無茎鏃は、巾が広く脚部の丸くつくられたハート形のもの(1)、脚部が丸く抉入のやや深いもの(2)、基部の両端が比較的に鋭く抉入の浅いもの（4、5）とに分けられる。

これら5点の石鏃中、1のみは形態的に中期的な特徴を有しているが、他は長身であり後晩期にみられる特徴を有している。出土層位にあたる遺物包含層からは、後・晩期（特に晩期）に位置付けられる土器片が出土しており、石鏃についても、ほぼ同時期のものとして捉えられる。

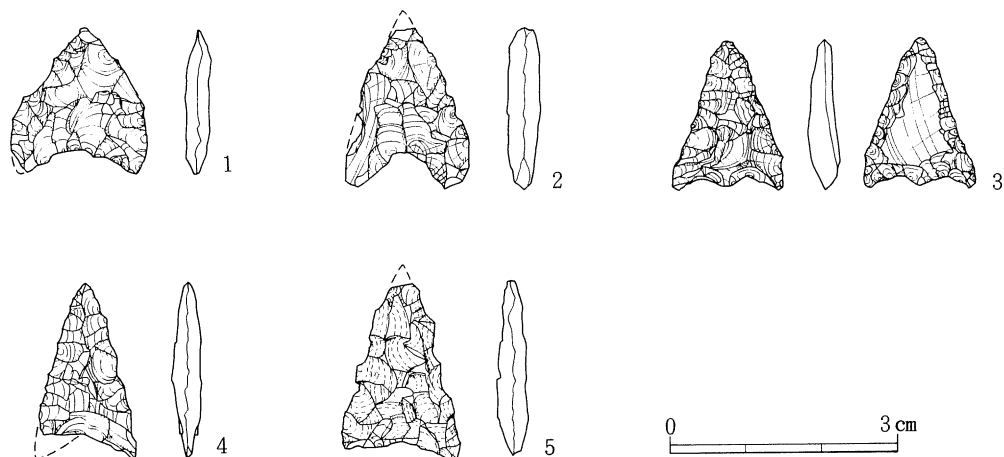


図55 福増遺跡出土石鏃実測図

IV ま と め

福増遺跡の調査の結果、福増3号墳の大凡の規模と形状が判明するとともに、道路状遺構4遺構・土坑状遺構2遺構・溝状遺構1遺構の計7遺構が検出された。

福増3号墳は、墳丘裾部および周溝が道路状遺構と重複し原形を損っているものの、基底面に観察された旧表土層の範囲と盛土の堆積状態から、径12.5m以上・高さ1.2m以上の円墳であることが判明した。盛土は、周溝開鑿時のロームを主体としている。しかし、盛土内出土の縄文土器には、旧表土層下の包含層には見られない縄文早期のものが含まれており、周囲からの客土をも用いたことが窺われている。旧表は、北～北東寄りのやや高い部分に若干の整形が観られたが、旧表土面上に盛っている。テラスの有無については、道路状遺構との重複等によって、十分には捉えられなかった。しかし、部分的乍らも周溝内径上端部より3m前後のところに、基底面の傾斜変換点が認められ、地山削り出しによる視覚的な墳丘規模の巨像化を意図したテラス状の帯が、盛土外周に巡っていた可能性を示唆している⁽¹⁾。

周溝の復元値は、内側上端径22m、下端径23m、深さ（確認面より）80cm（北東より）～60cm（南より）を計る。周溝の断面形態は、一定しておらず、巾も安定していない。墳丘の構築過程に見られた粗雑さは、周溝の開鑿にも窺われており、地方における後期古墳の群集化を考える上で、興味深い一面を覗かせている⁽²⁾。

内部施設については、横穴式石室墳でないことを確認するに止まっている。養老川流域の古墳文化については、国分寺台の調査を除くと、未だ緒についたばかりである⁽³⁾。今後、さらなる資料の収集を計り、改めて考察を加えるべきものであることを痛感している。

小群としての福増古墳群の位置付けについても、内部施設同様である。

しかし、今回の調査によって、埴輪の存在を確認し得たことは、ひとつの成果であったかと思う。埴輪の存在については、台地縁辺の北側に隣接・連続する国分寺台古墳群中の南向原4号墳⁽⁴⁾、持塚1号墳、山倉1号墳⁽⁵⁾などに知られており、南では武士古墳群中の人見塚古墳において、その存在が知られている⁽⁶⁾。殊に、山倉1号墳は、6世紀後半から7世紀初頭に比定されており、五体の人物埴輪をはじめとして、多くの形象埴輪、円筒埴輪が検出されている。福増3号墳出土の埴輪片については、報告に述べたとおりであり、比較に十分耐え得る資料とは言い難いが、「存在」を明らかにし得たことと、形象埴輪の可能性を有するものの含まれていることは、提示できる。今後、時期的に前後する山倉1号墳出土のものをはじめとして、周辺地域出土の埴輪と比較し、さらなる検討を加えていきたい。

道路状遺構は、明治16年測量の「迅速測図二万分の一」（八幡宿）に見られた池ノ谷から六

万部に抜ける、谷あいの小径から分岐したものであろう。

池ノ谷から六万部に至る小径については、古老の話に「馬車道と呼ばれ、馬頭観音に関連する」ものと言われている。現に、馬頭観音の石碑が、福増遺跡の北東側 400m程のところに建てられているのである。

他方、今回の調査によって検出された道路状遺構（No.1～3 遺構）については、先に挙げた明治16年測量図には記載がなく、それ以前に廃絶したものと思われる。（cf. 第5図）

道路状遺構の覆土中からは、殆んど遺物が検出されておらず、年代的な決め手は無いが、中・近世に比定される燈明皿や内耳土器の小片と思われるものが瞥見されている。同様のものが池ノ谷遺跡において出土しており、（第30図 1・2、第33図 13,14）先に述べた「馬車道」との関係窺わせている。

また、福増3号墳周溝上層D区出土の土師器高坏や、墳丘表土層F区出土の長頸瓶についても、池ノ谷遺跡に類例が求められる。池ノ谷と福増の中間に位置する猿ガ谷に、鬼高期に比定される猿ガ谷遺跡の存在することは、既に述べたとおりである。

以上のことから推考して、No.1 遺構～No.3 遺構が、古くより利用されていたことが窺われる。

土坑状遺構2 遺構については、不明瞭乍らも、福増3号墳の下層遺構と考えられる。

福増遺跡における縄文時代の遺物は、土器および石鏃であった。土器は、早期から晩期に至るまで一様のものが瞥見されるが、早期および晩期の資料が量的に多い。しかし、先に触れたとおり、今回の調査区にみられた縄文時代の遺物包含層は、後・晩期のものであり、早期のものは含まれていない。市原市教育委員会によって実施した分布調査の成果によれば、今回の調査区域に接する南側台地縁辺から、福増1号墳一帯が遺物散布地として周知されており、縄文土器が数多く表採されている⁽⁸⁾。また、福増1号墳の周辺からは、袂の深い逆「V」字形を呈する凹基無茎石鏃も表採されている⁽⁹⁾。六万部北方には、山倉天王貝塚も存在しており、福増遺跡周辺にも、縄文時代の集落が営まれていた可能性が高いものと思われる。

他方、縄文時代の遺物について、ふたたび池ノ谷遺跡出土のものと比較すると、報告者の指摘にもあるとおり、石器に特徴的な違いが窺われる。即ち、池ノ谷遺跡からは、凹石や石皿等が出土しているのに対し、福増遺跡にはそれらが全く認められず、石鏃のみが出土しているのである。縄文時代の人々の、土地の利用法の違いに依るものであろうか、興味の持たれるところである。

註

- (1) 地山削り出しによる墳丘規模の巨像化は、墳丘構築時の作業効率を高めるためのものと考えられる。同様の工法は、千葉市域の小円墳などにも窺われる。殊に、小金沢1号墳では、地山削り出しによる傾斜角

度が、これに連続する墳丘の傾斜角度と一致している。

栗本佳弘・白井久美子（1917）『小金沢古墳群』（千葉東南部ニュータウン 8）

- (2) 今回の調査結果からは、詳細な検討を加えられないが、周溝の開鑿や墳丘の葺石には、古墳築造時の作業単位が窺われるものがある。特に、葺石については、界石を用いることで工法上の作業区割を設定するものがあり、（大阪府高槻市弁天山古墳群など）理解しやすい。周溝の開鑿に、このような作業単位を看取り得る場合というのは、工法上の粗雑化の中に表象し得るもので、福増 3 号墳 D 区周溝底に観られた段差などは、好例と言える。

- (3) 市毛 勲・須田 勉 他（1974）『東間部多古墳群－上総国分寺台調査報告Ⅰ－』

滝口 宏・田中新史 他（1976）『南向原－古墳，方形周溝墓・住居址の調査－』

中村恵次・安藤鴻基 他（1967）「福増古墳群」『市原市周辺地域の調査』

中村恵次（1964）「千葉県養老川流域の古墳群についての一考察」『古代 42・43合併号』

その他

- (4) 註(3) 『南向原』

- (5) 米田耕之助（1976）「上総山倉一号古墳の人物埴輪」『古代 59・60合併号』

- (6) 須田 勉 （1976）「Ⅰ 序説 1. 武士遺跡周辺の歴史的環境」『武士遺跡』

- (7) 「千葉縣市原市埋蔵文化財包含地カード」および同分布図 市原市教育委員会文化課

- (8) 米田耕之助氏御教示。

- (9) 米田耕之助（1979）「養老川流域の縄文時代遺跡(2)」『伊知波良 2』



池ノ谷遺跡 福増遺跡周辺の航空写真（1967年12月27日撮映 南側から）



1. 第1グリッド（東側から）



2. 第2グリッド（東側から）



1. 第3グリッド（東側から）



2. 第4グリッド（東側から）



1. 第5グリッド（西側から）



2. No.1 遺構・No.2 遺構（北側から）



1. No.1 遺構内遺物出土状態 (〔Ⅱ〕層中間)



2. No.1 遺構内遺物出土状態 (〔Ⅱ〕層下面)



1. No.1 遺構内ヒョウタン片出土状態 (〔I〕層上層)



2. No.1 遺構内遺物出土状態 (〔II〕層下層)



1. No. 3, No. 4 遺構西半部検出状態



2. No. 3 遺構 土層断面



1. No. 3, No. 4 遺構 土層堆積状態



2. No. 5 遺構 (北側から)



1. No.7 遺構 覆土堆積状況



2. No.8 遺構 (東側から)



1. No.8 遺構 堆積状況 - 1 (北端)



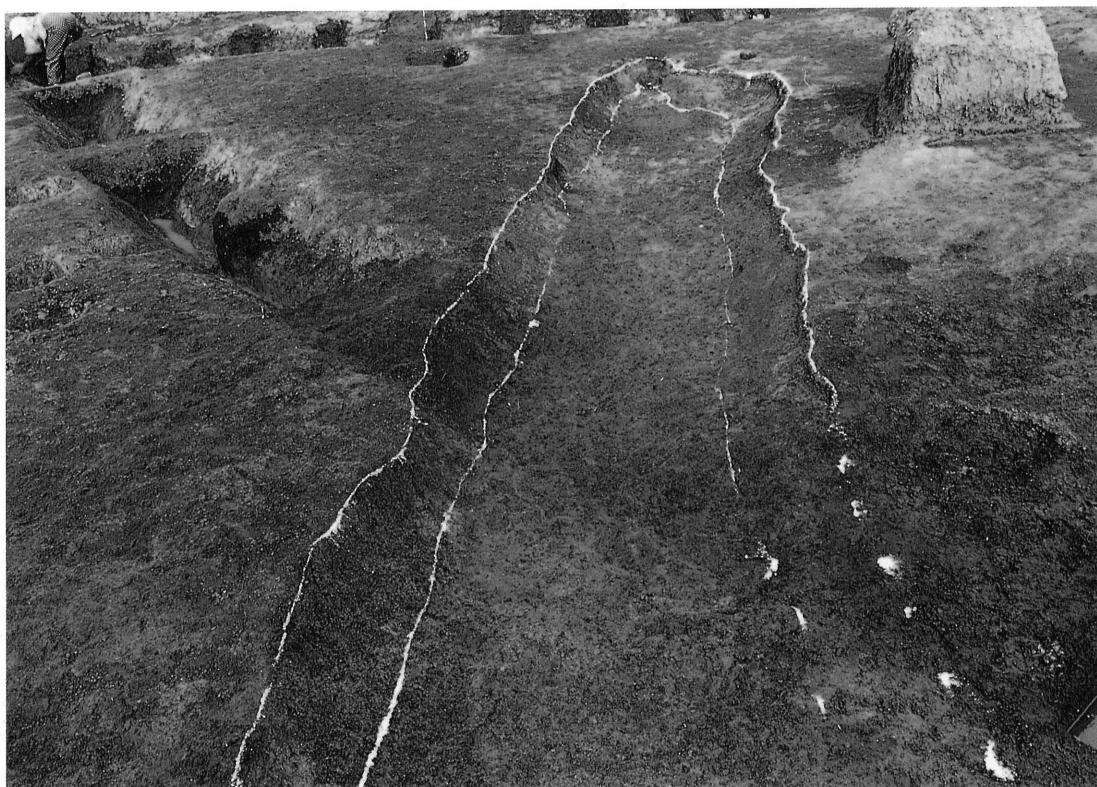
2. No.8 遺構 堆積状況 - 2



1. No.8 遺構 堆積状況 - 3



2. No.8 遺構 遺物出土状況



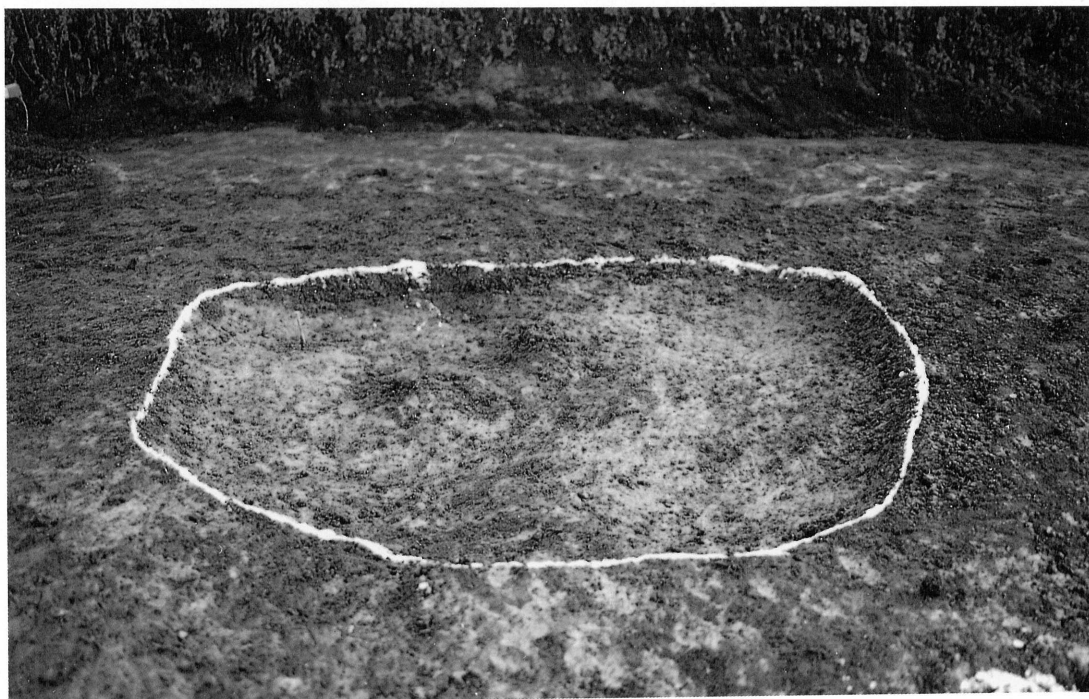
1. No. 9 遺構（南側から）



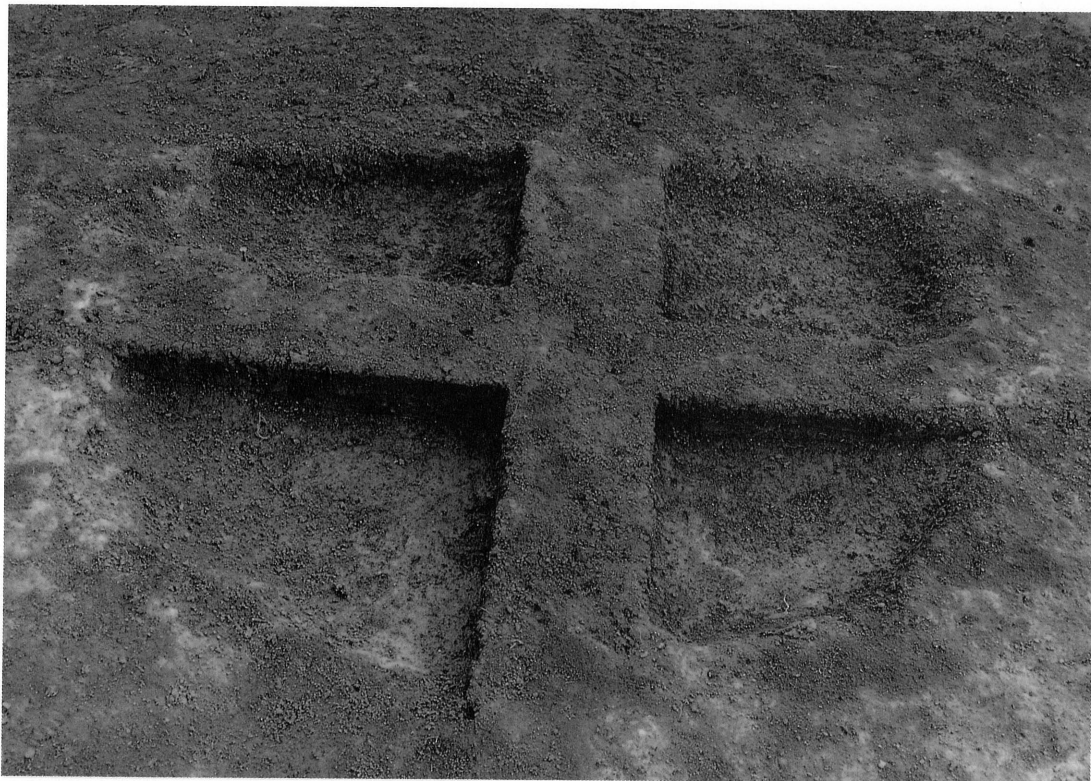
2. No.12・13遺構（西側から）



1. No.12・No.13遺構湧水堆水状況（西側から）



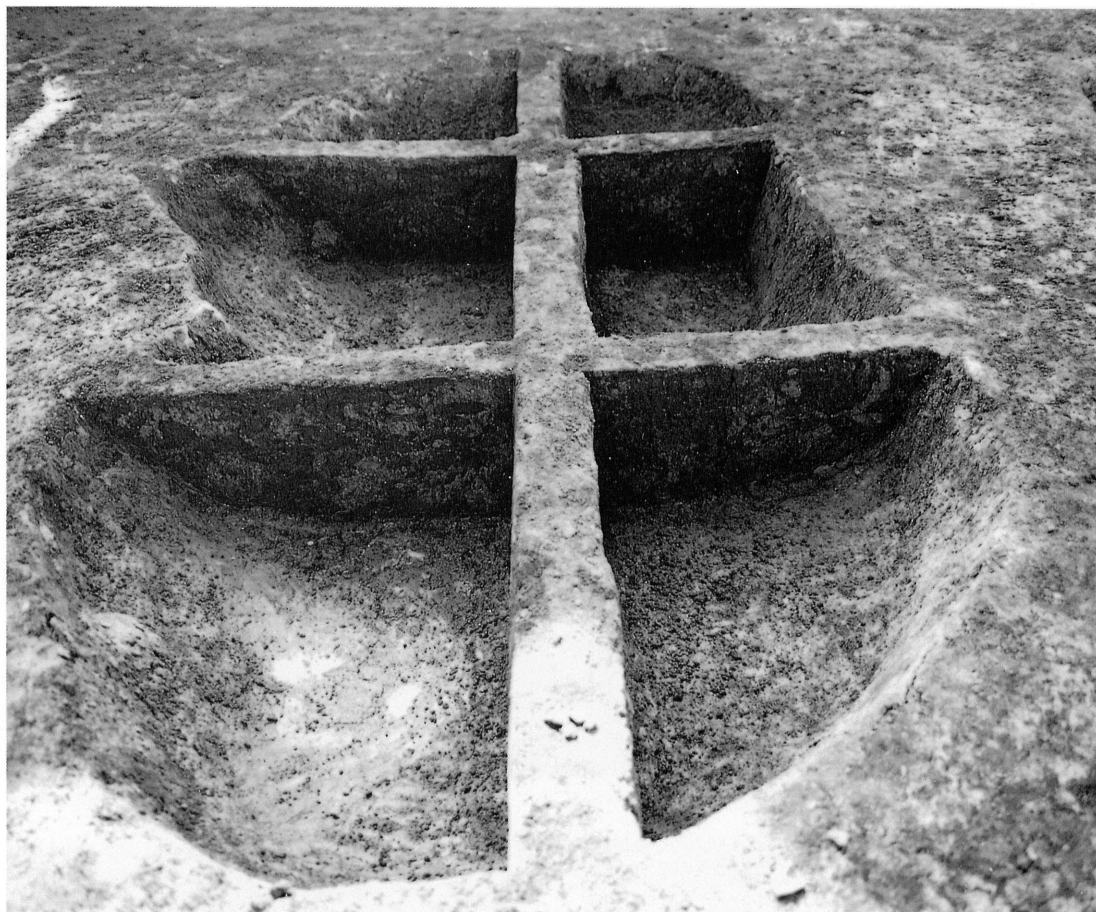
2. No.14遺構（北側から）



1. No.14遺構 覆土堆積状況（北側から）



2. No.15遺構（北側から）



1. No.16遺構（北側から）



2. No.17遺構 覆土堆積状況（西側から）



1. No.17・No.18遺構（北西から）奥はB-6区



2. No.42遺構（西側から）



1. 堰跡トレンチ確認状況



2. 堰跡堆積状況 - 1



1. 堰跡堆積状況 - 2



2. 堰跡堆積状況 - 3



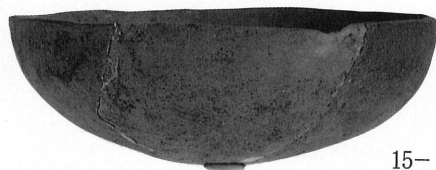
B-6区全景（調査状況）



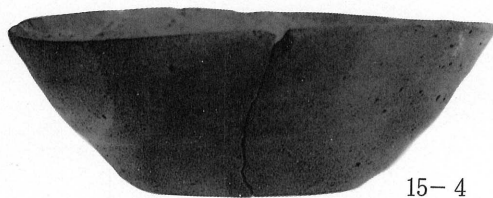
B-6区堆積状況（部分）



15- 1



15- 2



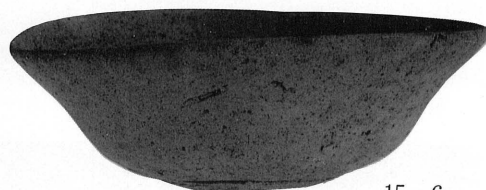
15- 4



15- 3



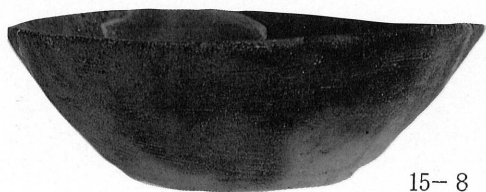
15- 5



15- 6



15- 7



15- 8



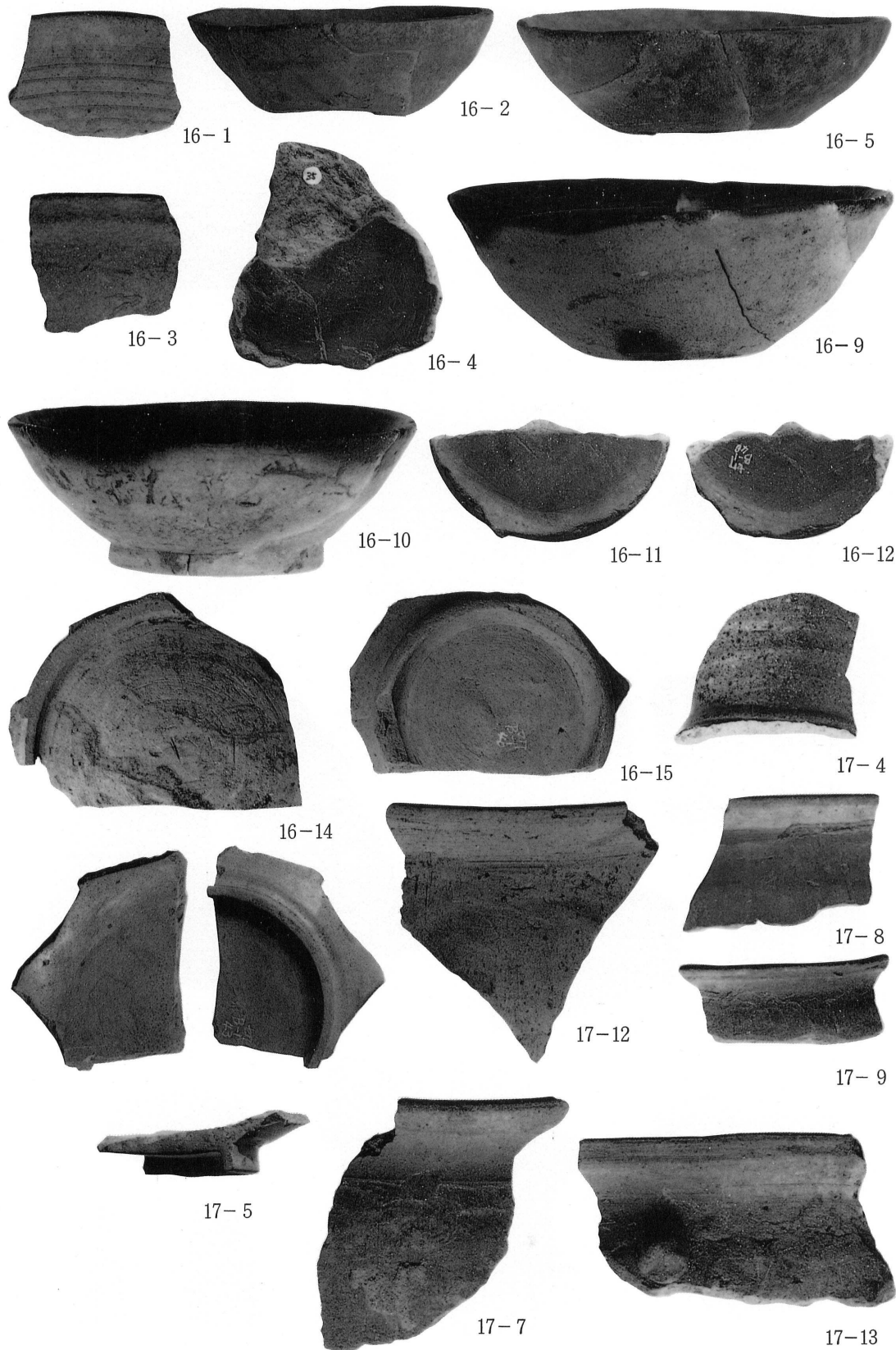
15- 9



15-10



15-12





17-14



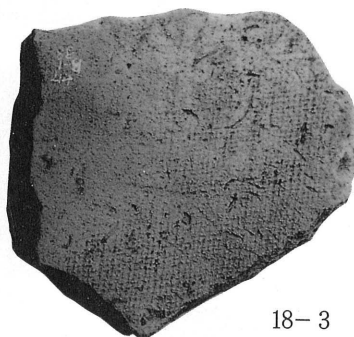
17-15



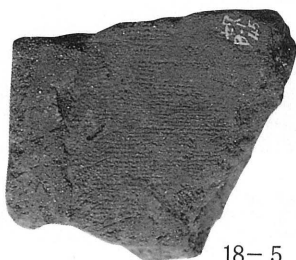
18-1



18-4



18-3



18-5



18-7



18-6



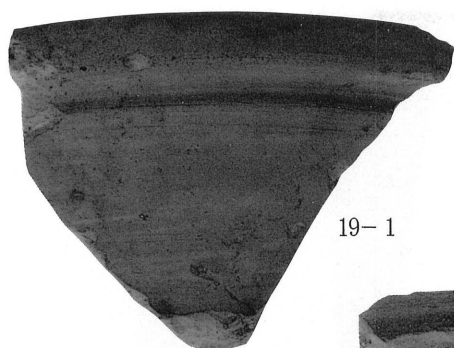
18-9



18-10



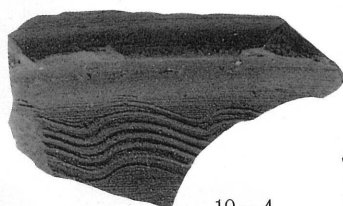
18-8



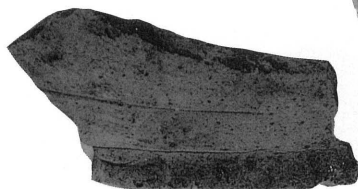
19-1



19-2



19-4



19-3



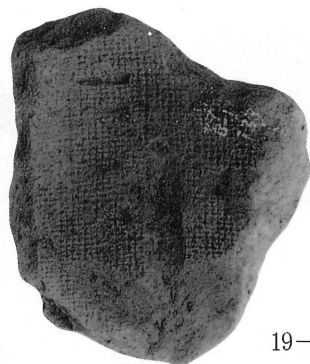
19-5



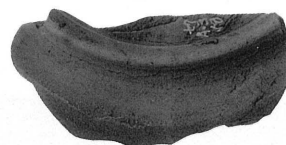
19-6



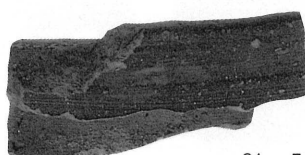
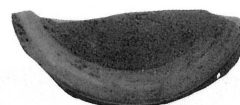
21-1



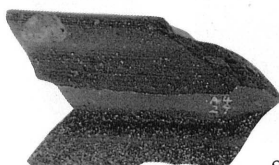
19-7



21-2



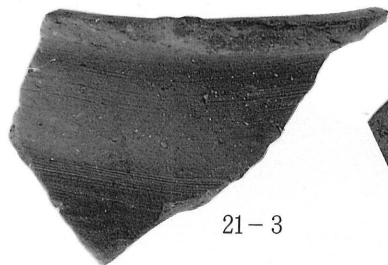
21-5



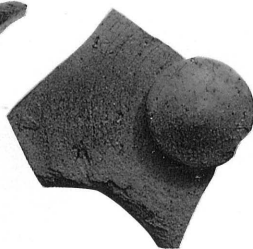
21-6



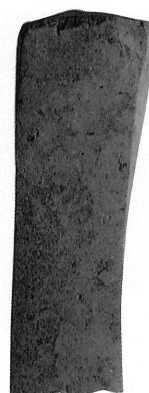
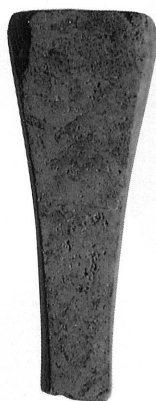
21-4



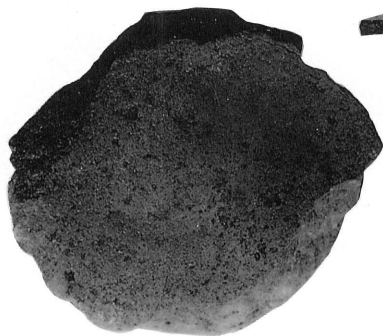
21-3



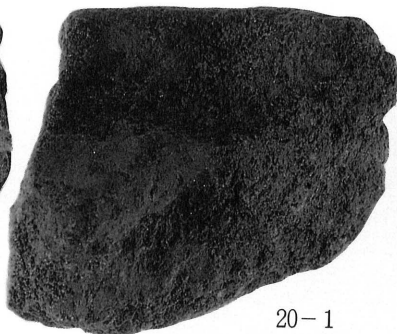
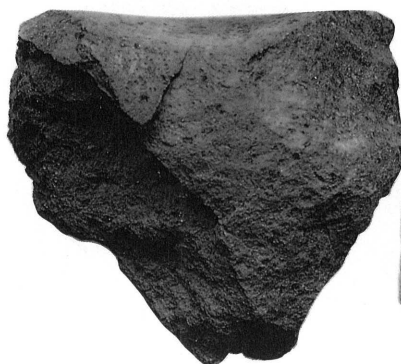
21-8



23-1



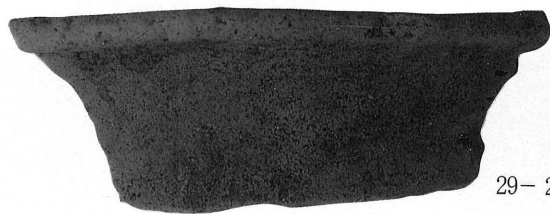
21-7



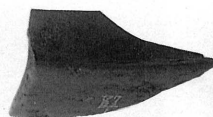
20-1



21-9



29-2



29-1



30-3



30-2



30-1



31-1
(B-5)



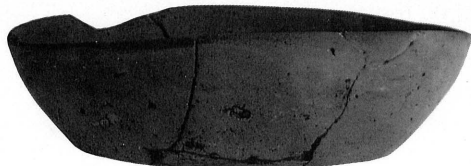
31-2
(A-3)



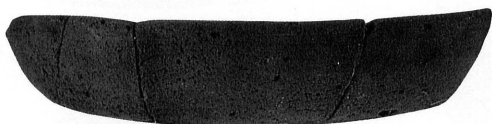
31-3
(B-6)



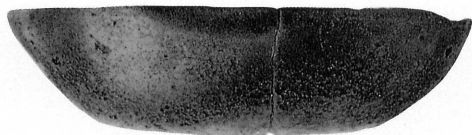
31-4
(B-6)



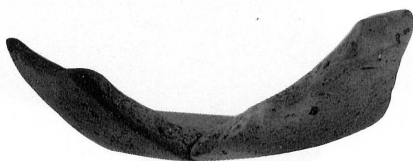
31-5
(B-6)



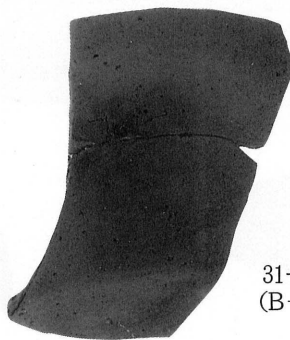
31-6
(B-6)



31-7
(B-6)



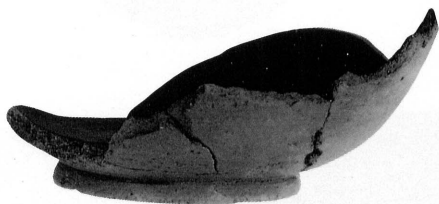
31-8
(B-6)



31-11
(B-6)



31-10
(B-6)



31-13
(B-6)



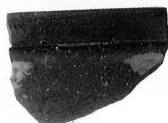
31-12
(B-6)



31-17
(B-6)



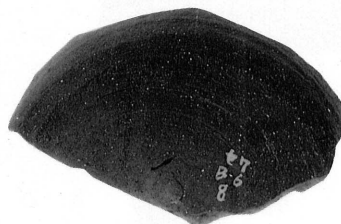
31-15
(表)



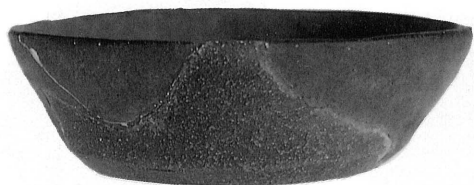
31-19
(B-5)



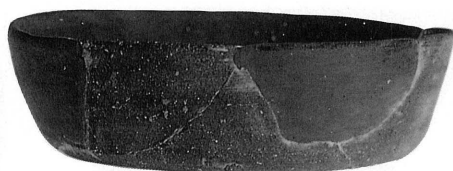
31-20
(A-5)



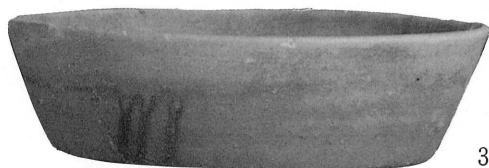
31-18
(B-6)



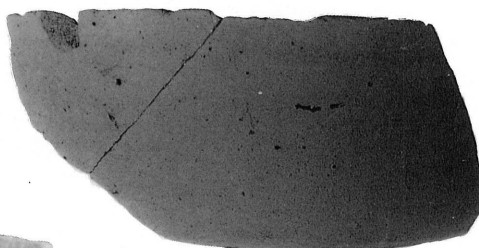
31-21
(B-6)



31-22
(B-6)



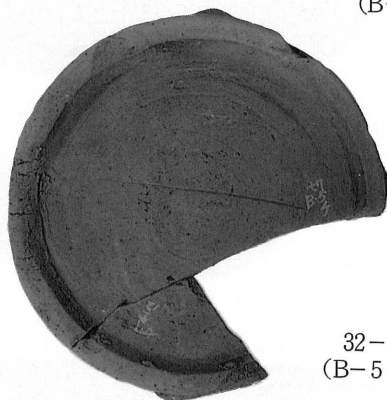
31-23
(B-6)



31-25
(B-5)



31-24
(B-6)



32-4
(B-5-チ)



31-11
(B-4-1)



32-11
(B-3)



32-17
(表)



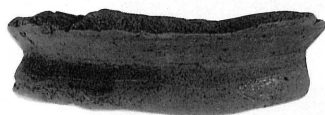
32-18
(B-6)



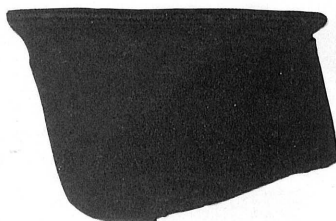
32-19
(B-3)



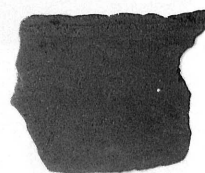
32-20
(B-6)



32-21
(表)



32-22
(B-5-ス)



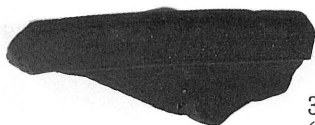
32-23
(B-6)



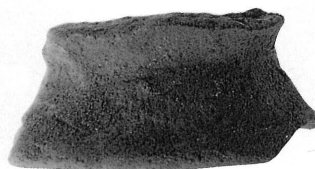
32-24
(B-6)



32-25
(B-4)



32-27
(B-6)



33-2
(B-6)



33-3
(A-5)



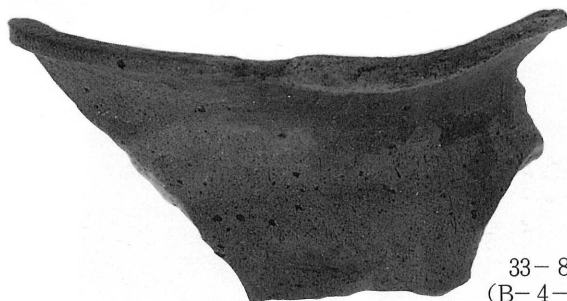
33-4
(B-5-ス)



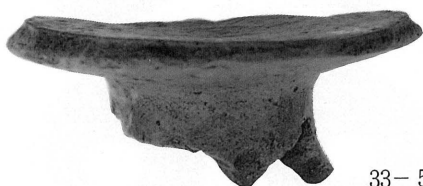
33-6
(B-5)



33-8
(B-4-ト)



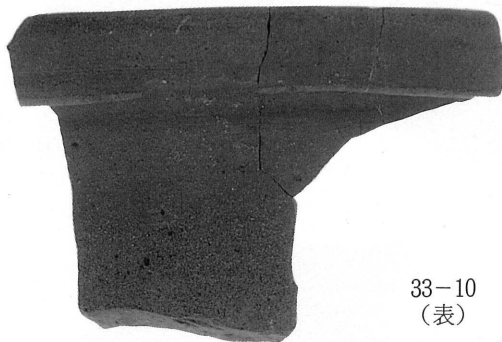
33-5
(B-4-ト)



33-9
(B-4)



33-10
(表)



33-11
(B-4)



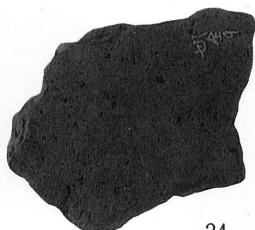
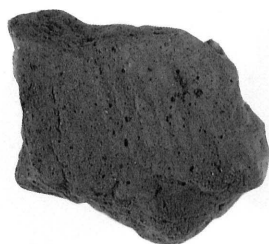
33-12
(A-3)







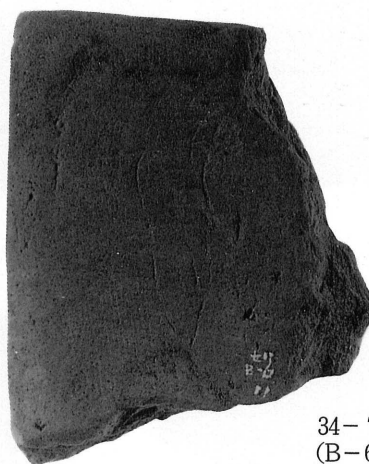
34-4
(A-2)



34-5
(表)



34-6
(表)



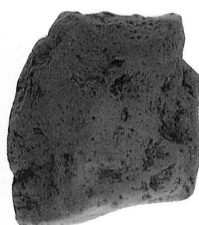
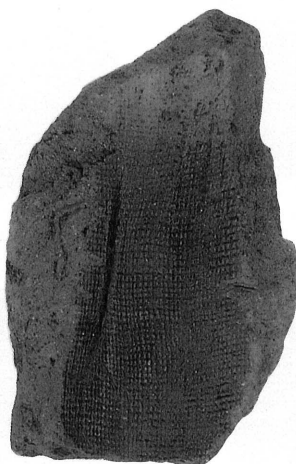
34-7
(B-6)



34-9
(B-5)



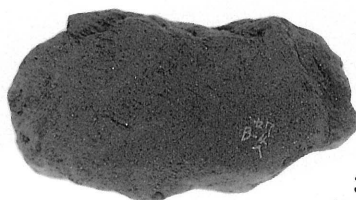
34-8
(表)



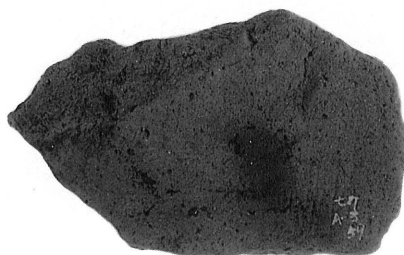
34-10
(表)



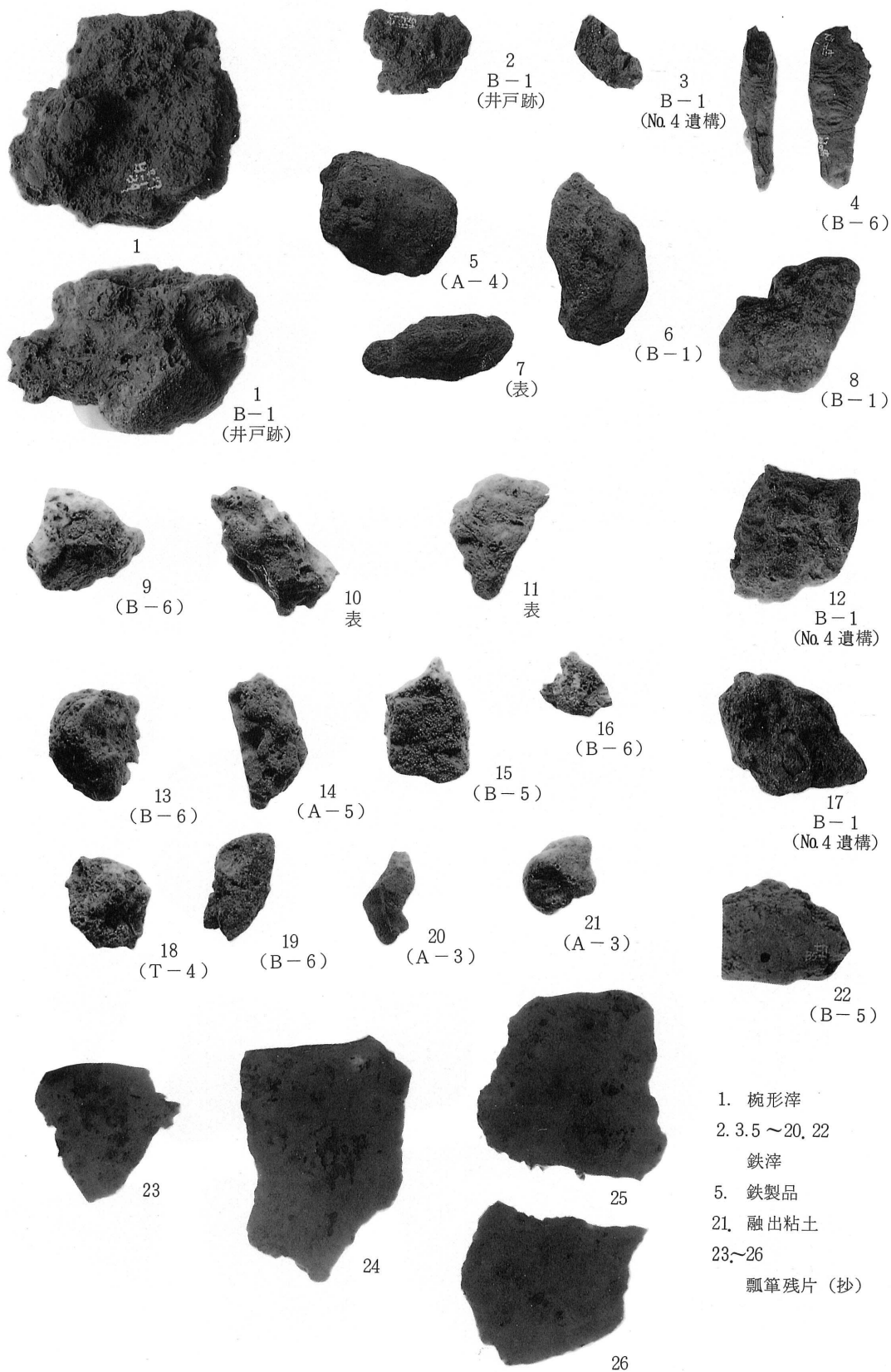
(B-4)



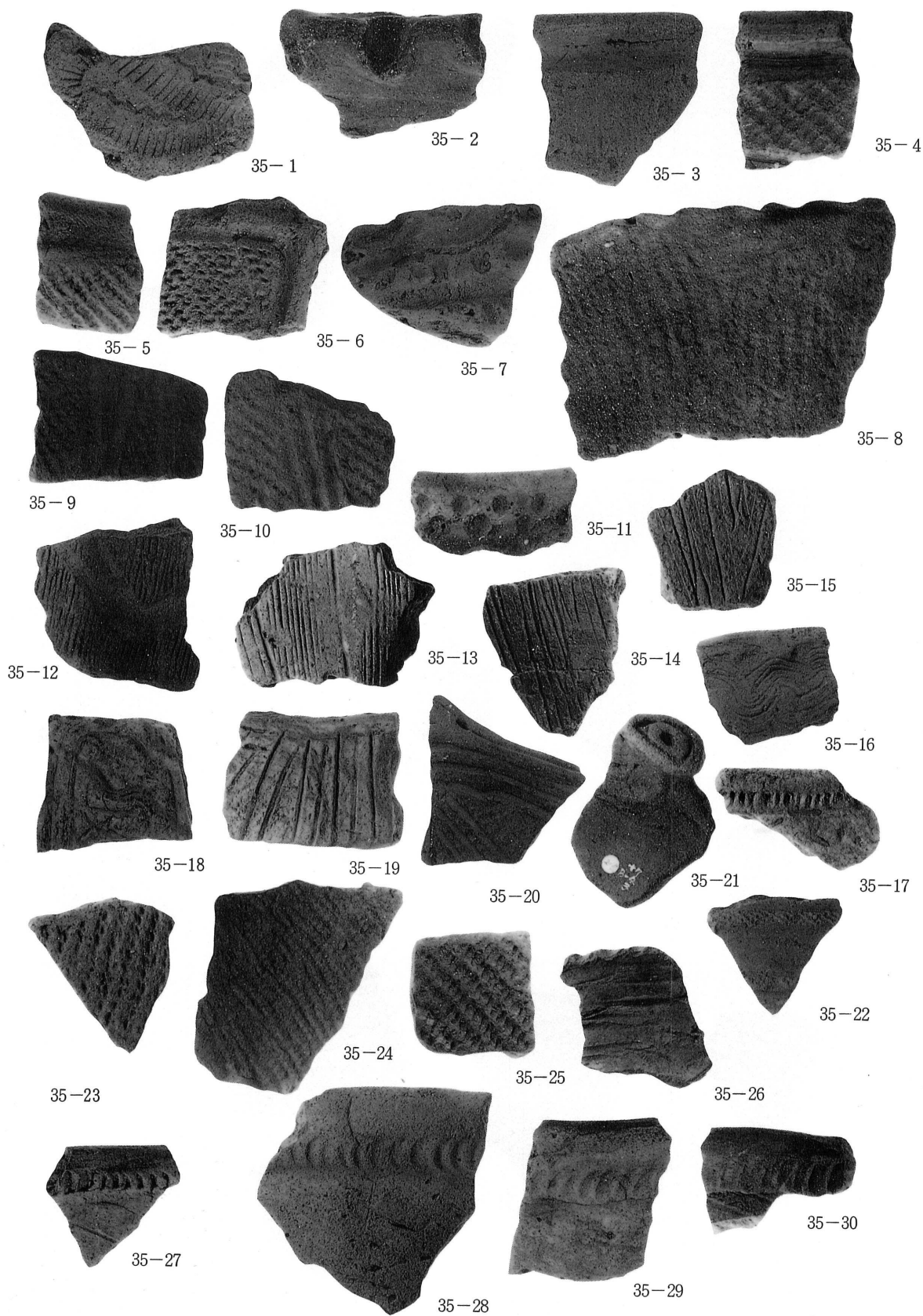
34-12
(B-4-へ)

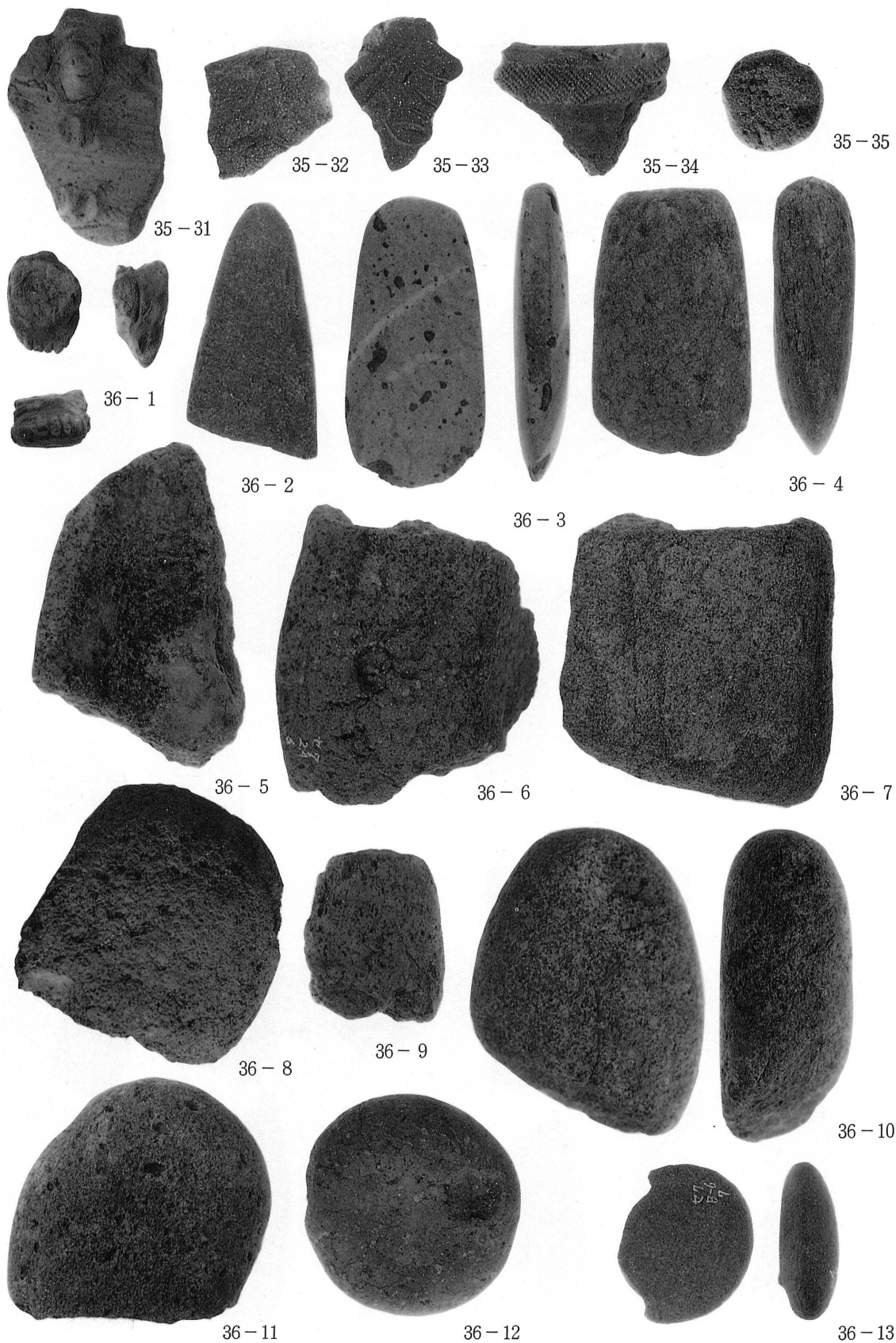


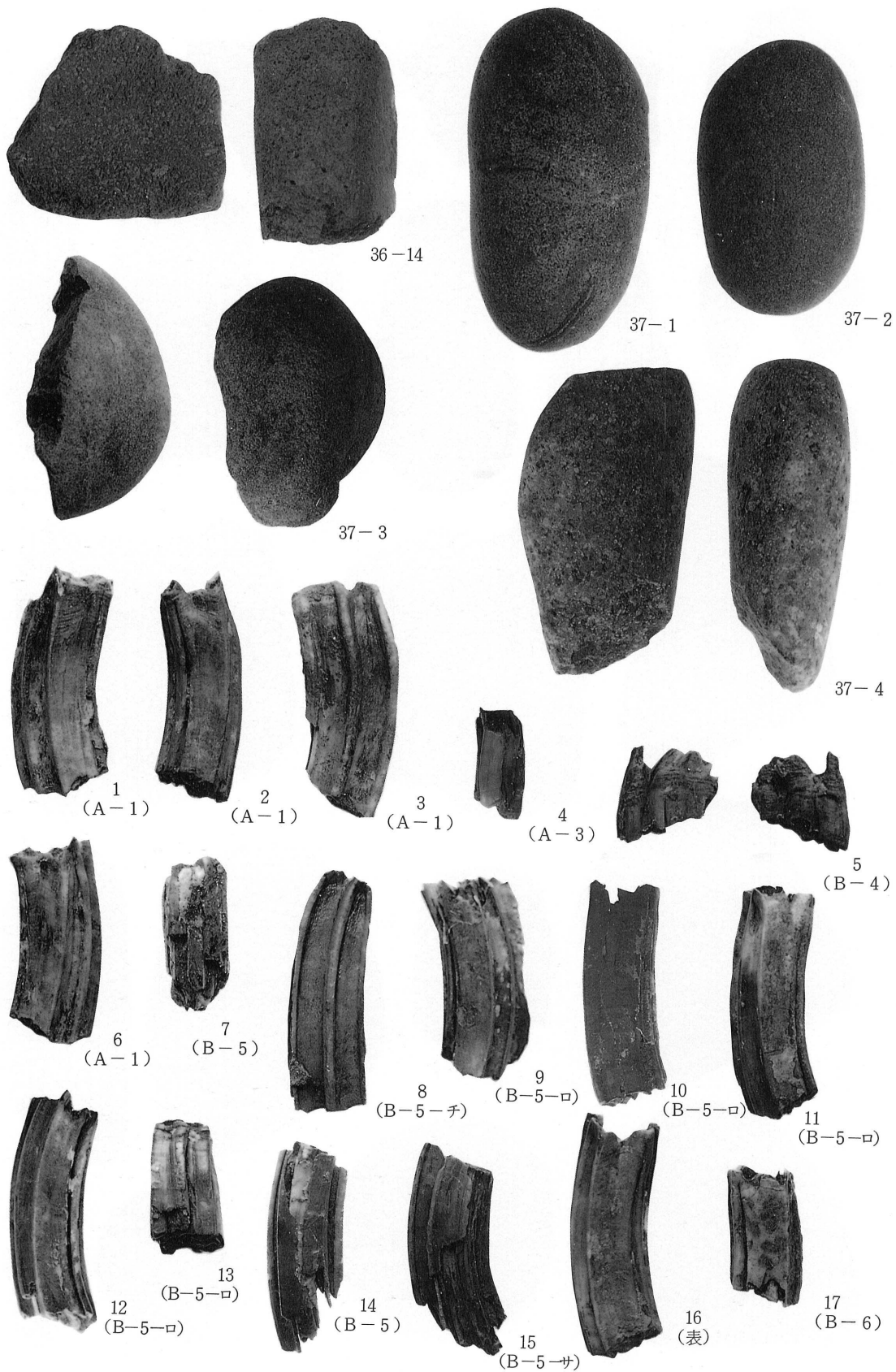
34-11
(A-3)



1. 碗形滓
2. 3.5 ~ 20, 22
鉄滓
5. 鉄製品
21. 融出粘土
- 23 ~ 26
瓢箪残片 (抄)









1. 基本土層



2. 福増3号墳表土除去後（西側から）



1. 福増3号墳（西南から）



2. 福増3号墳（西側から）



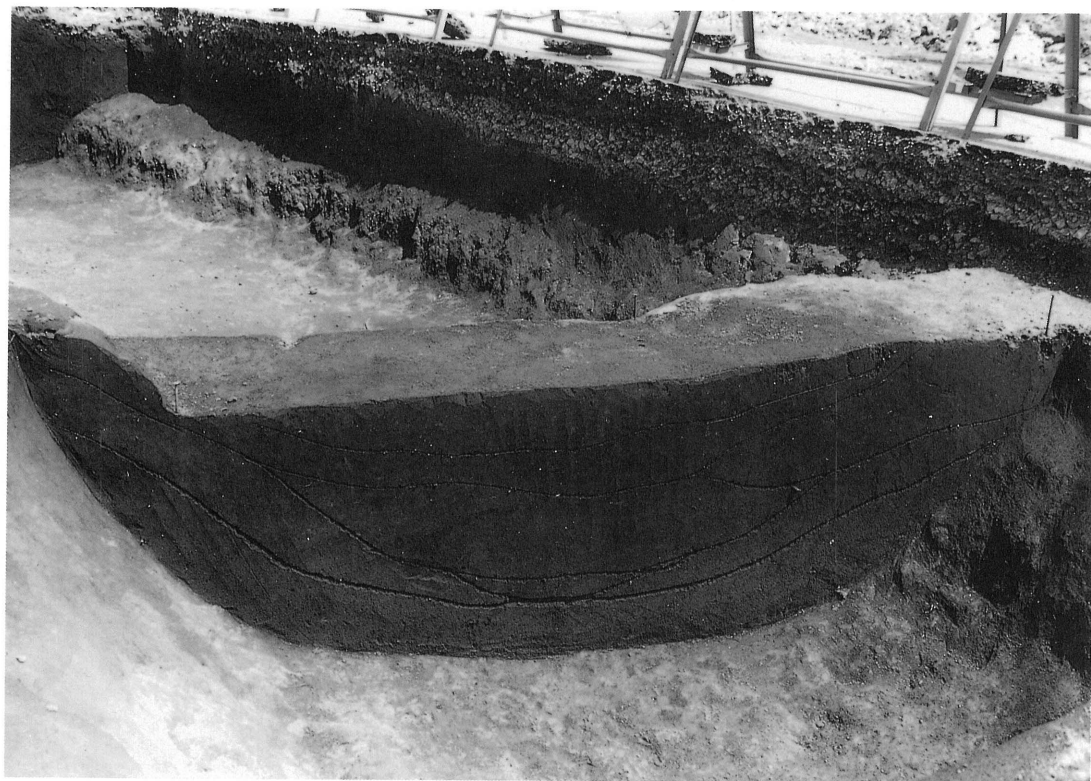
1. 福増3号墳墳丘調査状況（西南側から）



2. 福増3号墳墳丘盛土構築状況



1. 福増3号墳填丘盛土構築状況



2. 福増3号墳周溝内覆土堆積状況（東側）



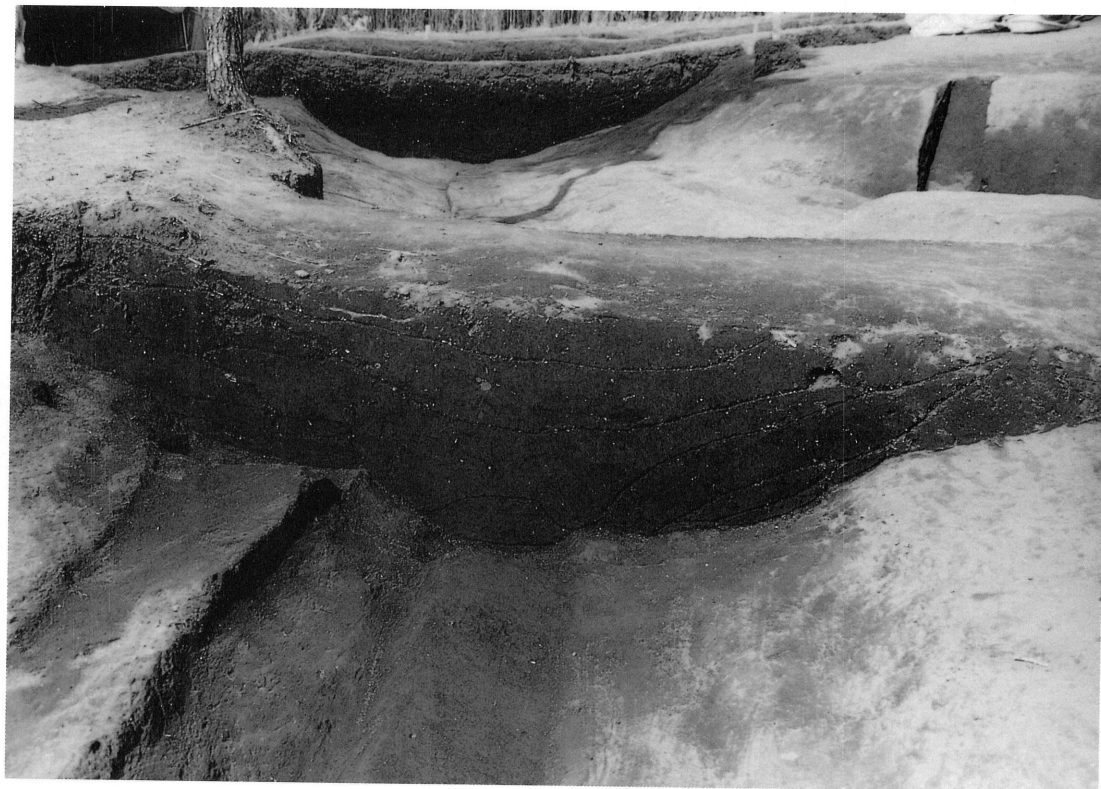
1. 福増3号墳周溝内覆土（南側）およびNo.3遺構覆土堆積状況



2. 福増3号墳周溝内遺物出土状況



No.1 遺構（西側から）



No.1 遺構内覆土堆積状況 - 1



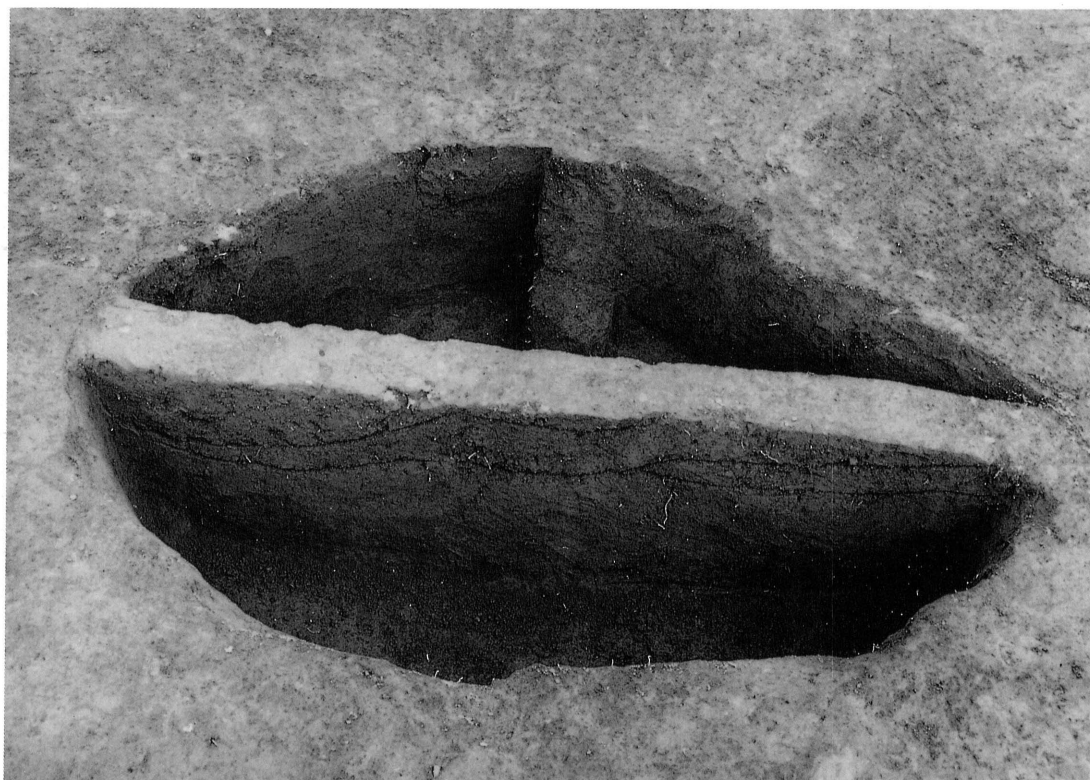
1. No.1 遺構, No.2 遺構内覆土堆積状況 - 1



2. No.1 遺構, No.2 遺構内覆土堆積状況 - 2



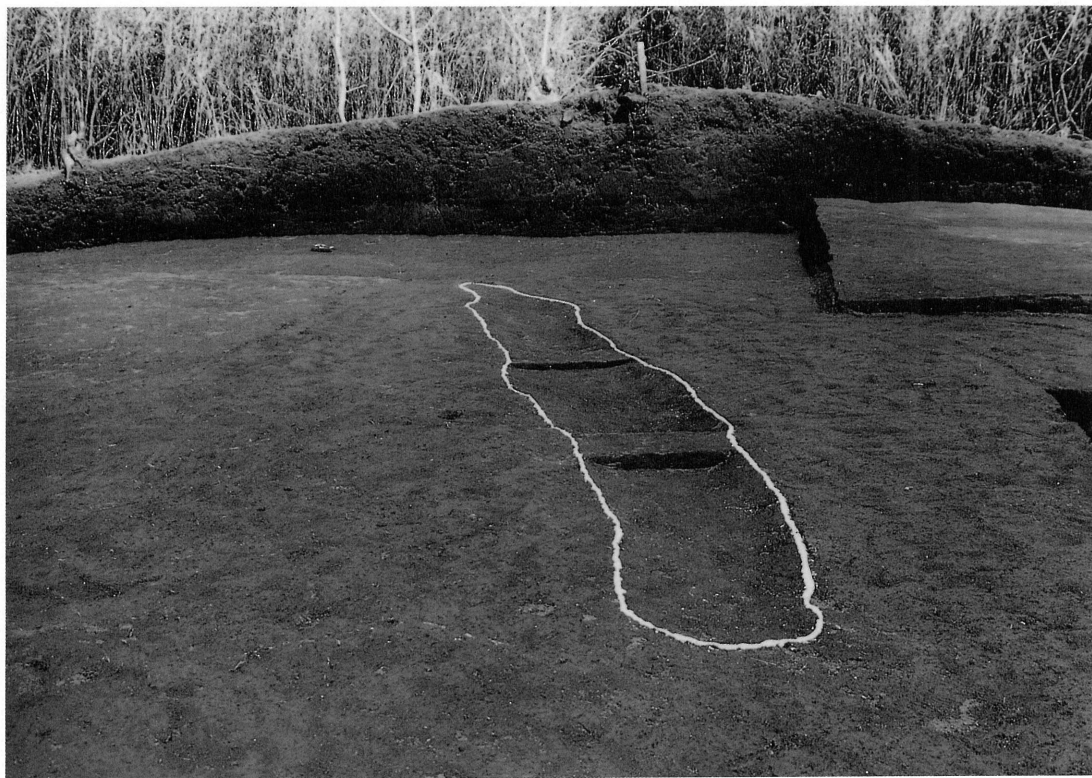
1. 福増3号墳周溝内覆土（西南側）およびNo.3遺構覆土堆積状況



2. No.4遺構内覆土堆積状況



1. No.4 遺構（東側から）



2. No.5 遺構（南側から）



1. No.6 遺構覆土堆積状況



2. No.6 遺構（西側から）



1. B区全景



2. No.7 遺構（西側から）



45-1



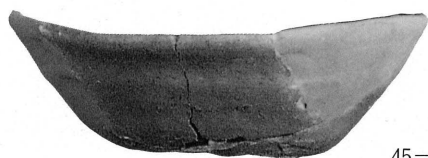
45-2



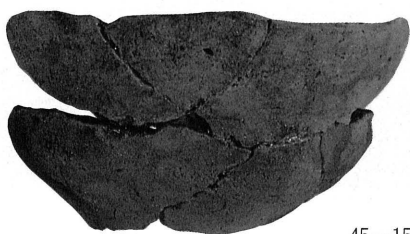
45-3



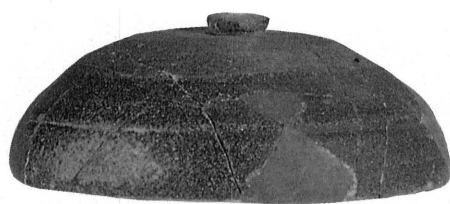
45-10



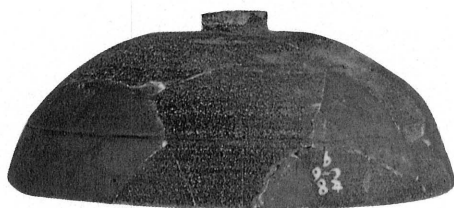
45-17



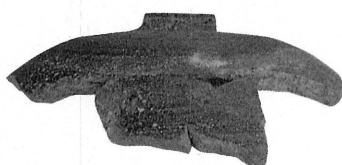
45-15



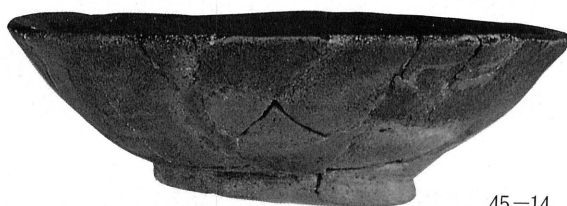
45-4



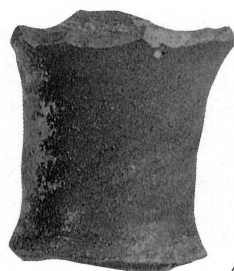
45-5



45-6



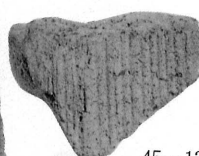
45-14



45-16



45-11



45-13



45-12



1



2



3



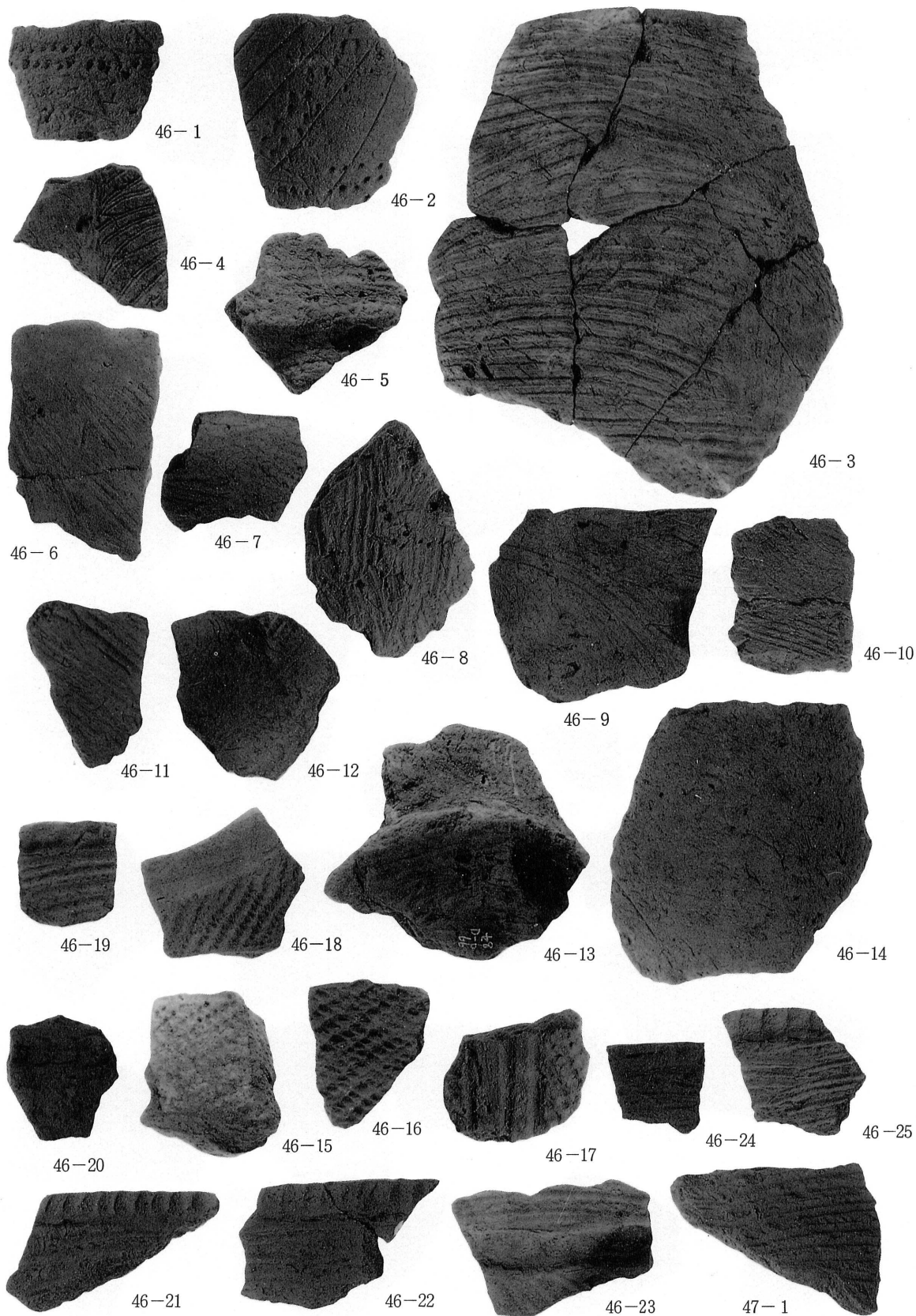
4

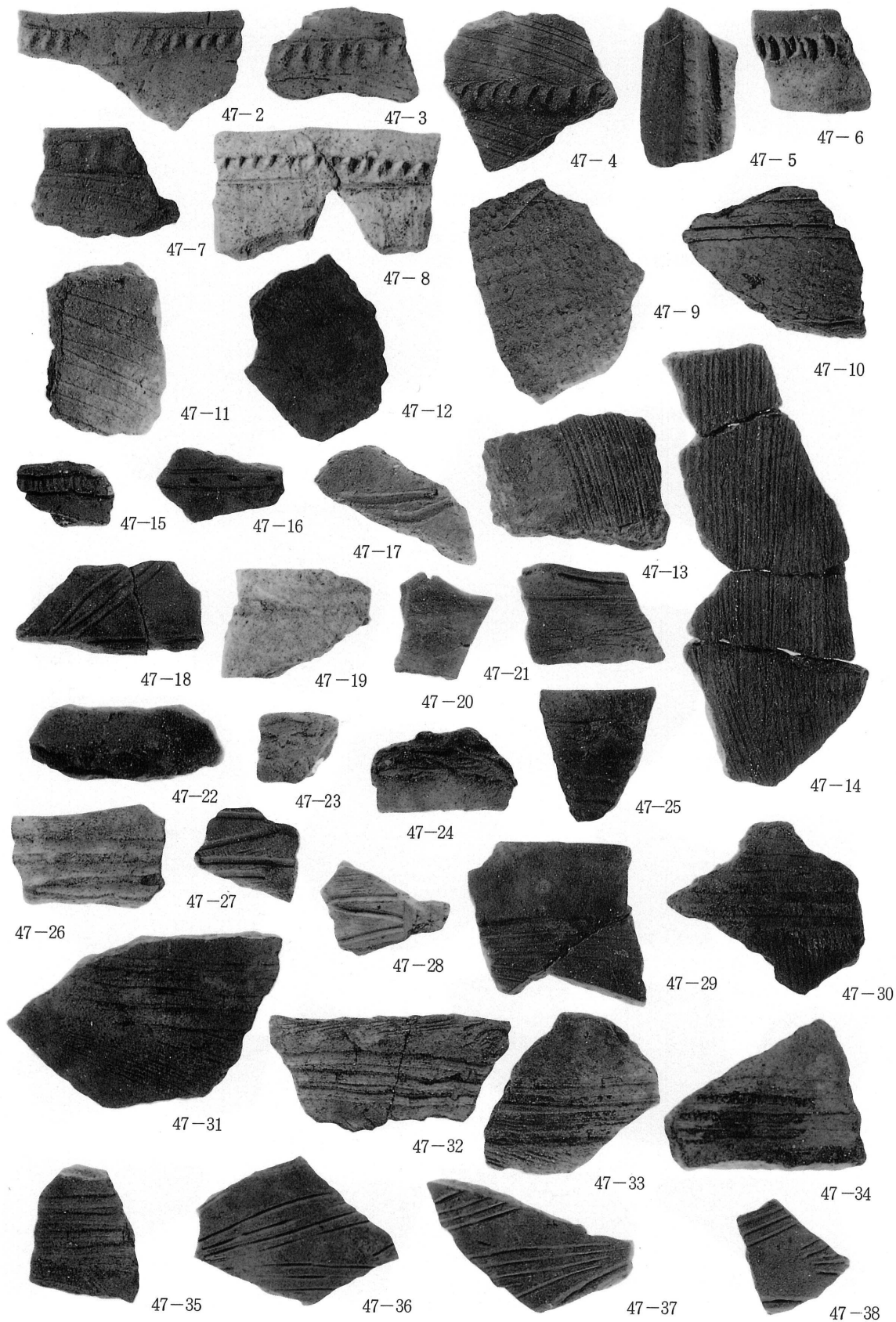


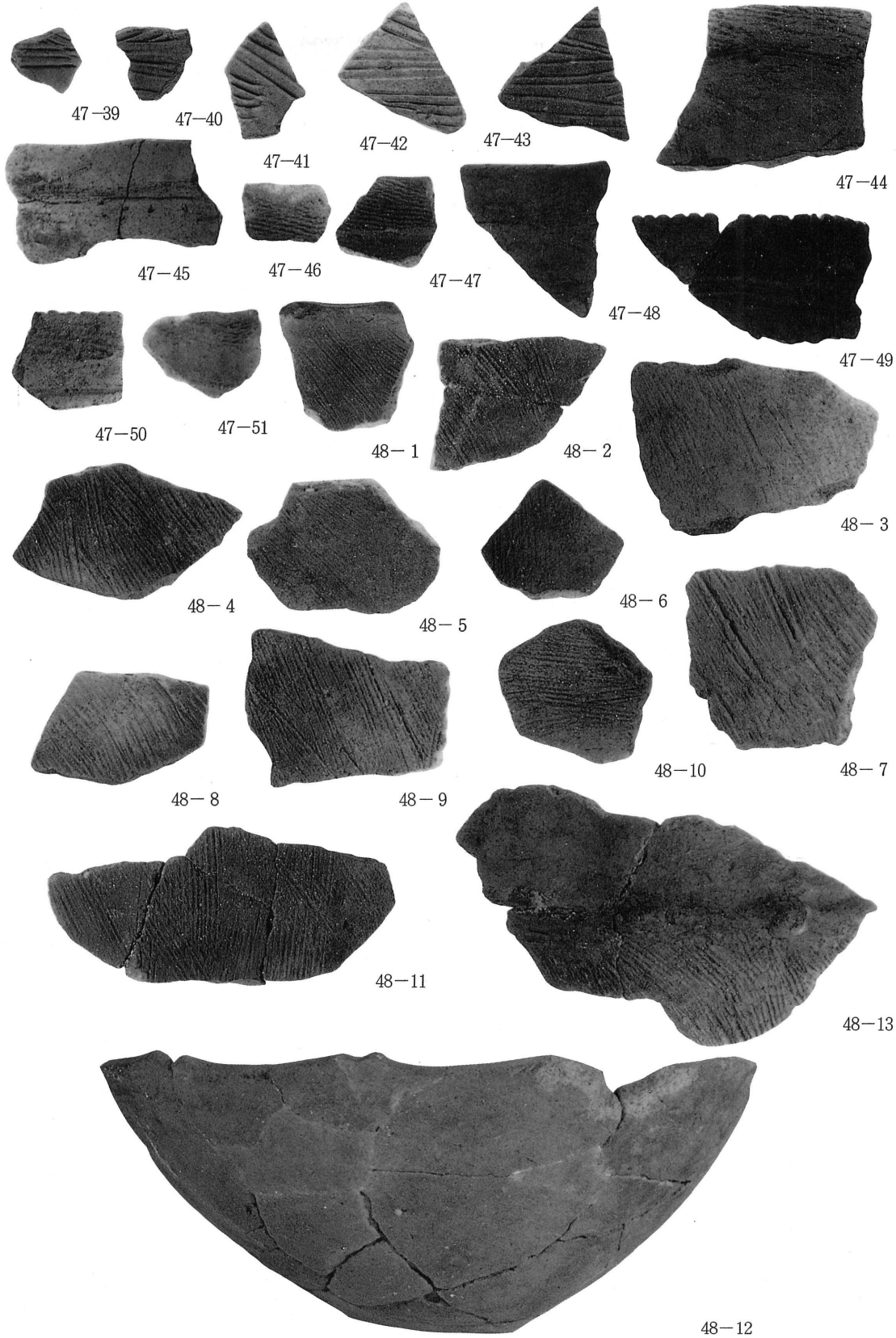
5



6







—— 千葉県市原市 ——

池ノ谷遺跡・福増遺跡

昭和60年3月23日 印刷

昭和60年3月30日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 清 掃 施 設 課
財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市馬立817番地

印 刷 三 陽 工 業 (株) 市 原 支 店

千葉県市原市五井5510の1

T E L 0436(22)4348